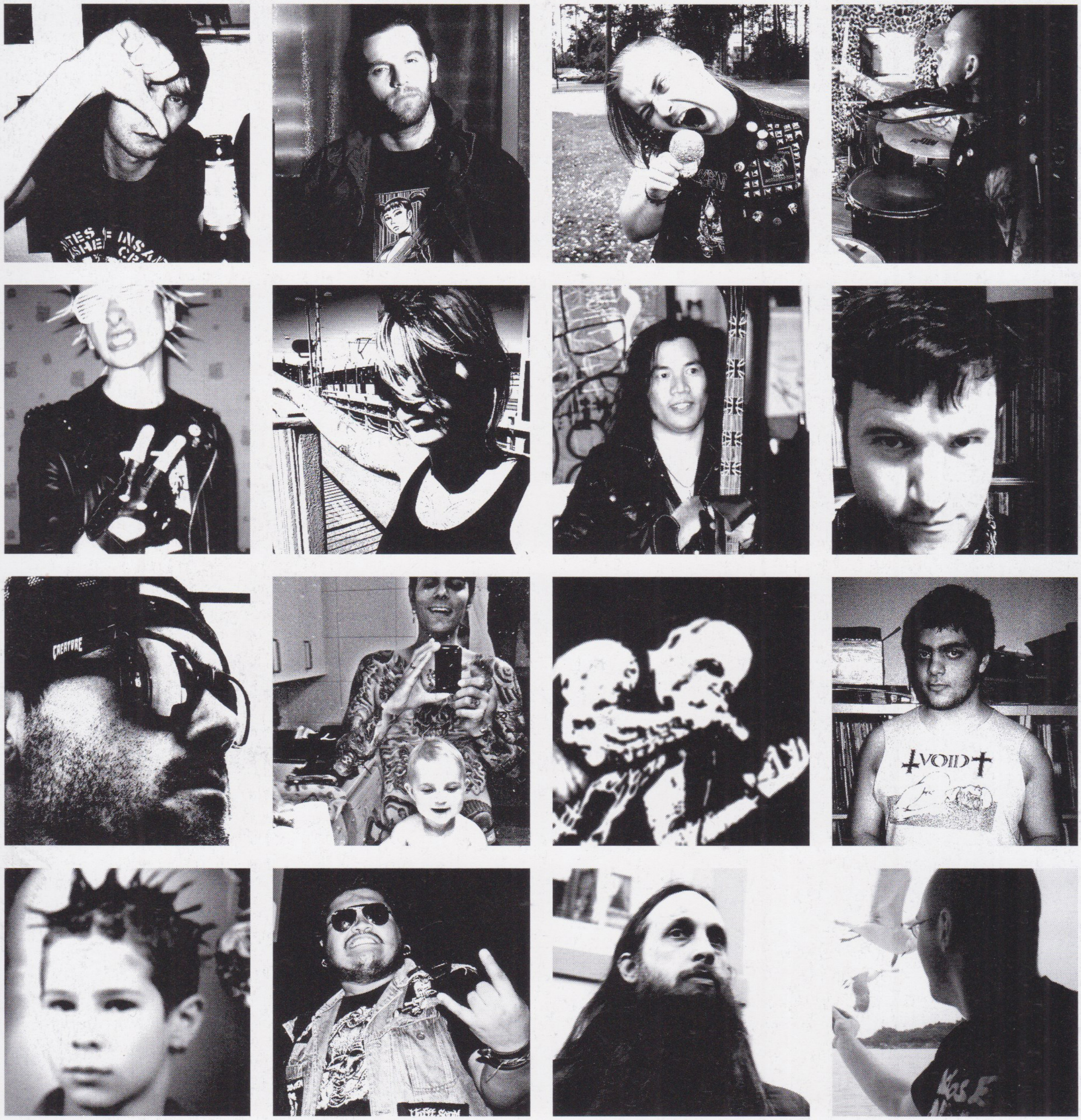
ONE YEAR OF HELL VOL.7

EL ZINE



WONDERFUL or SCUM LIFE of 16 PUNKS

PERSONAL PUNK history

Contents vol.7

P03 PERSONAL PUNK HISTORY
P25 EXTINCTION OF MANKIND
P29 IZUMI-MOTION FROM THE SLOWMOTIONS
P32 ACROSTIX
P35 FLO FROM HEARTFIRST
P39 AXEWIELD
P41 SYSTEMATIC DEATH BACKDROP EU TOUR 2010 REPORT
P45 WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING - WORLDWIDE
P47 GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE
P49 MAKING SOME COOL NOISE
P50 METALPUNK - YAROUZE!
P53 SAKATA - RUIDE - NO - TOBBIKIRI - TAIDAN
P56 THE THUNDERBOLT!
P57 LASHING SPEED DEMONS
P59 KISS THE DISC
P61 DISAPPEARANCE FROM REALITY - BERLIN
P66 EDITOR'S NOTES/BACK ISSUES


TAMA.
Marshall

PERSONAL PUNK HISTORY Introduction

一周年ということで、何か特集記事を用意できないものかと頭を悩ませること数日──。

私は全てをすっかり投げ打って「伝記　谷崎潤一郎」(野村尚吾・著/六興出版)を読みふけり、束の間の現実逃避に勤しんでいた。この手の本には必ずと言っていいほど併記されている個人年譜が好きなんだよな～。そうか、「刺青」を発表した明治43年当時、谷崎はまだ25歳か、ド変態だな…。
その瞬間、私は閃いた。パンクスの個人年譜、これだッ!
日経新聞に掲載されている「私の履歴書」という連載(読んだことはない)をそのまま英語にして、タイトルはMY PERSONAL HISTORY。ちょっと弱いな、うん、PUNKと入れておこう(安易)、というわけでPERSONAL PUNK HISTORYに決定。

人に歴史あり──。どういう経緯で、あの人、あのバンドの今があるのか。楽しんでもらえると幸いです。
極力、有名無名キャリア問わず国もバラバラにしましたが、ついスウェーデン、アメリカ、そして何故かロシアが多くなってしまいました。尚、執筆をオファーした時にある程度のフォーマットはこちらから提示しましたが、文字数は指定しなかったため、人によって短かったり長かったりと滅茶苦茶です。そんなところにも、個々の性格が現れているな～と。
あと、明らかにジョークを交えて書いている人もいるので、本気にされないようご注意下さい。

オマケとして、EL ZINE HISTORYを以下に書いてみました。が、たかだか一年、…歴史も糞もないですね。

PERSONAL PUNK HISTORY ZERO

2009(7月31日) 創刊号、Vol.0発行。
想定していた以上に画像が暗く出力されて凹む。実は表四(裏表紙)にも薄く画像を入れていたのだが、それももちろん出力されず。内心、一冊だけケジメとして出して終わりにしようかと思っていたが、仕上がりに満足出来なかったので2冊目にとりかかる。
大越さん、行川さんの連載スタート。

2009(11月10日) Vol.1発行。
数年前に質問事項を送ったっきり音沙汰のなかったAngusから、SCATHAインタヴューの回答が届き掲載。印刷所から「黒ベタのページが多いから納期がいつになるか分からない」という不思議な連絡が来たので、Vol.2からは印刷所を変更。
ONIGIRIさん/WATERSLIDEやYUKIさん/SP RECORDSらによる連載スタート。

2009(12月25日) Vol.2発行。
何となくメタル・パンクな感じになる。表四にサンタクロース姿のRYDEENの双子さんを薄らと掲載するが、反応してくれたのは中村さん/ANSWERと友人一人だけだった…。
高山さん/FRAMTID、二ツ木さん/G.A.T.E.Sの連載スタート。

2010(2月19日) Vol.3発行。
何となく女性ヴォーカルな感じになる。こっそり続けていた趣味丸出しで場違いすぎる探偵小説のコーナーを、Soくん/HARDCORE SURVIVESとモーリー/OVERTHROW　RECORDSと僕との三者雑談をもって終わらせる。表紙を黒白交互にしないといけないような義務感を感じ始めた…。
MUNEさん/PAINTBOXの連載スタート。

2010(4月1日) Vol.4発行。
某レコード屋さんのメタル・コーナーに置いてあった、という目撃談を友人から聞く。きっと表紙のせいだと思う。TRUJACA FALAのインタヴューは良い内容になった。
以降、サカタさん/VEKTORに対談記事を、SOUICHIさん/UNDER THE SURFACEにインタヴュー記事をとってもらうようになる。

2010(5月1日) Vol.5発行。
月刊ペースで出してみた。WARVICTIMS/D-TAKT&RAPUNKはDISCHARGEがそんなに好きじゃない、ということが分かって面白かった。ALLIANCEのインタヴュー中にモーリーから電話がかかってきたので、そのまま記事に書いたら案の定「勝手に俺のこと書くな」と叱られた。ここ見られたらまた叱られる(泣)。

2010(7月10日) Vol.6発行。
ヨーロッパの余韻に浸る暇もなく、一ヶ月遊んでいたツケとして、猛烈に慌ただしく作る。
次を7月31日に出せば一周年記念号になるな～、とうっかり思いついて、それを後記に書いてしまう。結局、今号を不眠不休で作るハメに…。

EL ZINE JAPAN

PERSONAL PUNK HISTORY ONE

SWEDEN

Jannicke/ DISCO VOLANTE FLYKTPLAN DVC RECORDS



1979(0歳) USA、カリフォルニアのロサンジェルスで誕生。

1981(2歳) 父がスウェーデン人で母がノルウェー人だったので、スウェーデンのストックホルムに移ったの。

1993(14歳) ASTA KASK、STREBERS、CHARTA 77などのスウェディッシュ・パンク・バンドを見つけた頃ね。ストックホルムのパンク・ショー/フェスティバルにも行ったわ。この時点では私の音楽の好みはそれ以上は進まなかったけど、パンクには強い魅力を感じてた。
14歳の頃って、誰もが挑戦しようと思う時だし、自分が何者なのか、世界の中の自分の居場所がどこなのかを考える時期よね。私はパンクの反抗的な面が好きだった。いつも居心地の悪さがあったし、どこにいてもここじゃないと感じていたから。

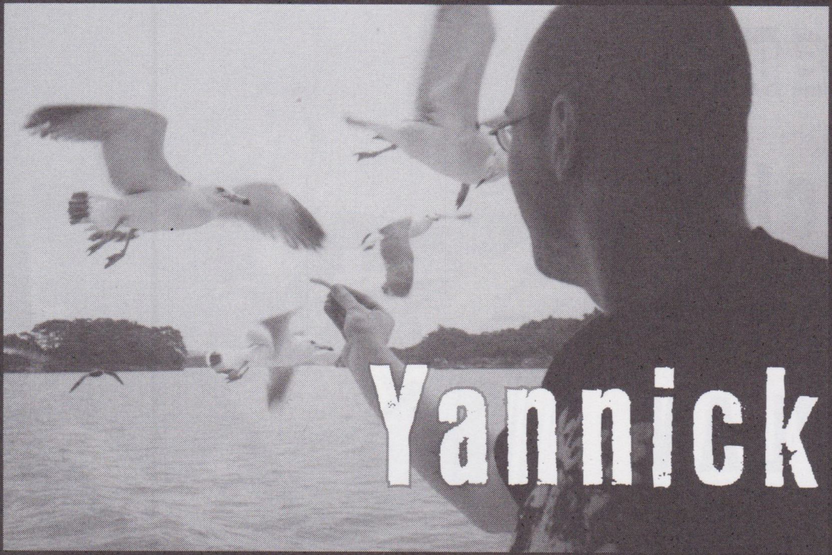
1994(15歳) 私の音楽面の生活が劇的に変わった年。ライオットガール・ムーヴメントに衝撃を受け、HOLEやL7、BABES IN TOYLANDのようなバンドを知るようになったわ。今でも大好きなバンドよ。確実に彼らは私の人生を変えたわね。共感し、私も何かやってみようって気持ちを駆り立ててくれた…ギターを手に取り、自分のバンドを始めようと。今もずっとそういう女性たちのほとんどが、よりパンクな生き方をしているわよね!

1996(17歳) 初めてバンドを組んだのが、この年だったと思う。私と男子3人、へんてこなロック・ミュージックをプレイしていたな。カセットテープでデモをリリースしたけど、誰も持ってないことを望むわ、ハハハ!

2001−2009(22−30歳) 数年の間にいくつかのバンドで手当たり次第にプレイした後に、DISCO VOLANTEからリード・ギタリストとして加入しないか声をかけられた。もちろん引き受けたわよ。2001年のことだったかな。2ヶ月かかって1st 7"をレコーディングし、同じ年にインディー・レーベルからリリースしたわ。注文がきているのかとか、その先のことを把握するのは難しかったけど、シングルを2枚とフル・レングスのアルバムも2枚出したの。自身のレーベルのDVC RecordsとDIYレーベルのNot Enough Recordsからね。
ライヴはとにかくたくさんやったな。バンドにはショーを断らないってポリシーがあったのよ。スウェーデン、デンマーク、ドイツ、イタリア、オランダ、UK、日本、USAにもツアーしたわ。250回以上はショーをやっているんじゃないかな。このあたりの時期は、DISCO VOLANTE、KONTROVERS、SKITKIDSのメンバーからなるFLYKTPLANでサイド・プロジェクトもやっていたわ。10曲ほどレコーディングしてるけど、作品は出していない。でもUKをツアーし、2回ショーをやったわ。スウェーデンとデンマークもちょっと廻ったわね。
この頃の何年間は、KYLESA、MUNICIPAL WASTE、THE VECTORS、THE DYNAMITE、GORILLA ANGREBや他にもたくさんのバンドとちょくちょく共演していたな。私はマルモっていうスウェーデンの南にある街に住んでいたの。ここにはパンクスが大勢暮らしていたわ。
巨大な倉庫を借りて、ショーを企画したり、パーティしたりして、そこは独創的な活動が行われる場所になっていた。私はメタル/パンク・バンドでプレイしたいと思っている10代の女の子たちにギターの先生として教えていたこともあったわよ。音楽に関するあらゆることに関わっていたわね。

2010(31歳) 今のところ、DISCO VOLANTEは中断している。私はフェンダーのギター技術者としてフルタイムで働いているわ。今年は休みを取り、9月には初めてママになる予定よ!

PERSONAL PUNK history two



USA

Yannick/Loser

(TRAGEDY,FERAL WARD)

1974(0歳) カナダはケベックの田舎で生まれる。

1985(11歳) オタワにあるイギリスの学校に通うようになり、そこで俺を仲間に引き入れた先輩たちと出会うことになる。彼らはDISCHARGEやDISORDER、BGK、GBH、ELECTRO HIPPIESなどの速くてやかましいハードコアに夢中だった。テープをくれたり、ギグに連れて行ってくれたな。

1986(12歳) ますますのめり込んでいき、パンク/ハードコアに夢中になっていった…NEGATIVE APPROACH、MINOR THREAT、SUICIDAL TENDENCIES、SUBHUMANS、EXPLOITED、DEVIATED INSTINCT、CELTIC FROST、SLAUGHTER、SACRIFICE、KAFKA PROCESS、ANTI-CIMEX、AMEBIX…。ヨーロッパやアメリカのハードコアだった。

1989(15歳) まだ、育った小さな街に住んでいた。俺たちは機材を借りて、DECADENCEの「Slam」(『This is Boston Not LA』LP収録)やLOCAL DISTURBANCEの「No USA」(『PEACE/WAR』LP収録)のようなシンプルな曲を演奏していた。2010年になった今でも、週末にベースを弾いていたあの頃より、ギターは下手だな!

1991(17歳) 初のバンドの作品をリリース。

1993(19歳) オタワで暮らすようになる。UNION OF URANUSを結成し、DIYショーの会場をスタートして、地元のシーンにカツを入れてやった。

1994(20歳) (UNION OF)URANUSが『Disaster by Design』をレコーディング。俺の人生、最大の画期的事件。他の誰でもなく…俺はレーベル、Great American Steak Religionを立ち上げ、(主に)地元のバンドのレコードを出すようになる。シーンは猛烈な活気を帯びていく。俺は世界中のハードコア/パンクにとりつかれていった。

1995(21歳) COPOUTのカナダのショーを企画したんだが、そこでToddとPaulと出会う。この年もたくさんのレコードをリリースした。

1996(22歳) オフセット印刷会社のNewtown Lithoを始めた。すぐその後、HIS HERO IS GONEに加入し、もの凄い数のツアーに出るようになる。そのおかげで、仕事は散々だった。

1998(24歳) 仕事を畳む。自分の手に余ることをしていた。その後の人生にも、こういうことが繰り返し起きることになるんだよな。

1999(25歳) ツアーをやり過ぎて、俺たちの関係の溝が深まってしまった…HIS HERO IS GONE解散。この年もレーベルはかなりの数のレコードを出した。FROM ASHES RISE、HIS HERO IS GONE、BORN DEAD ICONSなど。

2000(26歳) TRAGEDYの初のショーは、俺たちみんながポートランドに移り住んだ数ヶ月後に行った。ツアーも繰り返した。金もないし、食い物もなかったな。俺はカナダ人で、USAで仕事を見つけることができなかったんだ。

2001(27歳) Lydiaと暮らすようになる。6年後に結婚することになろうとは、この時は2人にもわからなかったよ。

2002(28歳) TRAGEDYのツアーはノンストップで行われた。2nd LPもリリースした。Feral Wardは今では俺の人生の大きな部分を占めている。

2005(31歳) Feral Wardがフルタイムの仕事になる。

2006(32歳) 足を骨折し、8ヶ月間歩けなかった。ポートランドに定住する金もつき、モントリオールに戻らなければならなくなっちまった。自分でギプスを外してみたら、足は腕よりもやせ細ってた。

2007(33歳) 結婚。

2008(34歳) 合法的にUSAで暮らせるようになる。

2009(35歳) 家を買った。2039年まではまだ銀行の所有だが、この不景気の時代にね。

2010(36歳) 印刷の仕事に戻ったんだ。Feral Wardはリリース毎に金を失っていく。俺はずっとハードコア/パンクが好きでたまらない。25年間、ずっと夢中だったし、それ以上のものがないこともわかっている。

PERSONAL PUNK history thREE

GERMANY

Wiho/BURIAL

1979(0歳) ドイツ、オスナブリュック近くの小さな街で生まれた。

1989(10歳) 父親の持っていたCLASHの『London Calling』のテープを聴いたよ。好きだったけど、AC/DCのようなハードロックに夢中になっちゃったね。

1993(14歳) 学校の友達が、BAD RELIGIONやニューヨーク・ハードコアみたいな商業パンクを教えてくれた。ハハハ。

1996(17歳) 商業的なハードコア・パンクなんかにはもう飽き飽きしちまって、エクストリーム・メタルやノイズコア、グラインドコアにのめり込んでいったな。

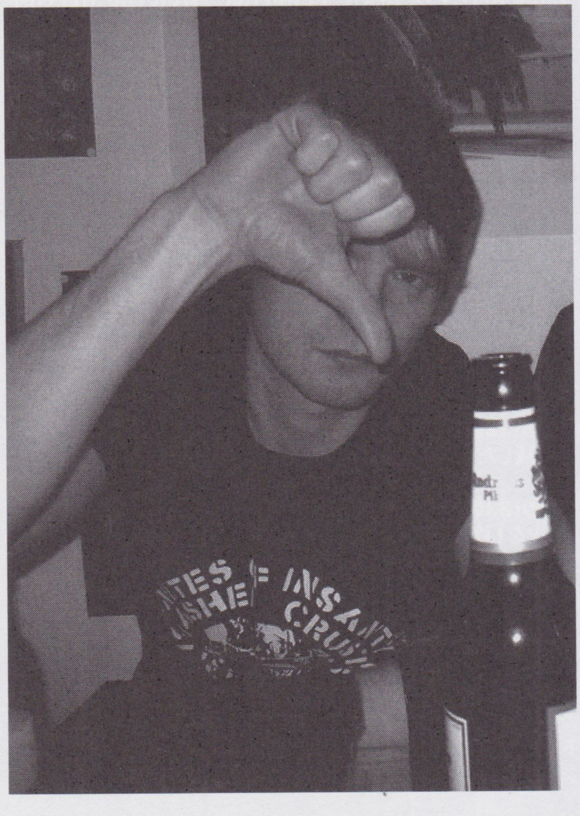
1997(18歳) ABLATIVっていう初めてのバンドをスタートした頃だな。パンク・ロック色が強かったけど、ドラムのやつは速いのが叩けなかったんだ。でも俺はノイズコアをやりたかったんだよ。それに俺はベースを担当していたが、好きになれなかった。半年後、ギグもやらずに解散しちまったよ。

1999(20歳) 昔から友達だったHardware RecordsのChrisと新しいバンドを組んだ。PISSED YOUTHと名づけ、俺はヴォーカルをやることになったよ!ベースを弾くより、歌うほうがずっと楽しかったな。もの凄ぇ速いハードコア・パンクをプレイした。最初は歌詞のようなものはなかった。叫びまくるだけ、それが良かったよ。ハハハ!
この頃から、世界中の本物のハードコア・パンク・バンドを次々と見つけ出していったな。特に日本のバンドをね。NIGHTMAREの1st LPやヨーロッパ/USの80年代のハードコア・パンクをよく聴いていたよ。PISSED YOUTHは主にドイツで何回かショーをやったね。ライヴじゃ、KURO、CONFUSE、NEGATIVE FX、INFESTのカヴァーもやったぜ!ドラムのやつにドラッグの問題があったり、俺がビーレフェルトって別の街へ移ったりで、このバンドは2002年に解散することになったよ。

2004(25歳) 俺がオーガナイズしたSEVERED HEAD OF STATEのギグでFabianに会ったんだよ。彼は自分のバンドをやっていて、ヴォーカルを捜していると話していた!またバンドで歌うことを考えたら興奮してきて、俺が歌うのはどうか聞いてみたのさ!初練習のために、俺はBASTARDの「The Way To Survive」に強い影響を受けた歌詞を書いてみたんだ。
これはBURIALとして初の曲になったよ、「SURVIVE」って曲だ。ハハ。
俺はビーレフェルトのDIYの会場でショーをオーガナイズしているDIYコレクティヴの中にいたから、自分の好きなバンドのギグを企画するのは難しくなかった。それで、自分たちの2回目のショーでTRAGEDYと一緒にやったんだが、本当に楽しかったね!CRUDEの初のヨーロッパ・ツアーのショーも企画したよ!ここ何年もの間、ツアーをしてきたおかげで、ヨーロッパにたくさんの友達ができた!ドイツのStachelとデンマークのJakobの2人が2006年のNIGHTMAREのヨーロッパ・ツアーをオーガナイズしたよね!NIGHTMAREと何度かプレイする機会を得て、友達になったよ!2007年には日本に招いてくれた!夢が実現したんだ!

2009(30歳) デンマークのLOVE POTIONとドイツ、オーストリア、チェコ、スイス、スロベニア、ベルギーをツアーした。LOVE POTIONのドラムのSteffenとは昔からの友達だったんだ。2005年に彼が以前にやっていたDEATH TOKENのツアーで共演したことがあるからね。

2010(31歳) この冬にUSAのウエストコーストをツアーする予定がある。今からワクワクしているよ。ちょうど今、非常階段のようなノイズ・ミュージックやLa Vida Es Un Musから出たGLAMの7"のようなパンク・ミュージックを聴いている!LOVE POTIONのヴォーカルのKlausとノイズのサイドプロジェクトを始める計画を立てているところだよ!ハーシュノイズやパワー・エレクトロニクスになるだろうな。俺がヴォーカルをやることになるんじゃないかなと思う。
俺なんて、できの悪い、ひでぇパンクさ!やりたいことをやろうぜ!



PERSONAL PUNK history four

Rani/POOCHLATZ
LIETTERSCHPICH DIET
SPECIAL OLYMPICS
HEART&CROSSBONE

ISRAEL

1976(0歳) イスラエルのエルサレムにて誕生。

1990－1991(14－15歳) Rami Fortisの『Plonter』を買った…極初期のイスラエルのパンク・アルバムで、1978年にリリースされた作品だ。それと、イスラエルのポスト・パンク・バンド、THE TOP HAT CARRIERSの1stテープやPLASTIC VENUS(ポスト・パンク/ノイズ・ロック)の1stアルバムも買ったな。
SHALOSH HAIT(ポスト・パンク)やDURALEX SEDLEX(インダストリアル)のショーにも何度も通った頃だね。

1992(16歳) SMASH THE SILENCERという名前で人生初のハードコア・パンク・インダストリアル・バンドを結成したんだ。
その頃の僕たちは、DEAD KENNEDYS、MINISTRY、HELMET、VIRGIN PRUNES、EINSTURZENDE NEUBAUTEN、BLACK FLAG、NINE INCH NAILS、THE YOUNG GODS、MUDHONEY、BAUHAUS、S.P.K、GODFLESH、SWANS、THE BIRTHDAY PARTYを聴いていたな。

1993(17歳) SMASH THE SILENCERが『Maximum Rock'n Roll』誌に取り上げられる。

1994(18歳) SMASH THE SILENCER解散。

1994－1997(18－21歳) 徴兵制のためイスラエル軍に入隊。国のために奉公しなければならなかった。全く誇れることじゃない。でもそれからは逃れられない、どんな場合でも。その期間は音楽活動はしていない。

1998(22歳) Avner Altman(REFUSE TO DIE)とCLEANSINGを結成した。2回ショーをやった後に解散しちまったけどね。

1999(23歳) VULTURES結成…インダストリアル・メタル・バンド…EPを1枚、FINKELSTEINとのスプリット3インチCDR、UKのMOMT Recordsが出したリミックス・アルバムをリリース。
2004年に解散したせいで、デビュー・アルバムはリリースしなかった。2006年に復活のショーとアルバムのリリースを試みてみたが、うまくことは運ばなかったな。

2000(24歳) テルアビブにあるThird Earレコード店で働き始めた。クビになっちまうまでの約8年半、そこで働いたよ。この頃は、ドゥームやスラッジ、ノイズ・ロック、あらゆる実験的な音楽のジャンルを発見していった時期だった。主にはメタル、パンク、インダストリアルな方向に発展していったよ。

2001(25歳) KATYUSHA KIDという名前で『O.K Katyusha』をリリースした年だ。IMMINENT STARVATIONやRADIOHEAD、DURALEX SEDLEX、RX(Martin AtkinsとOgre)なんかの曲をぶち壊して構築したような曲かな。

2003(27歳) Aviad AlbertとEran Sachsによる即興的なギグに参加した後に、思いがけず彼らとLIETTERSCHPICHを組むことになる。

2005(29歳) LIETTERSCHPICHは『Quasi』をリリースし、Luc Ferrariや他の実験的なアーティストと共に、北アイルランドで開催されたSonorities Festivalで演奏した。そのショーで録音した曲のいくつかが、デビュー・アルバムに収録されたよ。LIETTERSCHPICHはAviad AlbertがUSに旅立ったために、この年の8月に解散することになる。

2005(29歳)KATYUSHA KIDの2枚目のアルバム『Plastic Bags can be Dangerous』をリリース。

2006(30歳) POOCHLATZのデビュー・アルバム『Victims of Self Preservation』をイスラエル人アーティストのMaor Appelbaumと一緒にレコーディングしリリース。この年の10月に、レーベルのHeart&CrossboneにDavid OPPが参加。

2007(31歳) 猛烈に忙しい年になった。

V.A.『Feed Your Ego』…ノイズ/ノイズコアのコンピレーションCD(NAT Recordsのリリース。POOCHLATZはもちろん、Dave Phillipsや7 MINUTES OF NAUSEAなどのアーティストを収録)。

POOCHLATZ『Thanks for Giving In』(GRAVE TEMPLE TRIOがイスラエルでギグをやった際に共演した時のライヴ音源)。

POOCHLATZ『Cold Turkey』。

POOCHLATZ/GLASS CEILING/JOSH LAY…3wayスプリット。

GAVE IN THE SKY『Cutlery Hits China：English For The Hearing Impaired』(これまでのレコーディングで最高のヴォーカルになっている)。

LIETTERSCHPICH『I Cum Blood In The Think Tank !!!!!!!!』（再結成ギグ用に制作）。

DIVANITY…デモ（THE KNELLやGADのメンバーでTotal Rust Recordsのオーナーのアレクと一緒に録った作品）。

BARBARA『Peger』（「Never Mind The Screaming」という曲ではヴォーカルもやってみた）。

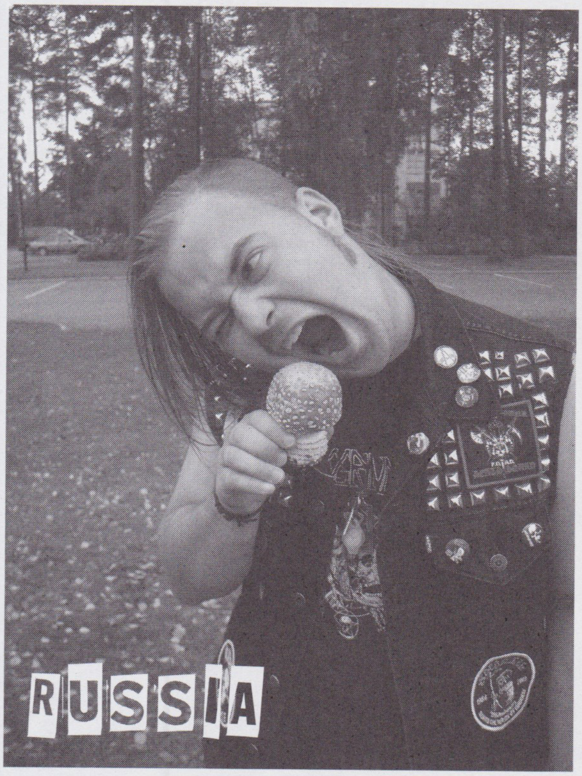
2008（32歳）David OPPとEran SachsとでLIETTERSCHPICH DIETを結成。PUMA、Dave PhillipsやBILLY BAOのMattinとヨーロッパのギグでプレイしたのがこの年だ。また同じ年に、Eran SachsとSPECIAL OLYMPICSを結成。
同時にLIETTERSCHPICH DIETのツアーでは、C SPENCER YEHとNATE WOOLEYと共演もした。POOCHLATZとLIETTERSCHPICH DIETの曲が日本/イスラエルのコンピレーション『What Pleasing The Lord Looks Like－Marriage：Extreme, Noise…and Terror From Japan & Israel』に収録。これはHeart& Crossboneからリリースし、RYOKUCHIやZENOCIDE, MONEYI$GOD、CADAER EYESらの曲も収録している。
うんざりしちまうんだけど、この年にPOOCHLATZ初のカセット『Black Sheep of Bleak September』がリリースされたんだが、レーベルの(k)Anal Tapesに裏切られてしまったんだよ。このカセットは買わないでくれ！やつらはカスだ！

2009（33歳）レーベルのほうに力を入れていたため、自分の作品のリリースは減った。でも進歩もしているし、SPECIAL OLYMPICSは早いリリースに向けて動き始めているよ。自分のバンド以外のアルバムをリリースする楽しさも知ったし、ライヴも楽しい。このまま突き進んで行きたいね。

2010（34歳）Heart&CrossboneからDave Phillips、MONEY I$GOD、Author&Punisherのアルバムをリリースできて光栄だよ。SPECIAL OLYMPICSの1作目になる、PTOMAINとのスプリットもすぐにリリースできるだろう



PERSONAL PUNK history FIVE



1983(0歳) ロシア連邦(旧ソビエト連邦)、カレリア共和国の首都、ペトロスコイで生まれる。

1989(6歳) 父親と一緒に行ったフェスティバルが初体験だった。まだソビエト連邦の時代だったよ。生まれて初めて生で見たバンドが、ヘヴィメタル・バンドのAVGUSTだったと思う。

1992(9歳) メタル・ミュージックを大量に聴き始めた。特にヘヴィなスピード・メタルをね。この頃はパンクに全く興味がなかったな。でも父親はどうにかして僕のことをSEX PISTOLSに夢中にさせようとしたよ。ハハハ。

1994(11歳) この歳になって、初めてエクストリームなメタルを聴くようになったんだ。大半はスラッシュやデスだったね。ダーティーでプリミティヴなリズムと獰猛なサウンドに惹かれちまったんだよ。

1995(12歳) パンクのテープを買い始めた頃だな。最初に買ったのは、EXPLOITEDの『Troops Of Tomorrow』。それから、後のソビエトーロシアにとっちゃカルト的であり、ロシアの神話的なバンドでもあるGR.OBも買ったよ。その後は、見つけることができたロシアやイギリスのパンクを聴き始めたよ。まだアメリカのパンク/ハードコアには手を伸ばしていなかった。G.B.H.も大好きなバンドの一つになったよ。

1996(13歳) エクストリームなメタルとパンク/ハードコアに夢中でのめり込んでいったよ。今ではグラインドとかクラストと呼ばれるバンドにね。あの頃のロシアでは、単純に"グラインド"あるいは"クロスオーヴァー"なんて呼び方をしていたな。まあ、単に"クラストコア"という言葉を知らなかっただけなんだけど。僕は90年代の半ば頃までは、アンダーグラウンドなジンを読んだことがなかった。情報不足はひどいもんだったよ。

1997(14歳) 初めて地元のパンク・ギグに行ったのがこの歳。とにかくがっかりしたよ。だって、地元のバンドの演奏はひどいなんてもんじゃなかったんだからね。ハハハ。

1998(15歳) POISON IDEAを初めて聴いたのはこの歳だったと思う。彼らの初期の作品は、口をぽかんと開いたままにさせられるような驚きだったな。それから初期USハードコアに夢中になっていったよ。でも日本やラテン・アメリカ、スカンジナビアのシーンのことはまだ知らなかった。

2000(17歳) 大学入学。さらに深くハードコアにのめり込むようになったね。街でやっている全てのパンク・ギグに通い始めるようになり、地元のシーンにも少し関わるようになったよ。でもまだ勢力的とまではいってなかったな。

2004(21歳) たぶんこの年に、インターネットにレヴューや記事を書き始めたんじゃなかったかな。紙のジンのアイデアが生まれたのもこの頃だ。この時期にスカンジナビアの80年代ハードコアを聴き始めたよ。それから、90年代のロシアで出回っていたテープの中には見つけることができなかった多くのメタル・パンクも。ENGLISH DOGSやGENOCIDEやWARFAREなどをね。
日本のハードコアを初めて聴いたのもこの頃だ。衝撃的だったね! LIP CREAM、DEATH SIDE、GASTUNKなどのバンドは、最高に好きなバンドになったよ。

2005(22歳) ブログを書き始め、仲間もできていった。ほとんどをエクストリーム・メタルに捧げていた時期だね。時たまグラインドコアのレヴューを書いたりもしていたよ。

2007(24歳) M.P.D.S.のメンバーになる。パンクーメタルの記事を猛烈に書くようになったな。同じ年、僕と地元のシーンで昔からの友達のやつとで、半分ジョークみたいな名前のÖRK BASTARDSという新しいプロジェクトを開始し、これがその後に真面目なバンドへと変わっていったんだ。

2008(25歳) ÖRK BASTARDSで何度もリハーサルを重ねていった結果、自分たちはエクストリームなオールドスクール・メタルとパンクを混ぜ合わせた音にしていきたいんだと気づくようになった。僕のペーパー・ジン『GRIND THE WORLD』の1号目も制作したよ。これはすぐにソールド・アウトした。

2009(26歳) ÖRK BASTARDS、初のデモをレコーディング。これはメタルやパンク界からかなり良い反応をもらったよ。ロシアとタイでほぼ同時にリリースされ、今はソールド・アウトしている!

2010(27歳) 今、僕はフィンランドのヘルシンキで暮らしている。ÖRK BASTARDSのヴォーカルを続け、ジン制作者でもある!
メタル・パンクの記事と数多くのインタヴューを掲載した『GRIND THE WORLD』ジンの2号目は作り終えているが、まだ印刷はしていないんだ。ÖRK BASTARDSの新しいフル・レングスのアルバムはほとんど完成しているよ。

Daniel "Pigy"/ ÖRK BASTARDS GRIND THE WORLD ZINE

PERSONAL PUNK history six

Ken Sanderson/PRANK RECORDS

USA

1968（0歳）生まれはUSA、アラバマ州のオペライカ。

1978（10歳）初めてパンク・バンドをカレッジ・ラジオ番組で聴いた。歌詞が面白くて、RAMONESの『Rocket To Russia』LPを買ってみたよ。

1982（14歳）パンクのレコードを買い始めるようになったけど、レコードに関してはもちろん、パンクやハードコアの情報を手に入れるのは本当に難しかったよ。この時代に集めたパンク・レコードは、値段が下げられ、ゴミみたいに1ドルで投げ売りされていた、メジャー・レーベルの販売促進用の作品（VIBRATORS、SAINTS、DICKIES、etc）だった。僕が見つけることができたパンク・レコードはこういうものだけだったんだ。

1983（15歳）カリフォルニア州のサン・ルイス・オビスポに1年間移る。ILL REPUTE、STALAG 13、CORROSION OF CONFORMITY、CAPITOL PUNISHMENT、DEAD KENNEDYS、THE FREEZEなど、初めてハードコア/パンク・ショーを見た頃だね。1984年の終わりまで、ICONOCLASTの反原発のベネフィット・ショーでチケットの販売をしていたよ。

1985（17歳）アラバマに戻り、ファンジン『the South Shall Burn Again』を作った。これにはCHEETAH CHROME MOTHER FUCKERS、ROVSVETT、SEPTIC DEATH、NEON CHRISTなどのバンドのインタヴューを掲載したよ。パンク・ロック・ラジオ・ショーも始めた頃だね。

1998（20歳）初めてパンク・コンサートを企画した。バンドはALLとCHEMICAL PEOPLEだったな。バンドが要求（"追加"）してくることを全て提供する必要がないってことを、この時の僕は理解していなくてね。大量の食べ物や5種類のサラダ・ドレッシングまで用意したんだから。2年間はコンサートを企画しなかったな。

1992（24歳）アラバマからサンフランシスコに移住。924 Gilman Streetでコンサートのブッキングを担当するようになった。Mordam Recordsディストリビューションの職に就き、『Maximum Rock'n'roll』誌でも記事を書き始めたよ。

1995（27歳）RANCIDのLintが現れず、SCHLONGのアルバム『PUNK SIDE STORY』で彼が担当する部分を僕が歌った。たまにSCHLONGのメンバーとハードコア・バンドで歌うこともあったね。Prank Recordsを立ち上げ、レーベルの初作品となるDEAD AND GONEの『T.V.BABY』（12"/CD）をリリースしたよ。
初めて日本を訪れたのもこの年だね。六本木Jungle Bassで行われた、G.I.S.M.、GAUZE、DEATH SIDEの信じられないほどに素晴らしいショーを見たんだ。日本でたくさんの友達にも出会えたし、USAに来る日本のパンク・バンドを手助けするようにもなったね。

1997（29歳）ジョージア州アトランタで"Prank Fest"の1回目を開催。HIS HERO IS GONE、DAMAD、DEATHREAT、FROM ASHES RISE、WORD SALAD、SMASH YOUR FACEに出演してもらったよ。HIS HERO IS GONEと共に日本を廻ったのもこの年だ。Toshio Iijimaには本当に感謝しているよ（それに、ちょっと謝らないとね。ハハ）！

2000（32歳）Mordam Recordsの人間がカリフォルニア州サクラモンテへ移るのを機に、僕はそこをやめ、レコード・レーベルに全身全霊をかたむけるようになる。

2003（35歳）GAUZEがUSAツアーを終えて日本に帰国した後の1996年に、シカゴで出会ったDeniseとこの年に結婚。彼女は僕と同じようにオールド・パンク・ロッカーで、他の誰よりも一生懸命にレーベルの仕事を手伝ってくれてもいたんだ。

2004（36歳）Timmy Hefnerの助けを借りて、テキサス州オースティンで新たな"Prank Fest"を開催。PAINTBOX、SUNDAY MORNING EINSTEINSに出演してもらい、ヘッドラインはDROPDEADにつとめてもらった。これが、翌年からの"Chaos In Tejas"フェスティバルへと変わっていく。

2008（40歳）Prank Recodsのリリースが100枚に到達。

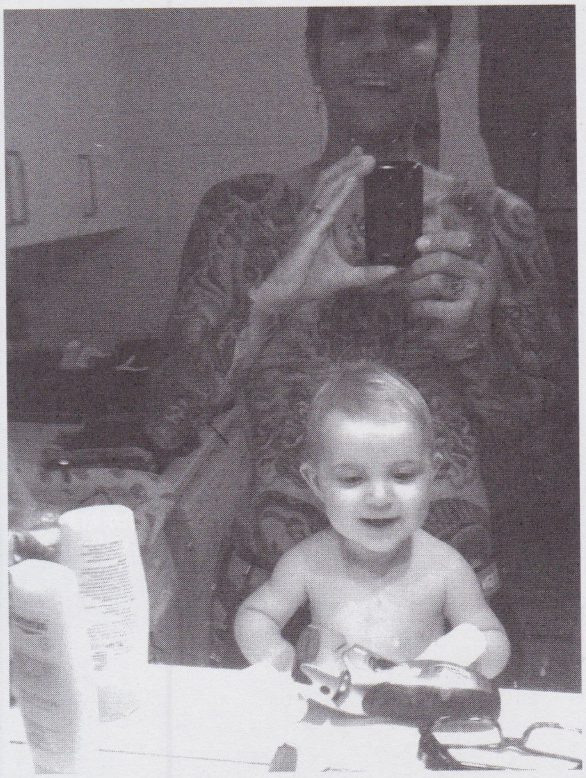
2009（41歳）AVSKUMと共に再び日本へ旅立つ。若い子達とよりも、年のいったスウェディッシュ・パンクスとのほうがツアーは楽だね！CLOWN、D-CLONE、REALITY CRISIS、そしてAichi、サポートとヘルプに感謝しているよ。

2010（42歳）新しいアイデア、新境地、新しい何かが始まる時がきた。パンクは変わるだろう。僕も変わる。それは良いことだ。



PERSONAL PUNK history SEVEN

Christoffer 138/ex.DS-13, ETA, BRUCE BANNER IMPERIAL LEATHER, SUICIDE BLITZ SONIC RITUAL, BUSTED HEADS RECORDS



1977(0歳) スウェーデンの北、ハードコアの地、Umeaで生まれた。

1984(6歳) TWISTED SISTER、WASP、それにKISSのようなヘヴィメタル・バンドと出会う。

1987(10歳) GUNS N' ROSES、HELLOWEEN、METALLICAを発見。成長するにつれ、もっと強烈な音楽を聴き始める。スピード、スラッシュ、デス、グラインドコアに突き進んでいったよ。

1990(13歳) Umeåの地元シーンのデモ・テープを通して、ハードコア・パンクを知るようになる。バンドはRETARDS、GPK、STEP FORWARDだったな。その後、REFUSED、BY NO MEANS、BSP、DOUGHNUTSを知ったよ。

1992(15歳) ベースを弾くようになり、初めてパンク・バンドを結成した。DOGS OF DESTRUCTIONてバンドさ。これは後のNO CHOICEだ。デモを1本作ったよ。バカだったぜ、演奏もまともにできないくせに、ハードコア気取りだったんだから。まったくな。

1994(17歳) MAGPIEってメロディック・スケート・パンク・バンドで弾き始めた。デモを2本作った。クソ。だが、メンバーの1人は後にブラック・メタル・バンドのNAGLFARをやるようになったんだぜ!

1996(19歳) ストレートエッヂになる。DS-13結成。

1997(20歳) 真のDIYや、世界中のハードコア・コミュニティを知るようになっていったよ。DS-13の1 st 7"『Aborted Teen Generation』が出る。この後、たくさんのレコードを出すことになる。

1999(22歳) 女のせいで、大酒をくらい、タバコを吸い始めたぜ。DS-13で初のヨーロッパ・ツアーも敢行したな。

2000(23歳) ETAに加入。DS-13で初のUSAツアーに出る。

2001(24歳) DS-13の2度目のUSAツアー。DS-13とETAとでヨーロッパをツアーして廻る。

2002(25歳) ETAのUSAツアー。ブッキングしたクソ野郎のせいで、ツアーの後にバンドは解散しちまった。DS-13の日本ツアー。女のせいで、ツアーの後にバンドは解散。さらに飲んだくれる始末さ。身にこたえたよ。世の中はクソだ。

2003(26歳) ストックホルムに移住。ヴォーカルでBRUCE BANNERに加入した。メタル/パンク・マガジンの『Close-Up』で働き始めるようになった。太りに太って、100キロはあったね!

2004(27歳) BRUCE BANNERでUSAツアーを行う。アルバムをリリースしたが、これは今でも誇りに思っている。まだ太ってたぜ!

2005(28歳) IMPERIAL LEATHERに加入し、USAツアーを敢行。

2006(29歳) IMPERIAL LEATHERでUSAをツアーしたが、これは経済的な自滅を招いちまったよ。俺はガールフレンドとラスベガスで結婚した。Elvisとラスベガスは縁が深いからね。この年、BRUCE BANNERを抜けたよ。

2008(31歳) 『Close-Up』誌をやめたぜ。ボスがクソだからさ。それ以来、様々なジャーナリストの仕事で生き延びてきた。
今はニュースやスキャンダルを扱うスウェーデンでも有数のタブロイド紙『Aftonbladet』で働いているんだ。IMPERIAL LEATHERを抜け、SONIC RITUALに加入。

2009(32歳) 娘のOliviaが誕生。

2010(間もなく33歳) 女が原因でSONIC RITUALを抜けた。もうバンドでプレイすることはないだろうな。世界をぶっ潰せ。

SWEDEN

PERSONAL PUNK history Eight

Fabian / BURIAL GERMANY

1980（0歳）ドイツのウェストファーレン州ハーゲンで生まれる。

1992（12歳）スケボーのビデオで流れている曲を聴き、パンク・ロックやハードコア・パンクを聴き始めるようになったんだ。攻撃的だしパワーがあって好きだったね！
アンダーグラウンド・ミュージックにどっぷり浸かっていった。そういうのが好きでさ…。
この数年後、自分のレーベルを始めるようになる。ドラムは1988年からだね。まだガキだったな。90年代の半ばから後半に、日本のハードコア・バンドを知るようになったよ。ぶん殴られたような衝撃を受けちまった。90年代は大量のレコードを買ったな。ショーにも通い、ドラムも叩いた。
そして、2003年の後半に仲間とBURIALってバンドを結成した。それ以来、猛烈に活動し、レコードもリリースしてきたよ。世界中をツアーして廻ってる。楽しみもストレスもあるけけどね。

2004（24歳）1st 7"を出したよ。
この時期、他のバンドでもプレイしていたけど、BURIALは消滅しなかった。存在し続けているぜ。



PERSONAL PUNK HISTORY NINE



Jack Control/ USA
WORLD BURNS TO DEATH
SEVERED HEAD OF STATE

1972（0歳）USA、テキサス州ダラスで、丸裸で泣き叫んでいるところを発見される。

1983（11歳）パンクと遭遇。BLACK FLAG、SHAM 69、COCKNEY REJECTS、DEAD KENNEDYSだったな。カセットや7"を買い始めた。

1984（12歳）ダラスのスケートパークで演奏しているBIG BOYSとTHE DICKSを目撃。狂気の沙汰だったぜ。やつら、ハーフパイプの上でプレイしてたんだからさ。俺はバスに2時間も揺られてスケボーしに行ってたよ。

1985（13歳）初めてアルバムを買った年だな。Pusheadの出したコンピレーション『Cleanse The Bacteria』だ。世界が変わったぜ。それと、DISCHARGE、CRASS、CONFLICT、FLUX OF PINK INDIANSなんかも知ったな…目が開かれたね。パンク・コンサートにしょっちゅう通い始めた頃だな。

1986（14歳）初めてのパンクのガールフレンドができた。"Gidget"って娘。イカれた娘に手を出した最初かな。1986年から1988年は、暴力的なパンクだからってせいで、街の全てのハイスクールから締め出しをくらっていた時期だ。

1988（16歳）ダラスにある"The Honest Place"ってパンクの会場の運営を手伝ったよ。ナチ・スキンヘッドを初めてぶちのめした。

1990（18歳）ダラスにSlipped Diskクラブを開いた。Mind Control Recordsを始めたよ。"大統領暗殺の陰謀"により、シークレットサービスに全国放送で逮捕されちまう。かろうじて連邦刑務所に長く収監されるのは免れた。銃は処分されるはめになる。

1990－1995（18－23歳）ダラスに会場を５つばかり開く。ANTISCHISM、DEFIANCE、MASSKONTROLL、etcのバンドのレコードをリリース。1993年から1995年の間に、13人のダチが自殺したり、ヘロインで死んじまった…。

1995（23歳）災いを避け、テキサス州オースティンに移る。

1998（26歳）SEVERED HEAD OF STATE始動。

2001（29歳）WORLD BURNS TO DEATH始動。

1998年から2010年の間に25枚のレコードを出し43カ国を廻る。

2010（38歳）歴史とオカルトを学んでいるところだ。ノイズのコラボレーションもいくつかやっているぜ。たぶん、女友達と身を固めて、まともな人生を送る時なんだろうよ。

PERSONAL PUNK HISTORY TEN

RUSSIA

1998（0歳） アルメニア共和国のエレバン生まれ。素晴らしい母国だよ。安いワインでも有名な土地さ。

2000（12歳） 両親とロシアへ引っ越す。あっという間に、刺激的な世界中の（アンダーグラウンドではない）ロック・ミュージックやスケボーに心が向かっていったよ。当時好きだったのは、RED HOT CHILI PEPPERS、METALLICAだったな。手当たりしだいで、ガツガツしていたよ。

2004（16歳） 初めてハードコアやパンクを聴いたんだ。AGNOSTIC FRONTの『Victim In Pain』だった。そりゃもうショックだったよ。そんなの、それまで聴いたことがなかったんだからさ。似たような音のバンドを捜し始め、もの凄ぇ早さでDIE KREUZEN、MINUTEMEN、BLACK FLAG、BIG BOYS、DISCHARGE、G.I.S.M.、THE STALIN、CELTIC FROST、HELLHAMMER、AMEBIXにたどり着いた。こういうバンドのおかげで僕の人生は急激に変わったな。

2005（17歳）『Maximum Roc'n'roll』みたいなパンク雑誌を大量に読み、USや地元の店でレコードを買ったりしてた。パンク・ショーに初めて足を踏み入れたのもこの頃だったな。

2007（19歳） ベースを初めて買ったよ。フェンダーのP-BASSのぱったもんで、安物だったけど。すぐに、DIE KREUZENやBLACK FLAG、ブラストや90年代のノイズ・ロックをやろうとしてて、ベーシストを捜しているバンドの広告を見つけたんだ。それが僕の初バンドになった。PERTHってバンドさ。

2008（20歳） PERTHから追い出されちまった。ハハ。でも貴重な時間を過ごせたし、面白い経験にもなったと思う。この年に、Sexdrive Recordsって小さなレーベル/メールオーダーを始めたんだ。初作品はSICK PACKっていう素晴らしい地元のバンドだったよ。まだレーベルをやり続けてる。ヴィニールとテープだけをリリースするという、スノッブなアティテュードを頑なに守ってやってるよ!

2009（21歳） 今も続けている、邪悪なパンク/ブラック・メタル・バンドのTORQ ANGEGHを始めた。デモ作品をすぐにレコーディングしないとならないね。

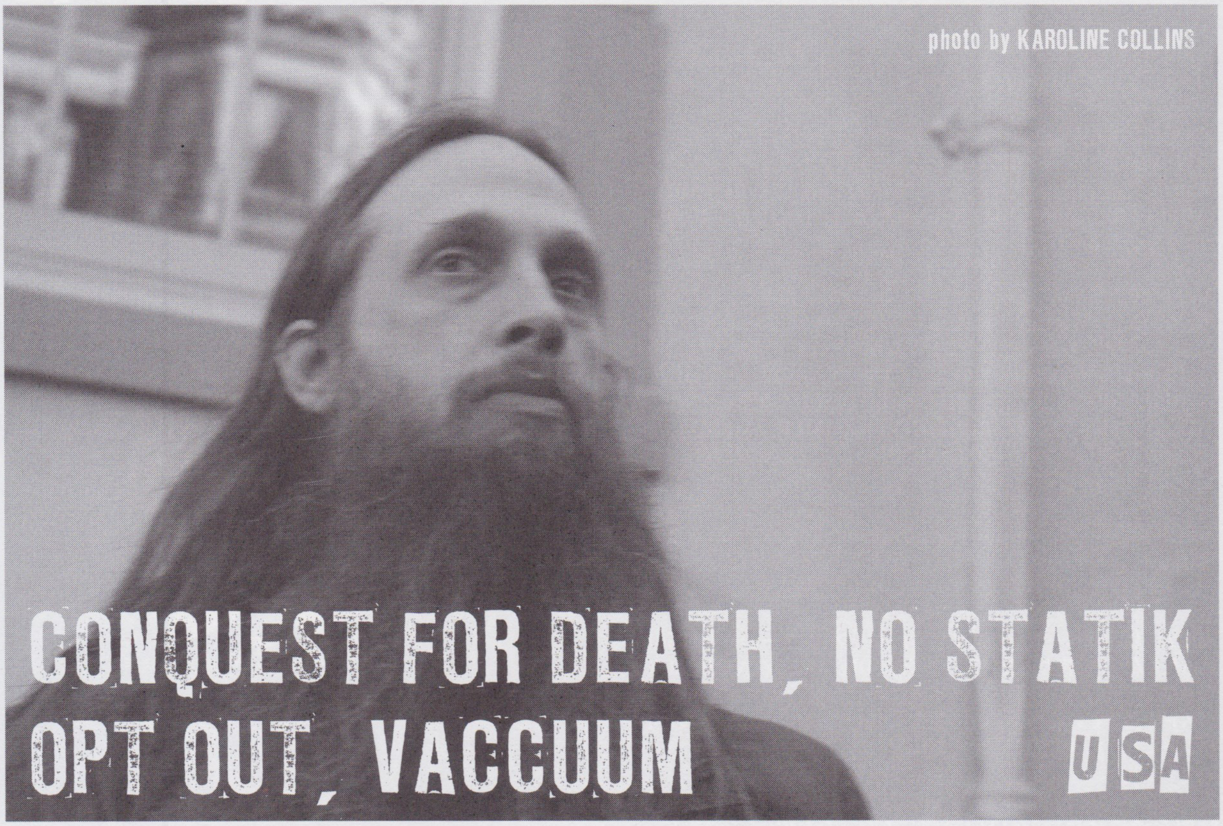
2010（22歳） PTERODAKTILS誕生!僕が今やってるもう一つのバンドさ。カセット・デモをすぐに出したいな。PTERODAKTILSはFLIPPERやDARKTHRONE、MISSBRUKARNA、DISCHARGE、GRAZHDANSKAYA OBORONA、BLACK FLAGの血流にある、ロウなバンドなんだ。僕たちを知っている人は誰もいないけど、最高だぜ。だろ?



Tigranes/
PTERODAKTILS
TORQ ANGEGH
SEXDRIVE RECORDS

PERSONAL PUNK HISTORY ELEVEN

Robert Collins/BASSIST & ROADIE



1972（0歳）USA、ルイジアナ州のウェストモンローにて誕生。

1985（13歳）オクラホマ州のポンカシティに移る。この頃よく聴いていたのは、TWISTED SISTERやQUIET RIOTのようなメインストリームのヘヴィメタル、それからDEPECHE MODEやTHE SMITHSのようなメインストリームのニューウェイヴだったね。

1986（14歳）僕のいとこは、僕の音楽の趣味を最悪だと思ったみたいで彼女はSEX PISTOLSやX、DEAD KENNEDYSのレコードを買ってくれたんだ。DEAD KENNEDYSが僕の全てを変えたよ…ニューウェイヴやパンクのバンドをかける地元のラジオ局で、自分のラジオ番組を持つようになった。でもここでかかっていた曲は、まだほとんどがメインストリームのものだったけどね。

1990（18歳）オクラホマのとても小さい町から、大きな町へ移ったよ（それでもかなり小さい町だったけどね）。僕が住んでいたところにはアンダーグラウンドもDIYも存在していなかったが、ANCIENT CHINESE PENISっていう初めてのバンドを始めたんだ。もうどうしようもなくひどかったけど、デモ・テープを3本出し、1992年には2週間のツアーにも出たよ。1993年には3週間のツアーもやったね。

1993（21歳）ウィスコンシン州ミルウォーキーでBORN AGAINSTとAVAILを見た。これはレコードのディストロや本物のパンク・コミュニティも一緒になった、僕にとっては初めてのDIYパンク・ギグだったんだ。僕の全てが変わったよ。

1994（22歳）MULTIPLE CHOICE（後にFUCKFACEとなる）という新しいバンドに加入した。サンフランシスコに移り、ツアーもやり始めたよ。

1994－1998（22－26歳）この間、できる限りツアーをやったね。1996年のALL YOU CAN EATの日本ツアーに加わり、GARLIC BOYSやヌンチャクと共演したよ。1996年から1997年の冬にかけての約6ヶ月間、FUCKFACEでUSA、カナダ、日本を廻ったな。

1996（24歳）CITIZEN FISHやHICKEY、AVAILなどのローディーをやっていたKarolineが、ウィスコンシン州ミルウォーキーでFUCKFACEのギグを企画してくれた。僕たちは1997年に結婚したよ。

1998（26歳）FUCKFACE解散。FUCKFACEのメンバー3人でARTIMUS PYLEを結成。SUBHUMANSの再結成USツアーのドライバー/ローディーをつとめることにもなった。これはバンドのメンバ

ex.ARTIMUS PYLE, WHAT HAPPENS NEXT?, MALACHI HIGH ON CRIME, FUCKFACE, LAUDANUM, SUICIDE BOMB

ーとしてではなく、ドライバー/ローディーとしてツアーを経験した最初だったね。ALL YOU CAN EATやSPAZZのメンバーが加わり、WHAT HAPPENS NEXT?を結成。

1998－2003（26－31歳）ARTIMUS PYLEは日本（2001年）、USA（2002年）、ヨーロッパ（2003年）をツアー。レコードをLife Is Abuse、Prank、Mangrove、Flowerviolenceからリリース。WHAT HAPPENS NEXT?は日本（2000年）、USA（2001年）、ブラジル（2002年）、ヨーロッパ（2003年）をツアーし、Six Weeks、625、Flowerviolence、Lengua Armadaらからレコードをリリース。僕は他にもLAUDANUMって遅いドゥーム・バンドもやっていてBlurred RecordsからCDをリリースしたよ。しかし、サンフランシスコを離れた時に、バンドも抜けたんだ。

2003（31歳）ウィスコンシン州ミルウォーキーに移り、ARTIMUS PYLEやKUNG FU RICKのメンバーと、HIGH ON CRIMEを始める。Hungry Ghost RecordsからLPとEPを1枚ずつリリース。

2003－2008（31－36歳）この期間は、SUBHUMANS、CITIZEN FISH、SUNDAY MORNING EINSTEINS、BREAKfAST、HUE AND CRY、HERO DISHONEST、BORN//DEAD、CROW、LA FRACTION、LIMP WRISTなどのツアーに、ドライバー/ローディーで同行することが多くなり始める。

2006（34歳）WHAT HAPPENS NEXT?の元メンバーとASSFORT/CHARMのドラムのKikuとでCONQUEST FOR DEATHを始動。ARTIMUS PYLEのほうは日本、タイ、オーストラリアをツアーする。

2007（35歳）CONQUEST FOR DEATHは春に日本、秋にアフリカをツアー。アフリカのほうは、南アフリカ、ボツワナ、ナミビア、モーリシャス共和国を3週間かけて廻ってきたよ。ARTIMUS PYLEとHIGH ON CRIMEのギターと、チェロが入ったドゥーム/ノイズをやるMALACHIを結成。Halo Of Flies RecordsからLPを2枚リリースした。

2008（36歳）KYLESAに加わり、3週間のヨーロッパ・ツアーを行う。同じ年、CONQUEST FOR DEATHはニュージーランド、オーストラリア、マレーシア、シンガポール、ボルネオ、フィリピン、インドネシアの東南アジア方面を5週間かけて廻ってきた。またこの年は、ミルウォーキーからサンフランシスコに舞い戻ったよ。

2009（37歳）MALACHIが3週間のヨーロッパ・ツアーを敢行。しかしメンバー全員がそれぞれ遠く離れた場所に移ったせいで、バンドは終焉を迎えた。2009年はBORN//DEADのギターとCONDENADAのドラムとでSUICIDE BOMBを結成したね。このバンドはギタリストがヨーロッパに移り住んだために、4ヶ月間だけの活動になった。それから、SUICIDE BOMBのドラムとBRILLIANT COLORSとDECONDITIONEDのメンバーとでOPT OUTを結成したのもこの年だね。他にも、SCHOLASTIC DETH、LOOK BACK AND LAUGH、DESTROY、SCROTUM GRINDERのメンバーらとでNO STATIKを結成したよ。REPERCUSSION、PEDESTRIANS、MORPHEMEのメンバーからなるVACCUUMで僕はヴォーカルを担当している…ベース以外のパートをやってみたのは今回が初めてなんだ。

バンド&作品リスト

ANCIENT CHINESE PENIS:
Fistful Of Penis demo 1991 / Envy demo 1992
Al Fresca demo 1993

MULTIPLE CHOICE:
Multiple Choice demo 1993

FUCKFACE:
Fuckface EP 1994 / split EP with HICKEY 1995
Don't Hate Us EP 1996 / Sukia EP 1997
Fuckface LP 1997

BRAINBLOODVOLUME:
Nothing compilation CD / UGZ compilation CD

WHAT HAPPENS NEXT?:
What Happens Next? EP 1998 / Brutiful Fearing EP 1999
Ahora Mas Que Nunca EP 1999
Stand Fast Armageddon Justice Fighter LP/CD 2000
Stand Fast EP 2000
Start Something split LP with LIFES HALT 2001
Eurotrash EP 2003 / No Cash No Thrash EP 2003

ARTIMUS PYLE:
Artimus Pyle EP 1998 / Civil Dead 12" 1999
Cold Cold Earth EP 2000 / split EP with CROW 2001
split EP with DIALLO 2002 / Fortress EP 2002
Fucked From Birth LP 2004 / Kuroi Kyokatabira EP 2006
Tonight Is The End Of Your Way EP 2007

LAUDANUM:
The Apotheker CD 2003

HIGH ON CRIME:
Until No Flags Fly LP 2005
Pour Some Sewage On Me EP 2006

CONQUEST FOR DEATH:
Conquest For Death EP 2006
Frontrow Tickets For Armageddon 12" 2007
Beyond The Hidden Valley CD 2007
Many Nations, One Underground demo 2009

MALACHI:
Malachi LP 2008
The Immortals split CD with BASTARD NOISE
Wither To Cover The Tread LP 2009
Desert Rift/Fifth 8" EP 2009

SUICIDE BOMB:
Suicide Bomb demo 2009

VACCUUM:
Vaccuum demo 2010

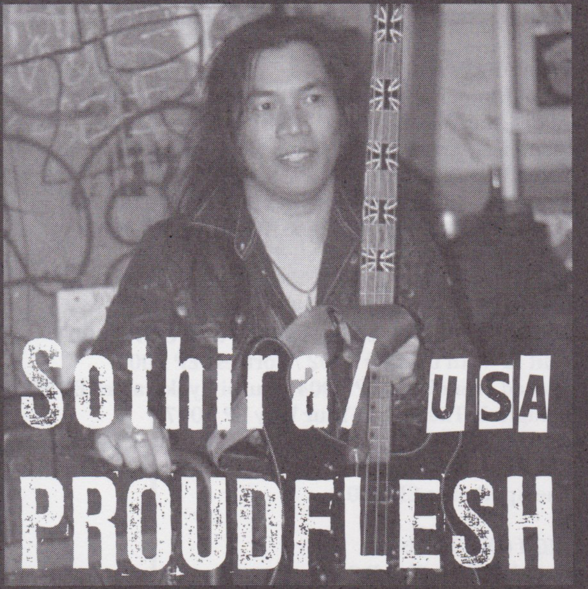
OPT OUT:
Opt Out demo 2010

NO STATIK:
No Statik demo 2010

ドライバー/ローディーで同行したバンド

BY ALL MEANS(Italy), SUBHUMANS(UK), LOST GOAT(USA), YELLOW MACHINE GUN(Japan), CITIZEN FISH(UK), JELLYROLL ROCKHEADS(Japan), HUE AND CRY(USA), EXCLAIM (Japan), LA FRACTION(France), AMEBIX(UK), KILL THE MAN WHO QUESTIONS(USA), AVAIL(USA), LIMP WRIST (USA), E150(Spain), WORLD BURNS TO DEATH(USA), MIND OF ASIAN(Japan), VOETSEK(USA), HERO DISHONEST(Finland), FAGGZ(USA), BORN//DEAD(USA), SUNDAY MORNING EINSTEINS(Sweden), THE PIST(USA), BRILLIANT COLORS (USA), CROW(Japan), MY DISCO(Australia), CONDENADA (USA), N.N. (USA),BREAKfAST(Japan), LAUDANUM(USA), GRASS WIDOW(USA), and more bands...

PERSONAL PUNK HISTORY TWELVE



19XX カンボジアのプノンペンで生まれタイペイとロンドンで育つ。

1975 家族とカリフォルニア/サンフランシスコに引っ越す。

1976－77 KISS Armyに参加!彼らが大好きだったし、Ace Frehley(※KISSのギタリスト)は俺のお気に入りだったな。

1978 SWEETの「Love is like oxygen」を買う。俺が初めて買ったシングルの音源だった。当時ラジオで大ヒットしていたんだよ。

1978(1月) SEX PISTOLSが最後となるコンサートをサンフランシスコのWinterlandでプレイした。それで初めて俺はSEX PISTOLSについて知った。これはよく覚えているよ。彼らはどこでもニュースになっていたからね!

1978 俺にとっての初のパンク・ロック・アルバム、THE RAMONESの「Rocket to Russia」を姉からもらう!

1978 GENERATION Xの1stアルバムを買う。これが自分で買った初めてのパンク・ロックのアルバムだった。

1979 初めてのリアルなバンド、SUBSIDIZE MESSをMatt BorrusoとChris Douglasと一緒に結成。以前にいくつか考えていたのはあったけど、実現化はしなかったからね。

1979(7月19日) SUBSIDIZE MESSの初となるショーをTHE ZEROSとバークレーのBarrington Hallで行う。俺はベースだったよ!Mattがギター、Chrisがヴォーカル、そしてJoel Foxがドラムだった。俺たちはもう1、2回ショーをやったけど、すぐにSUBSIDIZE MESSは俺たちがやりたかった音楽ではないと悟る。不満だったんだ。自分のパートとは違う楽器すら演奏するようになって、Mattはシンセサイザーまで持ち出して、Chrisがベースやったりね!満足いくラインナップを俺たちが思いつくまでそれは続いた。そしてMattがギター、Chrisがドラム、俺がヴォーカル、Bryce Kanightsという友人がベースとして加わったんだ。そうしてCRUCIFIXが生まれたってわけさ!

1980(1月3日) CRUCIFIXが、初めてのショーをFLIPPERと一緒に"Sound of Music"で行う!俺たちは3ドル稼いだぜ!

1981 CRUCIFIXの初音源、「Capitulation」EPをリリース。ジャケの写真は俺が選びアートワークは友人のDiane Bestがやってくれた。

1982 「Nineteen-eighty four」のリリースに続いて、初となるツアーを行う。

1983 春に2度目のUSツアー。Crass/Southern RecのJohn Loderがボストンでのショーに俺たちと会うため、イギリスから来てくれた。それは"The Channel Club"での出来事だったな。俺は"Saturday Night Fever"をテレビで見ていたら、そのニュースを告げられたんだ!「Dehumanization」LPはその年の8月にレコーディングされた。録音には一週間かかったはずだ。

1983－84 冬から春にかけて、2度目のUSツアーにプラスして、イギリス、オランダ、アイスランドを含めたヨーロッパ・ツアーも決行(5ヶ月もの道のりだった)。イギリスではANTISECTと、オランダではBGKと一緒に廻ったな。

1984(7月13日) CRUCIFIX解散。最後のショーをBooker T Washington Community CenterでTRIAL、SOCIAL UNRESTと行う。

1987 PROUDFLESHを俺の友人、Richard Carse (RIP)と結成。"proud flesh"という言葉を辞書で見つけたんだ。

1988 「Powerbroker」EPをリリース。ジャケットはJimi Hendrixの「Are you experienced」からの影響を受けているよ。だから魚眼レンズで撮影したんだ。Mattの兄弟が撮ってくれて、JohnとChrisがアートワークの全てをやってくれた。

1993 PROUDFLESH解散。短い物語、発奮は長くは続かなかった。俺は演奏することを諦めたんだ。音楽に関する機材は全て売るか人にあげるかした…。でもMattからもらったAmpeg V4は、まだ俺は持っているはず、そう願いたい。

1993－96 とにかく、俺はレースへの情熱に気がついた。そしていくつかのバイク・クラブのレースに、その後の3年を費やした。イギリスにいた子供の頃からずっとモーター・スポーツは大好きだった。そう、俺が初めてJackie Stewart(※スコットランドの有名なレーシング・ドライバー)のことを知った時から。俺はロードレース世界選手権とレーシングの熱狂的な信奉者だからね!

2000－03 フィンランドで夏期休暇を過ごす。ユヴァスキュラ(※フィンランドの中部の都市)でレースを楽しんだよ!

2004 情熱が再び戻って来た。PROUDFLESHの復活!長いことかかって機材の大部分は取り戻すことが出来た。友人らがちゃんとまだ保存していてくれたことには驚かされたよ!

2006(3月) PROUDFLESHの1stアルバムをリリース。素晴らしい友人、Jimmy Crucifixがギター、Erik Lannonがドラムだ。

2007(3月) 初となるジャパン・ツアー!大阪、名古屋、東京には驚かされた!素晴らしいサポートと歓迎を受けたよ。

2007(11月) ドイツへの初ツアー!多くの友人が新たに出来たし、思い出も沢山出来た!

2010 PROUDFLESHの2ndアルバムの作業中だよ。来年には出したいと思っている。

これは明らかに要約したものでしかないけど…、今、俺は"信念を貫く"ってのがどういうことかを分かっているよ。

PERSONAL PUNK history thirTEEN

1991（0歳）生まれはロシアのヴォロネジって街。

1999（8歳）パンク・ミュージックを初めて聴いたんだ。SEX PISTOLSだったよ。テレビで彼らを見てさ。おばあちゃんにミュージック・ショップに連れて行ってもらって、SEX PISTOLSのCDとTHE EXPLOITEDとTHE OFFSPRINGのパンク・テープを買ったんだ。

2001（10歳）A.S. Kokarevの『Панк Рок от А до Я』（A-Z PUNK）という本を買って、THE DAMNED、THE CLASH、UK SUBS、THE VIBRATORS、THE GERMS、BLACK FLAG、DISCHARGEなんかのバンドを知るようになった頃。

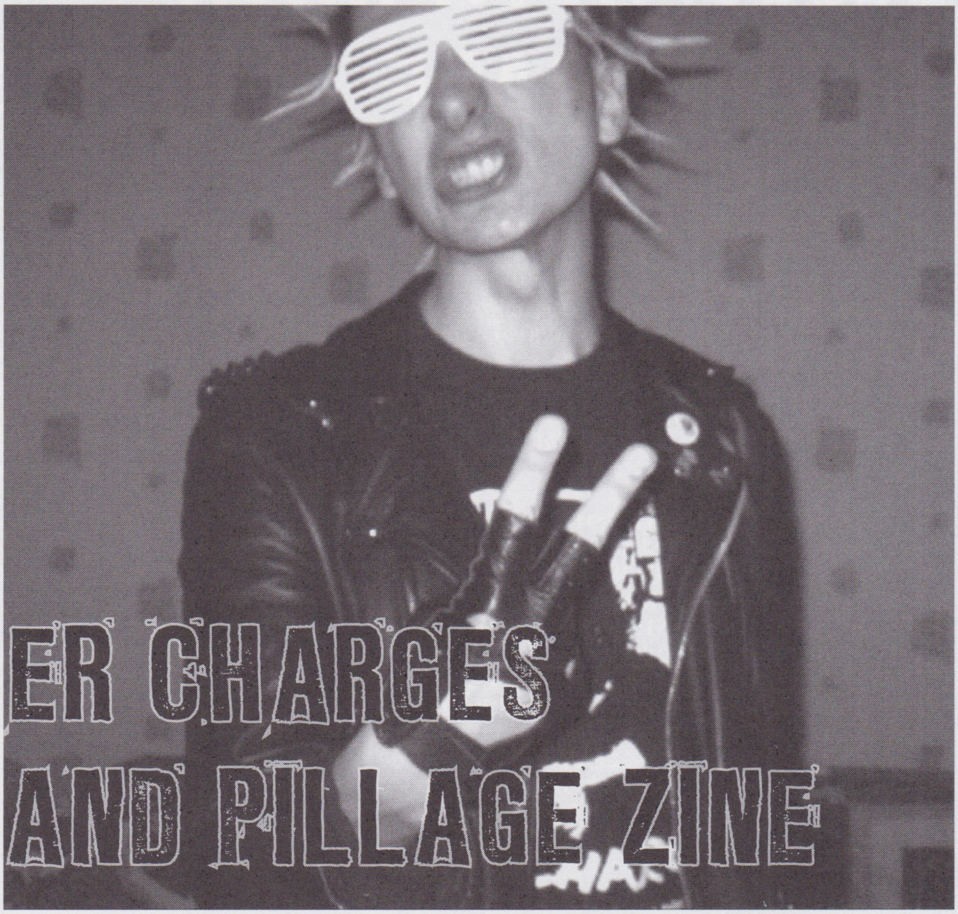
2003－2004（12－13歳）ブートのCD-Rやテープを集めだした。ロシアで見つけるのはすげぇ大変なんだ。この頃買ったCD-Rは、THE PARTISANS、CHAOS UK、DISCHARGE、DISORDER、CHAOTIC DISCHORD、G.B.H、THE STRANGLERS、PUBLIC IMAGE LTD、SHAM69、THE EATER、COCKNEY REJECTS、BLITZ、SPECIAL DUTIESなんかだったよ。

2005（14歳）アンダーグラウンド・ハードコア・パンク・シーンをだんだん知るようになってきた時期かな。LEGION OF PARASITES、DESTRUCTORS、VARUKERS、POTENTIAL THREAT、BROKEN BONESなんかのCD-Rを買っていたね。今も好きなバンドばかりだよ。それに、THE CASUALTIESやTHE VIRUS、AUS ROTTEN、DEFIANCE、LAB RATSのようなUSの90年代シーンのバンドも知るようになったよ。BONDAGE BASTARDSって自分のバンドも作り、ハードコア・パンク・ロックなオリジナル曲をやったり、CHAOS UKやBLITZ、THE CASUALTIESのカヴァーをやったりしたんだ。THE CASUALTIESの影響はでかかったな。『SPUNKCORE!』というパンク・ジンを作り始めた時期でもあるんだ。これは2号作ったよ。

2006（15歳）ヴィニール・レコードを集めるようになった頃だね。最初に手に入れたレコードはTHE EXPLOITED、CHARGED G.B.H、VARUKERS、PETER AND THE TEST TUBE BABIES、COURT MARTIALのシングル、UK SUBSのLPを2枚。eBayで購入したんだ。

2008－2010（16－19歳）FURTHER CHARGESって新しいバンドを始めた。CHAOS UK、DISORDER、DISCHARGEのようなイギリスのバンドに強く影響を受けた、古典的なハードコア・パンクのバンドだよ。2Komponentzとスプリット・テープを作ったんだ。MySpaceで聴くこともできるよ。
友達のNikita（UNBROKEN BONES）と『RAPE AND PILLAGE』て新しいジンも作り始めたんだ。80年代のロウな作品をよく聴いているよ!!!
今のお気に入りバンドは、CHAOS UK、DISORDER、DISCHARGE、CRUCIFIX、THE FITS、ANTI-SYSTEM、DIRGE（UK）、ONSLAUGHT、KAAOS、VARAUS、RIISTETYT、MODERAT LIKVIDATION、TAMPERE SS、G.I.S.M.、CONFUSEなどかな。それが好きなバンドだけど、全ての素晴らしい音楽に心を開いてる！将来の目標は、自分のバンドの7"シングルをリリースし、ツアーに出ることなんだ！Stay Punks！じゃあね！

RUSSIA



Dima/ FURTHER CHARGES RAPE AND PILLAGE ZINE



Dadde/ASTA KASK WOLFBRIGADE, SJU SVÅRA ÅR

SWEDEN

1982（0歳） スウェーデンのストックホルムで生まれ、スウェーデン出身の母Ingerとスペイン出身の父Salvadorのもとで育つ。

1994（12歳） クラスメートを通してパンクに夢中になったよ。ASTA KASKやKSMB、EBBA GRÖN、STREBERS、DLKなどのバンドだったな。すぐにANTI CIMEXやMOB47、PUKEのような、より激しいバンドを聴くようになった。
バンドを初めて組んだのもこの年だね…俺はギターとヴォーカルだった。バンド名もころころ変わったし、メンバーもよく入れ替わったな。でもそれがDISCULPAに発展し、数年後にレコーディングして作品も出すようになったんだよ。

1997－1998年（15－16歳） DIYにまつわる全てに深くのめり込み始める。Scen Mariaやストックホルムにある Kafe 44でギグを企画するようになった。BENT EDGE RECORDSってレーベルを始めたのもこの頃だよ（BURNING KITCHEN、BRUCE BANNER、ASSEL、SECOND THOUGHT、STOCKHOLM PIGSの作品をリリース。2003年にレーベルは停止）。この頃、DISCULPAはJan JuttilaとStudio D-taktに入り、デモをレコーディングした。それから俺は、CRUDITYやDE LYCKLIGA KOMPISARNAのMartとSVART SNÖのPeterと共にSUNDAY MORNING EINSTEINSをやるようになったよ。このバンドをやることで、ハードコア・パンクの曲の書き方をちゃんと理解できるようになったんだ。このバンドではベースを担当し、他のバンドでもベースをやることが多くなったな。

1997（17歳） UBBAって新しいメロディック・パンク・バンドでMartと共にドラムを叩き始めた。頑固なクラスティの俺としては、このバンドを数年経って再評価するようになったよ。 その他にはSECOND THOUGHTにベースで加入した。また、1994年に俺が初めて組んだバンドのDISCULPAで初ツアーを体験したよ。UBBAはシングルとアルバムをレコーディングした。

2001（19歳） バンドやギグに大忙しの1年だったね。SUNDAY MORNING EINSTEINSはTomas Skogsbergと共にSunlight Studiosに入り、アルバムと7"、それとスプリット7"をレコーディングした。 他に俺はBRUCE BANNERのドラムの代理で、ヨーロッパ・ツアーに出たよ。またこの年は、俺の好きなバンドの一つであるBURNING KITCHENのメンバーとSJU SVÅRA ÅRを結成したんだ。 それから、WOLFBRIGADEやSECOND THOUGHTのメンバーとTO WHAT END?も組んだ。UBBAは2ndアルバムをレコーディング。 SECOND THOUGHTはスウェーデンを何度もツアーして廻ったね。

2002（20歳） 強烈で目の廻るほど忙しい1年だったな。SECOND THOUGHTのスプリット7"を自分のレーベルから出し、EPはReally Fast Recordsから出したよ（この時は一度に2枚分をレコーディングしたんだ）。SAYYADINAとヨーロッパ・ツアーも行った。しかし帰国して俺はバンドをやめた。ベースを弾くことに疲れ始めてきた時だったんだ。ツアー後のある日、仕事から家に戻る途中で車にひかれて、鎖骨を骨折したことがあった。しかしすぐにTO WHAT END?の1st EPをレコーディングしたよ。痛いなんてもんじゃなかったな!
UBBAでは俺たちのレーベルのBirdnest Recordsから作品を出

している他のバンドとツアーに出た。また、KSMBのドラムだったJohan Johanssonのバックバンドもつとめたよ。彼は俺のパンク・アイドルさ。この体験はでかかったな。UBBAはツアーの後に活動休止に入る。いや、実のところは解散だよ。この年の9月に、SUNDAY MORNING EINSTEINSとTO WHAT END?もやっていたJockeから、ドラムでWOLFBRIGADEに入らないかと誘われたんだ。WOLFPACKもWOLFBRIGADEも大ファンだったから、迷うことはなかった。リハーサルを一度やった後に、ヨーロッパ・ツアーに出たよ。
BRUCE BANNER/SOUND LIKE SHITのスプリット７"では、BRUCE BANNERはNEGAZIONEのカヴァーをやったんだが、俺がドラムを叩いたんだよ。SJU SVÅRA ÅRのほうはEXECRADORES（ブラジル）とMAKILADORAS（オランダ）とでスカンジナビア・ツアーしたね。

2003（21歳）この年の頭に、WOLFBRIGADEはTomas SkogsbergとSunlight Studiosに入り、『In Darkness you feel no regrets』をレコーディング。これは俺が初めて参加したWOLFBRIGADEの作品になったよ。また違ったものを出せていたらいいんだけど。俺も１、２曲書いたし、WOLFBRIGADEのカタログに俺が刻み付けられた良い一歩になったと思う。TO WHAT END?のほうは、Mieszko Talarzcyk（NASUM）をエンジニアに迎え、Soundlab Studiosで1stアルバムのレコーディングに入る。またSJU SVÅRA ÅRも７"を作る予定でスタジオに入りレコーディングしたんだけど、結局はインターネットで流すデモになっちまった。SUNDAY MORNING EINSTEINSはARTIMUS PYLE（US）とツアーに出たな。
それからNecromorbusスタジオでLP『Kängnäve』をレコーディングしたが、これがこのバンドでの最後の仕事になった。ベースを弾くのにほとほと疲れ切ってしまってさ。その頃、SJU SVÅRA ÅRをやめる決心をしていたんだ。SUNDAY MORNING EINSTEINSは俺なしでも続き、SJU SVÅRA ÅRは解散した…復活までのしばらくの間ね。
この頃のことはあまり思い出せない。深く落ち込んでいたし、強い薬も飲んでいた。混沌とし、酔っ払って、暗鬱な心に支配されていた。最悪だったよ。

2004（22歳）この年もいろいろなことがあったな。よく思い出せなくてね。WOLFBRIGADEは『A D-beat Odyssey』をレコーディングしたよ。ヴォーカルのMickeが喉に深刻な問題を抱えていてね。そのために予定していたUSツアーは2回のギグを除きキャンセルし、このギグで最後にしようと考えた。俺たちは決まったやり方にはうんざりしていたし、バンドとしてもうまくいっていなくて（その時のベーシストは俺が叩いた初期の2作品では弾いていなかったやつだったしね）。だからアメリカでFROM ASHES RISEとのギグを2回やった後に解散することを決めたんだよ。俺たち４人はすぐにTODAY'S OVERDOSEを結成した…Mickeが喉の手術後に歌うことができるかどうかの確信はなかったが、彼も含め…新しいベースにJohanを迎えてね。
次に俺はBRUCE BANNERのドラムとして、またUSに発ち、5週間半ツアーすることになった。ツアーを終え、家に戻ると、生活を大幅に変えたよ。抗鬱剤を摂取するのをやめ、普通の状態に戻ろうとした。2004年の11月に、俺が最初に夢中になったASTA KASKの再結成に関するメールが届いた…俺がドラムを叩いたらどうかってね。
TO WHAT END?ではENTOMBEDのサウンド・エンジニアだったOlle Sundqvistと2ndアルバムをレコーディングしたよ。ミックスはまたMieszkoにやってもらったんだ。悲しいことに、彼に会ったのはそれが最後になってしまった。タイの津波で彼が亡くなる、たった6日前のことだった。

2005（23歳）3月にTO WHAT END?で4週間のUSツアーに出る。バンドの問題を考えれば、良いツアーだったね。ツアーから戻った後に、初めてASTA KASKと練習をし、4月には最初のギグをやったんだ。ライヴを何本もやるようになり、自分たちでもかなりの手ごたえを感じたよ。再結成バンドの気持ちではライヴをやらないとも話し合うようになっていたしね。実際に再び現役のバンドとして蘇り、アルバムもレコーディングしたよ。TODAY'S OVERDOSEのほうは７"を録り、VICTIMSと小ツアーをやったんだ。TO WHAT END?はWITCH HUNTとのスプリット７"のために3曲をレコーディングした。

2006（24歳）ASTA KASKはBurning Heart/Epitaph Recordsと契約し、プロデューサーにMILLENCOLINのMatte Färmを迎えて、Soundlab Studiosでレコーディング。本格的なプロデューサーと作品を作ったのは、俺はこれが初めてだった。多くを学んだよ。11月に初めて日本をツアーしたけど、このツアーは俺が体験した中で最高のツアーになった。スウェーデンに戻るとアルバム『En för alla ingen för nån』がリリースされ、このアルバムのツアーをスウェーデンとノルウェーで行った。12月にTODAY'S OVERDOSEはWOLFBRIGADEとしてまたギグを何本かやることを決め、作品を作ろうと考えたんだ。でもそれ以上は話し合わなかったよ。TO WHAT END?は活動休止に入る。

2007（25歳）WOLFBRIGADEは復活し、『Prey To The World』をレコーディング。スウェーデン、イタリア、UK、US、ノルウェー、ドイツなどでギグを行った。ASTA KASKはギグをやり続け、ドイツのTHE ACCIDENTSとツアーを敢行。11月にWOLFBRIGADEは新曲を作るためにスタジオを予約したよ。それがアルバム『Comalive』の最初のレコーディング・セッションになっていったんだ。

2008（26歳）ASTA KASKはスウェーデン、バスク国/スペインをツアー。そして、SJU SVÅRA ÅRはスウェーデンで行われた"Punk Illegal"フェスティバルのために再結成を果たす。10月にASTA KASKのErnieが癌と診断され、彼が回復するまではライヴをストップしようと決めた。WOLFBRIGADEのアルバム『Comalive』が完成。
俺は11月にナチ数人に頭を蹴られ、手術しなければならなくなってしまった。でも12月にはもうWOLFBRIGADEのギグでプレイしていたよ。

2009（27歳）WOLFBRIGADEで2009年の初めにヨーロッパ中をツアーして廻る。俺は友達のやっているタトゥー・ショップのSWAHILI BOB'S TATTOOとPIERCING（SBTP）でショップ・アシスタントとして働き始めた。また自分でもハードコアやパンクの店、SWAHILI BOB'S SHOPを始めたよ。WOLFBRIGADEはチェコで開催された"Obscene Extreme"フェスに出演。ASTA KASKのErnieの体調も戻り、9月にはまたギグをやるようになる。10月にタトゥー・ショップは4周年を迎え、それを記念するギグにPOISON IDEAに出演してもらおうと招いたんだ。800人が集まり、チケットはソールドアウト。俺は新たにDEADWEIGHTに加わったよ。ここでは初めてベースを弾きながら歌も歌った。でも今はドラムと歌になったけどね。SJU SVÅRA ÅRはTHE BABOON SHOWのHåkan Sörleとアルバムをレコーディングしたよ。

2010（28歳）ASTA KASKはBLOOD OR WHISKEY（アイルランド）とヨーロッパ・ツアーを敢行。プロモーターがクソで、裏切られてしまった。
再びWOLFBRIGADEも動き出し、5月にUSで行われた"Maryland Deathfest"に出演したんだ。今後は、また日本を訪れたいし、レコードももっと作りたいね！

PERSONAL PUNK history fifteen

Salomon Segers/NIGHT FEVER



DENMARK

1987 9月30日(0歳) コペンハーゲンで生まれる。ジェームズ・ディーンが車の事故で死んだのと同じ日付。

1993－1996(6－9歳) 兄からMEGADETHのアルバム「Countdown To Extinction」をもらう。毎日聴いて全曲覚えた。兄が言うには、俺が6歳の時にくれたらしいが、俺の記憶じゃ8歳か9歳だったはず。だけどあてにならない記憶だから、まぁ、1993年か1996年のどちらかだろう。

1997－1998(10－11歳) MEGADETHの殆ど全てのアルバムをCDで聴いていた。METALLICAやSCORPIONS、BLACK SABBATHにRAINBOW、他のメタル・バンドも聴き始める。

1999(11歳) Ungdomshusetでのパンク・ショーに、親友のAndreasと一緒に初めて行く。5月29日のことだった。彼の兄弟であるKasperがHULというバンドをやっていて、その2度目となるショーがあったんだ。HULの他にも、INTOXICATED BUGS、ZONKED、BALLROOM BOZOSが出演。

2000(12－13歳) 俺、Andreas、Kasper、それにHasseで、初めてのパンク・バンド、UNITED WANKERSを結成。リリースはなかったよ。一本だけテープはあるけどね。この年、BLACK FLAGやMINOR THREAT、DEAD KENNEDYSといったたくさんのクラシックなアメリカン・ハードコア・バンドを聴き始める。
SEX PISTOLSやRAMONESみたいなバンドも。それにSLAYER、PANTERA、DEICIDE、あとNAPALM DEATHといったヘヴィ・メタルも。

2001(13－14歳) "本物"のパンク/ハードコア・バンド、"ARRIGH ANTÆK"を始める。多分、訳すとAgressive Outfitになるはず。3月にBørnehuset(通称The Kids House)で初コンサート。

2001－2006(13－18歳) この5年間の記憶はぼんやりとしている。手当り次第に酒を呑んでいたし、問題児だったな。2003年には、俺たちのことをクソだと言ってくるクラスティーズにムカついたので、ARRIGH ANTÆKはアンチ・ポリティカルな品性正しきパンク・バンドへと発展する。
そしてみんなから嫌われ始める。けど関係ねぇよ。俺の友達ってのは、全員格好良いハードコア・バンドでプレイしている奴らだったし。2003年から2004年にかけては、理解し難いセックス禁止令が出された。同じ年頃の女の子全員とヤリまくってはそいつらをおざなりに扱っていたんだが、それを聞きつけたクラスティーズが若いパンクの女の子たちに、「あいつとは寝るな」と言って廻りやがったんだ、ハハハハハハ!!!!
俺はパンクだし、自分自身、俺にはリスペクトできるところが一つもないって分かっているのに、女の子が俺のことをリスペクトするわけないよな?!どんなオマンコも俺には近づいて来なくなったから、俺は15、16歳だってのに売春婦とヤラなくちゃいけなくなったんだ。政治的に品行方正なクラスティーズにこのことがバレちまって俺はもう、パンク・シーンにいる野郎共のほとんどを大嫌いになった。(16歳のかなりいけてる実績として)他にも色々と面白いクソみたいなこともあったんだが、忘れちまったな。おお、そうだ、初めて住居に侵入して強盗を企てたのは、この時期の終わり頃だったぜ。

2006(18－19歳) ARRIGH ANTÆK解散。この年、俺はスピードやコカインといったドラッグをさばき始める。同時にドラッグにハマる。

2007－2008(20歳) まだ活動中のバンド、NIGHT FEVERを始める。

2010(22歳) 俺は一文無しの貧乏な糞野郎。俺は自分の人生がイヤでしょうがない。大量のレコード・コレクションを保有して、そして、最近じゃ自分の人生について日本のジンに寄稿したりしているぜ。ハハハハ!

PERSONAL PUNK HISTORY SIXTEEEN

1985（0歳）ブラジルのサンパウロにて誕生。

1989（4歳）幼稚園へ通う…まだガキだった。4歳だよ…モンスターや悪魔の絵を描くのが好きだったな。ポルトガル語を学び始めた。

1992（7歳）学校に通い始める。ブラジルは日本とは違い、1学年から8学年まであり、8年間通うことになる。日本でいうところの小学校と中学校だね。

1996（11歳）まだこの頃は音楽は重要じゃなかったよ。家族が聴いているものを聴くぐらいだったな…。この年の中頃、俺はおじさ

Rafael Yaekashi/N.E.K., DARGE
KARASU KILLER RECORDS
MISOSHIRU OF DEATH PHOTOGRAPHY

BRAZIL



んのオフィスで働くようになった。会社に新聞を届けたり、銀行に支払いに行ったり。良い時代だったな。

1997（12歳） IRON MAIDENやKISS、JUDAS PRIEST、AC/DCを聴いているやつらと学校で知り合いになったよ。カセットテープにダビングしてくれて俺にくれたんだ！この時からそういうバンドをめちゃくちゃ聴くようになった。音楽に凄ぇ興味を持つようになって、一緒にいて楽しいワルの友達ができたな。ハハ。MOTORHEADやSLAYER、VENOMやSEPULTURAも知ったよ！この年の終わりにはブラジルのバンドを聴きたいと思うようになったぜ！RATOS DE PORÃOのアルバム『Feijoada Acidente - Brasil』を買うために金をためたよ。このCDは俺の人生を変えた。この日を境に、俺はブラジルのパンク/ハードコア・シーンの作品を捜し求めるようになったよ。

1998（13歳） まだアンダーグラウンド・シーンを知らなかった。RAMONES、SEX PISTOLS、NIRVANA、IGGY&THE STOOGES、Patti Smith、THE DOORS、DEAD KENNEDYS、G.B.H、POISON IDEA、CIRCLE JERKS、BLACK FLAGなどを友達に借りて聴いていたね。でも俺はブラジルのバンドに強く惹かれていたから、RATOS DE PORÃO、OLHO SECO、CÓLERA、RESTOS DE NADA、LOBOTOMIA、INOCENTES、LIXOMANIA、PSYCHIC POSSESSOR、AÇÃO DIRETA、GAROTOS PODRES、ULSTERを聴くようになっていったよ。マリファナを吸ったのもこの時期だ！ハハハ。生活は荒れてたな！でもこの年、ビデオでRAMONESのDee Dee Ramoneを見て、ベースを弾く自分を想像してみたんだ!!!ギタリストになりたかったが（Angus Youngが好きだったんだよね。ハハ）、あまりにも難しそうでさ…。

1999（14歳） 反抗的だったな。タバコを吸い、酒を飲んでは酔っ払ってた。学校や街でケンカにあけくれてたよ。状況は悪かったが、悪いほうに考えがいかないように、ベースの練習をして気を紛らわせていたんだ。

2000（15歳） ハイスクールに入学。ANEURYSMって初めてのバンドを組み、忙しい時期を過ごす。俺はまだまともにベースが弾けなくて、プレイすることと格闘してた…。

2001（16歳） カヴァー曲をやったり、いろいろなスタイルの音楽をプレイするようになっていた。ブラジルのロックからBLACK SABBATHまでね。RAMONESからTHE DOORSまでに影響されたオリジナル曲もあったな。様々な場所で演奏もしてたよ。週末はいつもどこかでプレイしていた。俺の予定はいつも詰まってたし、自分たちの機材を貸したりもしたし、いい時期だった…。

2002（17歳） ハイスクールを卒業し、もっと自由にバンドができるんじゃないかと思ったよ…。

2003（18歳） RATOS DE PORÃOのショーで、俺の奥さんとなる女性、俺の子供の母親となる女性に出会った。これは後に俺の人生のクレイジーな物語となるんだが、説明するには複雑過ぎるな…。車の免許をとったよ！この年、俺は大学に入学するんだが、状況は混沌としていた。金を支払えなかったからな。この時期、たくさんの問題を抱えていて…全てを変えなくちゃならなかった。俺は日本へ旅立つ決意を固める。言葉も文化も知り合いもなく、何のあてもなかった。ただ"世界忍者戦ジライヤ"（特撮アニメ）のファンだった!!!!

2004（19歳） ブラジルでの生活に希望が持てず、俺は2月に国を出た。ブラジルでの俺は貧しく、給料で家族を養い、タバコとレコードを買うのみ。運転免許をとれたのは、母親の援助があったからだ。こんな生活を俺は望んでいなかった！クソみたいな人生を変え、新しい道を進みたかった。運よく日本行きは正しい方向だったと思う。今、俺の生活は変わったよ。ここの暮らしを気に入っているし、仕事もできる。必要なものもどうにか買える金もある。この日本で未来を見ることができたんだ！日本に着いたばかりの時、地球の裏側で孤独を味わい、後悔や苦しみにぶち当たったよ。早まった選択をしてしまったんじゃないかってね！言葉をはじめ、困難が多かった。身振り手振りを交え、実にひどいもんだったな。日本食も食べられないし、スシも得意じゃなかったし。仕事はハードでめまぐるしく、汚れるものだったしね。大変だったが、俺は孤独も悲しみも絶望も知っていた。
しかし、全てが変わることも知っていた…。名古屋空港に到着した時は、寒かったな…。仕事場のある街へ向かったよ。最初に住んだのは静岡県で、初の職場はSuzuSHITだった、ハハハ!!!1ヶ月働き、クビになっちまった。過酷な仕事だと知らなくて…。この年、職場を3回移り、一番続いたのは2ヶ月だったな。仕事はハード過ぎたし、同僚はひどかった。ボスも最悪だったんだ。一生懸命に働いたし、夢もあったが、あまりにも過酷で、人生の中では悲しい時期になってしまったよ。

2005（20歳） 日本で1人ぼっちの生活はしたくなかった。でもその土地のことも何も知らなかったし、友達もいなかった。愛知県に母親が住んでいたから、静岡で働くのをあきらめ、母親と同じアパートに住むことにしたんだ。ラーメン屋で働くようになったが、息もつけないあわただしい仕事で、同僚にも嫌われていたよ。ここは2ヶ月間だったな。ハハハ…。でも小牧市で働くようになり、友達も何人かできたよ。家にインターネットもひいたんだ。これで連絡もとれるようになり、ブラジルの情報も入ってきたよ。ここでできた最初の友達はMauricio（ex-NOMARES、N.E.K.）だった。この年、インターネットを通じてCajuから連絡がきたんだ。NOMARESでベースを弾かないかって誘いだったよ。しばらくして、Akira（INJECTING STEEL）とMauricioがバンドに加わり、俺たちは静岡のスタジオで数曲をレコーディングしたんだ。近くにスタジオを見つけられず、静岡まで行ったんだよ。ハハハ！この時の音源は、1stデモ・CDR『Pensamento mal』となった。この作品を日本のいろんな人たちに配ったよ。日本のパンク・ロッカーに出会いたかったんだ。この時に、日本のパンク・シーンで俺たちを手助けしてくれた、Nakamuraさん（Answer Records）に出会ったよ。この年は、俺はベーシストを必要としているINJECTING STEELにも加わり、トラディショナルな80'sメタルをプレイした。JUDAS PRIEST、RUNNING WILD、ACCEPTなどに影響を受けたバンドだよ。同じ街で練習もしていたから、活動もしやすかったしね。練習にあけくれ、友達もできた年だったね!!!

2006（21） 4月にNOMARESとINJECTING STEELは浜松市で初のギグを敢行。ブラジリアン・イヴェントに出演し、ステージは素晴らしいものになった。NOMARESが日本人のオーディエンスの前に立つ初ライヴは、Answer Recordsが企画してくれた、名古屋今池の涅槃でだったよ！ADA+MAX、KAMISORI、HISATAKA、DR.CATSPAW（Ozarin ex-FLASH GORDON）と共演し、もう最高のギグだったね…面白かったな。俺たち、日本語をまだよく知らなかったからね!!!
5月5日。名古屋ハックフィンでSEE YOU IN HELLを初めて見たよ。共演していた日本のバンドは、CHEAP SKATE、EASIES、J.U.U.M.、CONTRAST ATTITUDE、LOW VISION。そしてShingo Maeda（ENCROACHED/Too Circle Records）と友情を築けた日にもなった。6月に俺はインディペンデント・レーベル且つディストロのKarasu Killer Records（KKR）を設立する。ブラジルと日本の交流をはかるために作ったんだ。加えて自分たちの作品をリリースしたり、日本でブラジルのバンドの作品をディストリビュートすることもね。俺はアンダーグラウンド・シーンでもDIYのアティテュードも信じている。俺たちの目的は様々に異なったスタイルと関わることなんだ。パンク・ロック、ハードコア、ジャパニーズ・ハードコア、クラスト、ファストコア、パワーヴァイオレンス、スラッシュ、グラインドのように。文字通り、ノイズさ！KKRの目的は金持ちになることでも、アンダーグラウンドで金を稼ぐことでもない。自分たちが良いと思ったものやメッセージを持ったものをディストリビューションする。日本にブラジルの作品を紹介し、ブラジルに日本の作品を紹介することさ。10月にNOMARESは東京で行われたToo Circle Records企画の"I'll shoot the icons Vol.10"に出演。共演はENCROACHED、UNARM、SHORT FUSE、GORDON IVY & THE JAYBIRDS。現実とは思えなかったよ！ブラジルのバンドが東京で演奏するなんてね。

2007(22歳) 2月にNOMARESは横浜、浜松、三重、岐阜、名古屋、様々な地方でプレイした。Mr.Okazaki(ETERNAL ELYSIUM)をプロデューサーに迎え、アルバムやオムニバスに収録する予定の曲をStudio Zenでレコーディング。しかしバンドはその年の終わりに結末を迎えることになる。俺は5月にDARGEのOze(gt/vo)と出会う。11月にはShinsuke(ex.J.U.U.M)と同時期にDARGEに加わることになった。俺は日本のハードコア(S.D.S.、DEATH SIDE、CROW、LIP CREAM、GAUZE、CORRUPTION OF PEACE、DSB、NIGHTMARE、VIVISICK、FLASH GORDON、NICE VIEW、S.O.B、OUT OF TOUCH、ENCROACHED…)が大好きだから、日本のバンドでプレイしたかった。DARGEでベースを弾くのは本当に楽しい。バンドのスタイルにも夢中だ。ファンタスティックな体験だね。俺は曲や様々はことに対して、自分の考えを持ち込むことができる…ブラジルと日本の独特なミックスもね。日本語とポルトガル語の歌詞っていうのもそうだね。

12月にはMauricioと新しいバンド、N.E.K.を結成。ブラジリアン・オールド・ハードコアと呼べる音のバンドだ。ビートを担当するメンバーを捜していたが、少ししてドラムを見つけることができた。Naito-san(ex.OUT OF TOUCH、ATROCITY EXHIBITION、NAUSEA、UNHOLY GRAVE、C.F.D.L.)が加入し、ブラジルのパンク・スクリームとウルトラ・ファストなジャパニーズ・スタイルが結びつき、そこにスラッシュ好きのギタリストのメタリックなサウンドが絡むサウンドができあがったよ。最初の1ヶ月はスタジオでも全てにおいて戦いのようだった。その中でN.E.K.のスタイルをつかみ始めていったね。ヴォーカルやステージのパフォーマンスにもしっくりくるRafael Miniに加わってもらう必要も感じたんだ。Kenjiに出会ったのはこの年だ。『DOLL』誌に記事やインタヴューを書くようになる。ブラジルのバンドを日本のみんなに紹介したよ!俺は書き続けた!!!そして、2007年にカメラを購入。20万もしちゃったよ!!!その後は写真を撮りまくったね!!!

2008(23歳) 7月にToo Circle Recordsから1st 6曲入りEPをリリース。Shingo Maedaには本当に感謝してる。このEPはメディアにメタルの影響のあるロウ・スラッシュと評された。ブログやウェブジン、雑誌にもたくさん取り上げられたよ。そのうちの一つが『Maximum Rock'n'Roll』誌に掲載されたMartin Sorrondeguy(LIMP WRISTのヴォーカル)の記事で、LIMP WRISTの日本ツアーで共演する機会を得たよ。彼のレヴューにはN.E.K.はRATOS DE PORÃOの中期によく似ていると書かれていた。N.E.K.はクレイジーで凶暴だと…。俺のヴォーカル初体験は、世界にはびこる憎しみに唾を吐き、俺が伝えたいことを聴いてくれるやつらに大声でシャウトすることだった。同じ7月、DARGEはStudio Zenでレコーディング。その日のことは覚えているよ。友達がバーベキューしていたが、俺たちは行けなかった(笑)!レコーディングしていたからね…ハハハ!2008年は忙しい年だったね。

2009(24歳) 人生最高に狂った1年だった!!!N.E.K.は多くの作品を出したな。1月にはKarasu Killer RecordsからN.E.K./SEPTIXの作品をリリース。このスプリット・テープのイメージは、ブラジルのハードコア+日本のハードコア・パンク=N.E.K.。メタルの影響のある、アグレッシヴなスラッシュ・パンクで、ブラジルと日本、ex-NOMARES、ex-OUT OF TOUCHを含み、カオティックなミックスが施された曲を収録した。その後はN.E.K./ADA+MAXのスプリットCD『Arroz, Feijao e misoshiru』を発表。このタイトルは日本とブラジルをミックスさせているんだ。"Arroz, Feijao"はブラジルで毎日のように食べられる豆を使った家庭料理、"misoshiru"は味噌汁、2つの文化の融合を意味している。素晴らしい友達でもあるADA+MAXとのキラー・スプリットになった。HARDCORE KITCHENのCometに大きな感謝をしているよ。同時にDepression RecordsからVA『Banned In Nagoya』がリリース。N.E.K.は2曲参加。地元のハードコア・コンピレーションだ!!!VA『Banned In Nagoya Vol. 2』にも収録されたよ。Karaki Depressionに大感謝だ。7月にはDepression RecordsからN.E.K./UNHOLY GRAVEのスプリットEPがリリース。ダーティ・ロウ・グラインド・クラストvsロウ・ダーティ・ブラジリアン・ハードコア/クロスオーヴァー。UNHOLY GRAVEは俺の大好きなバンドの一つなんだ!

2009年もN.E.K.とDARGEは忙しい年だった。1月には岐阜でC.O.PやCRUCIAL SECTIONと共演し、3月には東京でもライヴ。名古屋に戻り、4月にはVOETSEK(USA)と共演。5月はHELL SAKURA(ブラジル)の日本ツアーの名古屋に出演。また、『EL ZINE』にも記事を書いたよ。"Real Life in Brazil"の記事や、インタヴューを寄せた。DARGEはUSAのSECRET SECTとのスプリット・テープをリリース。実はまだ作品を受け取っていないんだよな。持っているのはメンバーのOzeがRecord Shop Baseで買った1本だけなんだよ。またDARGEの5曲入り1st EP『Desespero』がヨーロッパのBlack Seeds Recordsからリリースされる。11月にはMCR Companyから『Desespero』がCDで登場。Yumikes、どうもありがとう!12月にはN.E.K.がブラジルのD.F.C.とスプリット7"EP『混沌の兵士』をToo Circle Recordsから発表。俺はブラジルに住んでいた時に、D.F.C.をよく聴いていたんだ。このバンドの大ファンだったし、メンバーのTúlioはいい友達だ。このスプリットをやれてよかったよ。日本とブラジルにこれを広めることができ、日本の人たちにメッセージに加え、俺たちが日本に住んでいる現実とブラジルの生活について伝えることができた。また、同じ12月にN.E.K.はCrew For Life RecordsリリースのVA『United Thrash Night Compilation』CDに2曲参加。

11月から12月にかけて俺はブラジルの友達に連絡をとり、DARGEのブラジル・ツアーを企画したんだ!!!2009年は猛烈な1年だった!!!友達も増え、ギグも重ね、写真も撮りまくり、リリースも多かったな!!

2010(25歳) ブラジル人の仲間には日本に来ては帰国していく者もいたが、俺には日本人の友達がいたおかげで幸せだったよ。自分のフリッカー(写真9387枚)もあるしね、ハハハハ!!!MISOSHIRU OF DEATH Photographyの写真集を作る夢もある。今年もすでに激しく動いているよ。ただ、N.E.K.にはMauricioがバンドを離れるという問題もあった。DARGEはブラジル・ツアーのスペシャル編集盤CD『憎悪 Ódio』を発表。ブラジルでもディストリビューションが行き届き、広く知れ渡ったよ!DARGEのブラジル・ツアーは春に行ったんだが、2週間かけて様々な土地でプレイしてきたよ。南東、南、中西部方面を廻ってきた!!!俺は家族にも会い、84歳のおばあちゃん、姉妹、友達にも会ってきたよ。(7年前にデートした)ガールフレンドとの関係も取り戻し、来年ブラジルに戻って結婚するんだ!!!またブラジル・ツアーを?まだわからないな!ブラジル・ツアーは良かったよ。問題は30時間もかかるってことかな!!!!!!めちゃくちゃ遠い!!!6月にN.E.K.は1st LPをリリース。夢が叶った気分だ…12"でリリースできるなんて想像もしていなかったよ。そのLP『Gerações Condenadas―次代の宣告』は、Too Circle Records/Karasu Killer Recordsからリリース。本当に幸せだ。今はDARGEのLPをリリースできたらと思っている。N.E.K.の問題は解決したよ。Iwane(ex.ZILEMMA)がギターを引き受けてくれた。現在、バンドの状況も良く、レコーディングもし、間もなく新しい作品をリリースできると思う。DARGEは日本の様々な土地でプレイし、今年MCR Companyからブラジル・ツアーのDVDをリリースする予定なんだ。すぐに次のアルバムをリリースしたいな。12月にはABERRANTってアメリカのバンドとツアーをする予定もある。"Japan Weekend Excursion Tour"(w/ABERRANT)を12月10日東京、11日大阪、12日名古屋と廻るつもりなんだ。忙しさは続きそうだ!アンダーグラウンドのためにできることをやっている。人はもっと団結するべきだと思う!

書き忘れていたことがあったらごめんよ。俺の真実の物語を楽しんでくれたらと願う。俺は常に自分の考えを口にし、本当のことを言葉にしている。君が気に入ってくれるかくれないかだ!俺の人生に秘密はない。俺は取るに足らない男だ。自分のまわりの全ての人たちをリスペクトしているし、新しい友達を作っていきたい。俺は俺、他の誰にもなりたくない。俺は決して変わらないし、変わらないだろう。No gods, No Masters!!!

http://twitter.com/KarasuKiller

EXTINCTION OF MANKIND

UKクラスト・シーンの大ベテラン、EXTINCTION OF MANKINDが名古屋のDISGUSTの招聘により来たる9月、ジャパン・ツアーを行います!
80's UKHCの血脈をしっかりと引き継いだ上でのクラスト・パンクは、やはりここ数年で出て来たバンドとは確実に一線を画していると言えるでしょう。まさか日本でEXTINCTION OF MANKINDのライヴが見られるなんて、僕は夢にも思っていませんでした。
現在のラインナップはヴォーカル/Ste、ベース/Ginny、ギター/Scoot、ドラム/Alan。全ての回答はSteによるもので、そこにGinnyが時折言葉をつけ加えたりしたそうです。AXE TO GRIND 2010!!AAAGGGRRRHHH!!

■まずはEOMの結成について。どうして1992年にスタートしたのですか?

「何年も俺はバンドのライヴを見続けて来たんだけど、単なる一観客でいるよりも、もっと関わってみたかったんだよな。多くのバンド、AMEBIXやANTISECTなどといったバンドのライヴを見るのは大好きだったしね。そういったバンドが解散してからも、俺はヘヴィで格好良いバンドはまだ必要とされていると思った。俺はFozのことをよく知っていて、彼はドラムをやっていたんだ。そしてMassはギターをやっていた。俺たち全員、仲の良い友達だったんだ。それでバンドを結成して、やってみようぜ!って決めたのさ。MassはFozzyにベースとして加入して欲しいと頼んで、家のガレージで練習し始めた。マンチェスターやブラッドフォードといった地元のギグで、DOOMやHELLKRUSHER、EXCREMENT OF WARなんかと一緒にやり始めるようになるまでは、それほど時間はかからなかったよ」

■EXTINCTION OF MANKIND(人類の絶滅)というバンド名にしたのはどうしてですか?終末的な名前ですよね。

「良い名前だと思わない?人類にとっては、人類そのものが最悪の害悪であり、ゆっくりと俺たちは自殺しているようなものだ。当時は、人類がこの惑星と自身に対する扱い方を表すのに、この名がよく合っていると思ったし、今ではより適した名前になってきているよな」

■スウェーデンとUKのハードコア・パンクから大きな影響を受けているでしょうが、初めて聴いたパンク/ハードコアは何でしたか?ポピュラーなSEX PISTOLSやCLASHといったバンドでしょうか?

「確実にそうだな。70年代、俺は若いパンクスだったし、SLAUGHTER AND THE DOGSやSEX PISTOLS、CLASH、DAMNEDといった初期UKパンクを70年代に、それから80年代にはDISCHARGEやEXPLOITED、GBHといったバンドを聴いていたよ」

■最近の作品はProfane Existenceからリリースしていますよね。どうしてProfane Existenceからリリースするようになったのですか?Dan(PE主宰者)から話しがあったのですか?

「俺がDanと初めて出会ったのは、彼がPISSEDとしてミネアポリスからツアーにやって来た時だった。それから96年のEOMとMISERYによるヨーロッパ・ツアーで再会したんだよ。俺たちの1stアルバム"Baptised In Shit"はドイツのSkuld Recordsから発表されたんだが、SkuldはProfaneと協力体制にあった。"Aftermath"というコンピレーションにも1曲参加したけど、そのコンピはDanがやっているBlackened Distributionからリリースされて、こいつはProfaneが抱えていた負債を清算するためのベネフィット作品でもあった。その後、"The Nightmare Seconds"というアルバムを自分たちでCDリリースした時に、Danが"アナログ・ヴァージョンで出したい"と言ってきてくれた。それからだな、俺たちは彼と一緒にやってきているわけだ」

■EOMはUKで長い間プレイし続けていますが、90年代から現在に至るまでのUKパンク・シーンに大きな変化は感じていますか?

「ああ、90年代のギグは遥かに良かったよ。より多くの人々が見に来ていたが、今やそれは違うシーンの話しだ。90年代にギグに来ていたようなパンクスはもう滅多に目にすることは出来ないぜ。あいつらみんな、多分俺たちとは違う風に成長したのさ、ハハハ!今じゃパンクスは新しい世代となり、ギグが企画されることも少なくなって、あんまり宣伝もされていない。最近じゃMyspaceやFacebookなどといったソーシャル・ネットワーキング・サイトから何でも始まるだろ。人々は自分らのMyspaceのページにフライヤーを掲載して、それで十分やったと思っている。これでみんなが自分たちのギグに来てくれるだろうって思ってな。でも、オールドスクールなスタイルを必要としている奴らは、ヴァーチャルな世界ではなく、現実の世界で、ギグでフライヤーを手にしないと満足出来ない。全てが安易になり過ぎている。キッズがインターネットを飛び回って、Myspaceで200ものバンドと友達になることも、それから音楽をダウンロードすることも、ほんの数ケ月/数年間だけパンクとしてプレイすることも。それがアンダーグラウン

ドなD.I.Y.パンクや、他の何やらになるのかもしれないが、もしそれでギグをやるのなら出来うる限りプロフェッショナルであって欲しい。そうすればバンドもハッピーで、観客もハッピー、そしてシーンも強固になる。つまりはシーンに対してベストを尽くすということだ。悪く捉えないでくれよ、シーンのために素晴らしいことをしている人々も沢山いる。ただもっと努力する必要がある奴らもいるってことだ」

■申し訳ないのですが、最近の新しいUKのパンク・バンドについてはあまり知らないのです。オススメの新しいバンドっていますか?

「BULLETRIDDEN、CONSTANT STATE OF TERROR、WARPRAYERだな。まぁ、こういったバンドの大部分のメンバーは、違うバンドでずっとシーンの周辺にいたんだけどね!最初に思いついたのがこいつらなだけであって、俺たちが知らないだけで、沢山の新しいバンドがいるよ」

■もちろん今でも古くからのバンドが活動しているのは知っていますが、DISCHARGEやVARUKERS、EXTREME NOISE TERROR、EXPLOITEDなどとは一緒にライヴをしていますか?それとも彼らは違うシーン?

「俺たちはそれら全てのバンドと、一緒に何年もやっていたことがあるよ。いくつかのバンドは違うシーンだけど、時々交わることもある。EXPLOITEDなんかは俺たちとは違うシーンで主に活動しているな。でも過去に共演したことはある。"独りよがり"のPCパンクスの何人かは、EXPLOITEDには問題があるなんて思っているんだろうけどさ、彼らは常に、本物のパンクのルーツに忠実だし、決して諦めちゃいない。凄くリスペクトしているぜ。いくつかのバンドは出たり入ったり、



違うシーンに移ったりパンクに戻ってきたり、解散したと思ったら数年後には再結成したりしているよな。俺らには彼らのモチベーションが何なのかは分からないけど、俺たちにしろ他の誰にしろ、それを批判することなんて出来ない。ある画家が素晴らしい一枚の絵を描いたとしよう。その後、違うスタイルを試みるか、再び筆を執る前に絵を描くことを断念してしまうか、それを決める、選択するのは画家であって他の誰でもない。描くべきだとも、そうでもないとも、誰かが言えるわけがない。しかし、それがバンドには常に起こる。俺たちがやってきたベストなギグのいくつかは、異なるスタイルのバンドたちが同じステージ上に立つ、というものだった。説教されては年がら年中改心しているなんてのは良くないが、俺たちの音楽にはメッセージがあり、機会がなければ意識することのないバンドからのメッセージを受け入れるってのも、時には良いことだしな」

■EOMはICONS OF FILTHのStig(2004年に心臓麻痺で他界)へ捧げられた、ベネフィット・コンピCDに参加していましたよね。彼との思い出は色々ありますか?

「ICONSは80年代によく見ていたんだ。そしてStigとは良い友人になれた。ギグで会うと、俺たちはいつもくっちゃべっては2〜3杯のビールを飲み、大体においてはシーンを一緒に楽しんでいた。ICONSはシーンで重要な役割を果たしていたし、バンドのメンバー全員とも友達だった。Stigは才能に溢れた奴だったよ。パンク・シーンでも非常に大切な存在だったから、彼が亡くなってしまったことは、とても惜しまれている」

■作曲する上で、一番大切にしていることは何でしょうか?

「力強い楽曲ってのはとても重要だ。俺たち



Extinction of Mankind



は主に、まずは楽曲を作りそれから歌詞に取りかかる。両方とも同等に重要ではあるが、楽曲がもし弱かったらそんなメッセージは聴きたくないだろ。歌詞におけるメッセージや意味している事柄も大事だが、俺たちは歌で人々に説教したいわけじゃない。歌ってものは大体、俺たちの生活で起こっていること、そして世界で起こっていることが、どのように俺たちには見えているか、が反映されているんだ」

■ツアーで世界中を廻っていますよね。一番の良い思い出と最悪だったのを聞かせて下さい。

「俺たちは自分たちが大好きなバンドと廻って、そして彼らと良い友人になる。だから俺たちがやってきた全てのツアーは本当に素晴らしいものだ。ツアー中は好ましい人々とずっと笑い合い、そしてグッド・ミュージックをプレイしている。好ましい人々と出会い、時には君が住んでいる町を見て廻る。それって本当に楽しいよな。まぁ、最悪だったのは、ポーランドの不快なスクワットで、トイレとして糞まみれのバケツが置かれていたことだな。アンチ・システムどうこうの前に、基本的な配管工事の技術を学ぶべきだ!バーを作ったり、テーブル・フットボールやスプレー・グラッフィックで遊んでいる時間があるなら、その時間を生活必需品レベルである暖房や水道に使うべきだ!ビールとレコードは生活必需品じゃないだろ!」

■MCRからリリースされるDISGUSTとのスプリットCDのレコーディングは終わりましたか?どんな作品になるのでしょう?

「あぁ、レコーディングは終わったぜ。"Bleed"という作ったばかりの曲に、MISERYとのスプリット・アルバム"Apocalyptic Crust"に収録されていた"One Bullet"の再録(あれは録音が良くなかったからな。このヴァージョンは遥かに格好良いぜ)、それに70'sの大好きなバンドの一つ、SLAUGHTER AND THE DOGSの曲、"I'm Mad"のカヴァーもやっている。Steのことを知っている奴なら誰もが、あの曲は奴にピッタリだって同意するだろうよ!」

■ちなみに、あなた達にとって日本のハードコア・バンドってどうなのですか?

「日本のハードコアのファンだぜ。初期のバンドだとG.I.S.M.にCONFUSE、GAUZE、LIP CREAM、CROW、もう少し後だとSDS、BASTARD、DEATH SIDE、最近のならもちろんDISGUST、それにPALMって大阪のバンドをスウェーデンのフェスで先月見たぜ。彼らはロックしていたよ。いつだって俺たちが日本のパンクのファンだってことが分かるだろ」

■ではこれまで日本に、旅行者としても含め、来たことはありますか?ハードコア・ショー以外に楽しみにしていることは?

「いや、これまで日本を訪れたことのある奴は一人もいないんだ。君らの文化、俺たちのとは異なるそれを体感するのが楽しみだよ。魅力的な建物、多分、歴史的な遺跡なんだろうけど、そういうのを見られる機会があればいいな。伝統的な日本のタトゥーにも凄く興味があって、いくつかオリジナルの浮世絵も見れたら最高だね。けど、ツアー中は訪れた場所を見る時間は滅多に取れない。世界中を廻っているけど、殆ど見れていないよ!あとは君らの地元のビールと、沢山の新たな友人を作ることかな」

■今後の予定や目標について聞かせて下さい。

「俺たちは新しいドラマー、Alanを得たばかりだから、近頃は日本ツアーに向けての準備に集中している。将来的にはもっとレコードを出して、もっと色んな国をツアーして、もっとギグをプレイして、もっとビールを飲むってことかな」

■日本の読者にメッセージをお願いします。どうもありがとう!日本で会いましょう!

「Konnichiwa, ogenki desu ka?俺たちはそっちに行くのを楽しみにしているし、グレートなショーを君らに見せたいと思っている。ツアーをセッティングしてくれたDISGUST、会場を用意してくれたりしている全ての人々、そして俺たちと共演してくれる全てのバンド、ありがとう。俺たちは90年代からずっと日本に行きたかったんだけど、それが今、遂に叶うよ!君らの国を訪れることが出来るなんて光栄だし、ツアーが待ちきれない。パンクであり続け、DIYを貫こう。Cheers and Beers」








NORTHERN SCUM, EASTERN INVASION!
EXTINCTION OF MANKIND
JAPAN TOUR 2010
with
DISGUST
18 SEP NAGOYA - HUCK FINN
19 SEP TOKYO - EARTHDOM
20 SEP TOKYO KOIWA -BUSHBASH
22 SEP YOKKAICHI - CLUB CHAOS
23 SEP KAGAWA - RIZIN'
24 SEP HIROSHIMA - CLUB BORDER
25 SEP OSAKA - HOKAGE



泉勝秋

(iZUMI-mOTION) THE SLOWMOTIONS interview

東京を拠点に活動するパンク・ロック・バンドのTHE SLOWMOTIONSのオリジナル・ドラマーであるiZUMI-mOTIONこと泉勝秋氏にインタヴューを行った。RAW NECK、EVANCE等のハードコア・バンドでの活動を経て現在パンク・ロック・バンドでプレイする氏の叩き出すサウンドの音圧は、常にハードコア・パンクのそれである。またパンク・ロックに対する真摯な姿勢、個人レベルでも精力的に活動する氏の過去から現在、又未来に向けての思いを聞いてみた。

INTERVIEWED:Souichi(UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX)

■出生地は?

「出生地は北海道で、函館の隣町上磯ってとこ」

■中学校、高校時代の思い出とか。

「時効の話だけどファミコンとか出たばっかの時にデパートの窓から侵入して本体とかソフトとか盗んで売り捌いてたりしてた。ひどい事してたね(笑)」

■パンク、ハードコアに目覚めた時期、当時聴いていた音楽、また最初に知る事になるバンド。

「当時周囲が聴いていたBOØWYなんかは聴かないと誓った。単に人と一緒が嫌だった。で、ラジオばっか聴いててFMとかで流れる海外の音楽とか好きでよく聴いてたんだけど、後に分かったのがそん中にPISTOLSやTHE POLICEとかもあったらしいんだけど、何せその当時は何も分からずただずっと聴いていたね。ずっとラジオっ子だった。初めて買ったレコードのShort Sharp Shock (CHAOS UK)は十何曲入ってて僅か¥1500だった。そんで何の気無しに。日本盤だったからライナーノートにハードコアとか書いてあって、最初はパンクと言うよりはハードコアから入ったよ」

■バンドを始めた時期、また初めてのパートは?

「バンドを始めたのが17歳の時でパートはやっぱりドラム」

■ドラムを始めようと思ったきっかけは?

「友達がバンドをやるのにドラムがいないって聞いたから、"俺やろうか?"とか言ってやった…みたいな。全くドラムの事は分からずに。ハイハットなんか要らないだろうと思って先ず除けて、とりあえずスネアとバスドラとライドだけでやってた(笑)。ドカドカドカって(笑)」

■当時の函館パンク、ハードコア・シーン等の状況。

「3つ上の人達がハードコアのコピー・バンドをやっていると聞いた事はあったくらいで、だからちゃんとしたシーンというものはなかったと思う。後に若い世代が函館を盛り上げていくのは、言うまでも無い。因みに白痴というバンドでヴォーカルをやってた事もあります」

■当時聴いていたパンク、ハードコア・バンド。

「日本のハードコアは大体は網羅してた。あっ、MOBSのコピー・バンドを学園祭でやったことがあるよ(笑)。ちなみに曲はNO MORE HEROES」

■上京を決意した時期、またそのきっかけ。

「何もかもが面白くなかった。唯それだけの理由で東京行きの片道チケットを買った。自分の状況を一新したかったっていうのがあって、身一つで来た感じだね」

■上京後の生活等。

「取り敢えず寝台列車に乗って上野に着いて、バンドやるなら高円寺だろうみたいなのがあったから、そのまま電車で向かった。その夜は高円寺中央公園で過ごしてそれから一週間は環七沿いのビルの地下室、ボイラー室とかで寝泊まりしてた。2月の寒さが

骨身に凍みたね。そういうのを経て最終的に部屋を借りる事ができた」

■東京で初めて組んだバンドは?

「ドールのメンバー募集を見たらBLUNT HEADっていうバンドが募集してたもんで、そこでベースを弾いてたけどライヴ4回位でクビになっちゃって(笑)。酒癖悪かったし、スタジオ行って音出さずにそのまま寝ちゃったりしてたら、次の日電話があって「もう来なくっていいよ」って(笑)。了解って(笑)」

■初のツアー、また当時の地方シーンでの友人関係など。

「RAW NECKっていうバンドやっててMESSED UPと北海道、東北ツアーを仙台、盛岡、函館、札幌、東京の日程でやったんだけど、その当時は物販のTシャツとか初めて作って、分からない事ばかりだった。一カ所で100枚は売れると思ってて結局500枚作ったんだけど450枚くらい余っちゃって、ツアーの最終日のアンチノックでばらまいたけどね。未だにジャムの家の押し入れの段ボールの中にガッツリ入ってるよ(笑)。そのツアーで知り合った奴等は今でも付き合いは続いてるね」

■東京でのバンド経歴。

「RAW NECK、EVANCE、THE SLOWMOTIONSかな」

■パンク・ロックに傾倒しはじめたきっかけ。

「パンク・ロックは音が薄っぺらいとか勝手に思ってたんだけど、聴いてみると一つ一つ全然激しくて、全くハードコアとひけをとらない曲も数多くあって、そういう侘び寂びを分かってきてそういう音をやろうと思った」



■THE SLOWMOTIONSの結成秘話等。

「結成の経緯は以前カヴァー大会をやってその時のメンツでの流れっていうか、その当時やっていたEVANCEを辞めた時に、タイミングよくKUROちゃんがLIBERATEを辞めたって聞いたから誘って、ギターとベースどうしよっか?ってカヴァー大会の時に一緒に演ったカズとヒロキいるじゃないかってなってそんな感じ。そんで佐藤君(HG FACT)のとこに『音源出したいんだけど』って話し持って行ったら『だめだよ、そんなの』って断られて(笑)。けど、自分等で出そうと思って曲は作ってて、そしたら佐藤君の方から何ヶ月かしてから『やっぱ、うちから出さないか』って言ってきたから今度は1回断って『どうしよっかなー』って(笑)。プラス、佐藤君も話し持って来てくれて『ただシングル出すんじゃなくて2ヶ月に1回シングル出して、例えば偶数の月、2月4月6月8月10月って出したら、12月にはそれを全部まとめたCDを発売しようか』っていう新しい話しが舞い込んで来たの。ほんでそれに乗っかって。でも実際、1年未満にメンバーチェンジがあったりしてCD化するには2年、3年かかっちゃったけど」

■作品紹介等。

「シングルは7枚。シングルばっか出してるよ(笑)。アルバムはベスト盤みたいな感じで、オムニバスDVDもあります。日本脳炎、THE BASEMENTSと一緒に行くツアーの為に作ったデモ・テープとかはそれには入ってないね」

■新メンバーを迎えての今後の活動予定、またリリース予定。

「Timmyが話し持ってきたカナダのFucked Upとのスプリットの話があるけど、まだ具体的には決まってないね」

■大手メジャー業界、レーベルに関する見











解。

「やりづらそう。歌詞を変えさせられたり、でもそれって本当に言いたい言葉が言えないって事だよね。ニュアンス変えてそこを上手くやってるアーティストはいると思うけど。けど、やっぱり湧き出た言葉を人に伝えるのには、釈然としないかなあ。って昔から思ってて、あまり魅力は感じない。上手くやもいるだろうし。そこをどういう風にやっていこうか、メンツによっても変わると思う。日程とか、宣伝の仕方とか。多種多様な人が集まるから可能性は無限大だ。出会いがある訳だから、間違いなく融合はあると思う。実際、こっちが手順追うより客のスピードには驚かされる。皆自由に選べるし。しかし企画自体は客の都合じゃないから、どう転がすかは永遠のテーマかもね」

たらもっと面白い事になるかもね、今のままよりは。一つ飛び出す気持ちを持ち誰にも気負わず、自分のやりたい事に真意を持って遊ぶべし」

※今年の11月下旬頃よりHELLSHOCK、DEFIANCEからなるPDXからのやさぐれHard Rock PunkバンドであるBURNING LEATHERが来日し、悪AI意、THE SLOWMOTIONSというラインナップでJAPAN TOURを敢行します！こちらも要チェック！

BURNING LEATHER JAPAN TOUR 2010
W/悪AI意, THE SLOWMOTIONS

Nov.
(thu)18 tokyo w/ai, the slowmotions
(fri)19 niigata w/ai, the slowmotions
(sat)20 yokosuka (kanagawa-pref) w/ai
(sun)21 hamamatsu (shizuoka-pref) w/ai
(mon)22 osaka w/ai
(tue)23 hiroshima w/ai
(wed)24 kokura
(fukuoka-pref, kitakyushu) w/ai
(thu)25 izumo w/ai
(fri)26 tsuyama (okayama-pref) w/ai
(sat)27 kyoto w/ai
(sun)28 yokkaichi (mie-pref)
w/ai, the slowmotions
(mon)29 nagoya (aichi-pref)
w/ai, the slowmotions
(tue)30 tokyo w/ai, the slowmotions

息吸って吐いて飯食って叩く

ろうとはこれっぽっちも思わない。こんなんだし(笑)」

■過去のツアーでの思い出。

「携帯の電話帳に入ってる人達は全部思い出深い。初めて会ったのに呼んでくれたり世話してくれたり。ライヴの次の日でも普通に仕事休んでくれて遊びに付き合ってくれたり。やっぱそれは同じ風に返していきたいなと今でも思う。その為に自宅もちょっと大きい部屋を借りたし」

■海外ツアーの予定。

「何年も前から色々あるけど来年夏位(Timmyが企画のCHAOS IN TEJAS)かな。あれは絶対行きたい！」

■今現在プレイしている別ユニット。

「今年12月10日EARTHDOMでこれまたカヴァー大会があって、それにダウンタウンブギウギバンドで出演します。乞うご期待！」

■個人的な現在のシーンに関する見解。

「客、リスナーの事を考えてのライヴ、これだけ観たいって人もいるだろうし、逆の方の人

■気になる奴等、またバンド。

「JABARA」

■ずばり一番好きなバンドの作品は。

「今はStranglersかな。音、やり方、歌詞、全部。1st LPのは1977年リリースだけど、こんな音4年前から演ってるぜって1stにつけた。超かっけーと思ったね。ここ最近また探したり聴き直したり」

■やり続けている事について。

「生活の一部。無くなったらって考えられないし、息吸って吐いて飯食って叩く。死ぬ事を想像出来ないのと一緒かな」

■未来に向けての個人の計画、予定。

「やった事の無い事にチャレンジをし続けたい。日本、海外問わず繰り広げたい気持ちで一杯だ」

■次世代のシーンを担うであろうパンクス達に一言。

「毎日腹一杯遊べばいい、遊びまくればいい。揉んで揉まれて。そんな事を繰り返して

TBA

UNDER THE SURFACE RECORDS:
http://www.geocities.jp/utsrecs/
http://www.myspace.com/underthes





ACROSTIX

7月の2日、3日、4日に三重県の四日市CLUB CHAOSにて開催された激烈音隊突撃開始3DAYS GIG(…行きたかった)。その企画者でもあるACROSTIXが、1stアルバム「DEAR DAILY LIFE」をリリースしている。初期こそAMEBIXの影響が色濃かったが、作品を重ねる毎に、より先鋭な音像を解き放ち続けている彼ら。全編に渡る日本語詩、そして感情と豊かな旋律が止めどないエナジーと共にほとばしる楽曲。本作はこれまでに得た音楽的要素が集約された更なる高みであり、同時に、一つの通過点なのかもしれない。
ベース・ヴォーカルのSINさんにメールでのインタヴューを行った。

■まず、激烈音隊突撃開始3DAYS GIGはいかがでしたか?企画に3日間の出演にと大変だったのではないでしょうか?

「去年後半からアルバムを作ろうという話になり、本格的にレコーディングの日程を決めて動き出して、夏までにはリリースして、合わせてレコ発ツアーもやりたいなーと考えてましたが、メンバーみんなもなかなか簡単にツアーに出る事は難しくツアーは断念しました。そこで各地に行けないのなら呼んでしまおう!という事で3日間企画を行い、ツアーするつもりで行きたい場所やバンドを想像してメンバーで話し合い出てもらうバンドを決めていきました。
三重にはパンク以外にもサイコビリーやメタル、ミクスチャー、グラインドなどバンド自体の絶対数は少ないですが、カッコイイバンドがいます。それぞれ企画もしていたり僕らも出演したり激烈にも出てもらったりしています。3DAYSにも出てもらおうと考えてましたが、この3日間はパンクにこだわろうという事になりました。DJも普段はVORTEXの2人にやってもらっていて、県外からDJを呼ぶなんて事はしないんですが、この3日間は呼ぼうと、パンクが一人その場に増えるだけで少しは何かが変わるんじゃないかな、と。
三重の友達に予告動画を作ってもらったり(たー君ありがとう!)、それをblogなどでアップしてくれたり、フライヤーまくのを手伝ってくれたり本当いろんな人に助けてもらいました。
やる事やって迎えた当日はみんなが協力してくれて遅刻してくるバンドもゼロ、むしろみんな早く来てくれて何もかもスムーズにいきました。ライヴはもう、休む暇などあるはずもなく全て最高でした!出演してくれた、FRAMTID、ALLIANCE、DISGUST、MUSTANG、THE LITTLE MIRRORS、FOLKEIIS、CRUDE、WARHEAD、ORIGIN OF [M]、NICE VIEW、SO君、南君、シガさん、高山君、協力してくれた三重の仲間、CONTRAST ATTITUDE、T.N.A、END OF SEEDS、VORTEXバン、アリサ、CLUB CHAOS、全国から来てくれたお客さん、この場をお借りして改めてお礼を言わせて下さい、ありがとうございました!」

■そもそも激烈音隊突撃開始を始められたキッカケも聞かせて頂けますか?物凄い回数、50回以上やられていますよね。

「VORTEX(来年10周年!祝!)がオープンした頃パンクのライヴが地元で見れるなんて事は殆どありませんでした。VORTEXから徒歩1分の場所にCLUB CHAOSというライヴハウスがあります。パンク・ショップがオープンしたんだしパンクのライヴがあったらもっと良いよね!って感じでまだACROSTIXもやっていなくてブラブラしていた僕とカミさんでもあるVORTEXのオーナーのバンと激烈音隊突撃開始を始めました。企画名はバンが付けました。正直インパクト強過ぎるかな〜とか思ったりしましたが(笑)。今では最高の企画名だと思っています。企画をやり始めた頃は数少ない友達のバンドに出てもらう位で3、4ヶ月に一回のペースでした。ACROSTIXが本格的に動き出して色んなバンドと繋がる事で企画のペースも徐々に増えていきました。やり始めた頃と決定的に違う事は国内外問わずツアー・バンドが三重に来る様になった事、それをいつでも受け入れられる態勢、バンドが居るって事ですね!」

■「(A CHAIN OF) HATRED」でも使われて



いましたが、今作の「DEAR DAILY LIFE」では全曲日本語詩になりましたね。歌詞が英語から日本語へと変化していったのは、どういった理由からですか?もっと感情だったり情景だったりを直接的に伝えたい、という想いからでしょうか?

「今までたくさんのバンドをやってきたわけではないのですが、日本語で歌うという事自体、僕自身考えてもみなかった事です。ですが、CONTRAST ATTITUDEとSPLITを出した曲とかサビだけ日本語で歌ったり途中からしていたので英語、日本語に特にこだわっていたわけではないかと思います。ですが僕は英語が全く出来なくて、想いを込めて書いた歌詞も英語に訳す事で少し僕の手から離れる感じがして、歌っていても意味を分かってない部分とか正直あったので。自分自身に伝わらないものが誰かに届くはずがない。そういう思いも強くなりまずは自分自身に届かせる為に、言葉に責任を持てる様に徐々に日本語で歌う様になりました。でもそんなに深く思う様になったのは最近で単純に日本語で歌うカッコイイバンドが周りに居てそれに影響された、これが１番の理由です!」

■あと、元々SINさんのヴォーカルは英語でも日本語でもハッキリと一語一語を発音されている印象があります。勢いでゴニョゴニョ～と誤摩化さないで、ちゃんと聴き取れる、というのは意識してやられていますか?自然に?

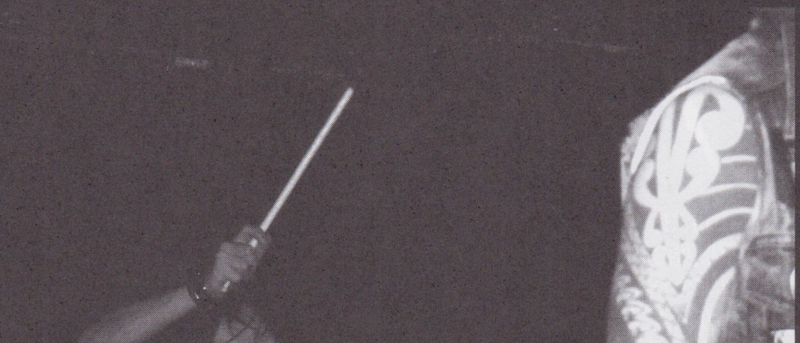
「英語でも日本語でもあまり意識はしていないです。ただ日本語で歌う様になり、ごまかしは効かないですし、聞こえる言葉の響きは大切にしようとは思います。聞き取れない位、早口やまくし立てるヴォーカルも好きです。そういう歌い方が僕は下手なのかもしれません」

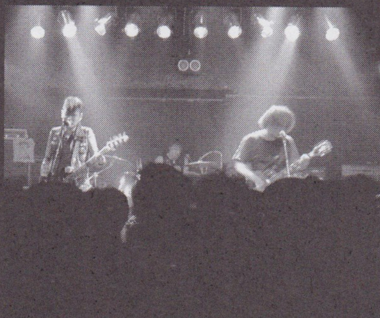
■「DEAR DAILY LIFE」というタイトルも、肩肘張っていないと言うと変ですが、日常の延長線に、パンクにしてもあらゆる社会問題にしても存在していて、全てが生活と連結している、そんな感触を受けました。うまく言葉にできないですが…。このタイトルに込めた想いを聞かせて下さい。

「海外のバンドはスクワットをしたり直接行動を起こして生活にパンクが溶け込んでいるイメージがあります。この国に住む多くのパンクスは平日仕事をして週末だけパンクの格好をしてライヴをやったり見に行ったりが普通だと思います。それが良い悪いは別の話、僕もその一人です。なんでACROSTIXはツアーしないんだ?いつでも来いよ!と言ってくれる海外のバンドもいたりして、そりゃー当然行きたいです。でも何日も休みを取るというのはみんな簡単な事ではないです。そんな中でも去年、一週間だけでしたがアメリカはテキサスのUNIT21と西日本をツアーをする事が出来ました。現実と非現実が逆転した生活をして最高に刺激的な時間を過ごせました。どれもこれも日常なんだと、でもくそったれなんかじゃない、平日仕事をする日々も大切な日常だと。ステージに立つ時も仕事をする時も仲間と過ごす時間も家族といる時も、今自分の目の前にあるものを一生懸命やろうとツアー中に強く思いました。
あと子供が生まれて意識が変わりました。戦争、争いが当たり前に存在している日常もあってそこに住む子供の命の上になりたっている状態、何があっても子供が犠牲になる社会があってはいけない。全ての人に「生きる」という日常は与えられなければなりません!そういう想いを込めて、親愛なる日常」

■初期はAMEBIXの影響を強く感じましたが、作品を重ねる毎に深化して、ACROSTIXという存在を、ご自身でどんどん更新していっているようなイメージがあります。ガラッと一気に何もかもが変わるのではなくて、核の部分はそのままに、自由に広がって







いっているような。どうでしょう?質問になってないですが(苦笑)。

「AMEBIXみたいなバンドがやりたい!って明確なビジョンはおもいっきりありました。ACROSTIXはAMEBIXみたいだね!とか影響受けてるね!とか言われる事に喜びや満足もしていました。でもあるバンドとの対バンをきっかけにその意識は変わりました。大阪でWARHEADと初めて対バンした時に、AMEBIXのまね事、何かのまね事じゃ一生この人達には敵わない、と感じました。音楽でシバき上げられた感覚でした。ある人にお前はAMEBIXを捨てろ、と言われた事があって、その時は分からなかったその意味が分かった気がしました。まずは自分で今までの自分のイメージを壊す為に、もっと明確に伝える為に、日本語で歌おうと、曲に関しては自然と速い曲が増えたり、より激しく打ち出そうという意識に変わっていったと思います」

■ちなみに、初めてAMEBIXを聴かれた時ってどんな印象を受けましたか?

「最初はあまり好きではありませんでした(笑)。E.N.TやDOOMなど速くうるさいバンドがハードコアだ!と思っていました。働きだしてレコードを買いあさり、人に聴かせてもらっただけだったAMEBIXのレコードを手に入れてはまりました。曲はもちろん、アートワークを含め全ての世界観に感動しました。UK/DKのバロンのルックスもカッコイイ!と真似したりしていました(笑)。
世界観のあるバンドをやりたい、という事は今でも変わらない、今でもAMEBIXは大好きなバンドです!」

■「DEAR DAILY LIFE」の話しに戻りまして、音はもちろんアートワークなどにも強い拘りを感じました。一枚の作品としての完成度が素晴らしいです。「こんな作品にしよう」というビジョンはありましたか?

「「(A CHAIN OF) HATRED」の表ジャケはSUGIさんに素晴らしい絵を描いてもらいました。ジャケを今回どうするか?とメンバーで話し合い良くても悪くても自分達でやろうと、DemoテープからAMEBIXトリビュート、今まで全ての作品に協力してくれたバンにお願いして進めました。なるべく既存の写真などではなく、自分達で足を運んで写真を撮りにいったり、図書館に行ったりしました。
工場地帯は僕の住む四日市の良くも悪くもシンボルであり、環境破壊の元凶、でも働く人にしたら生活の基盤。地球を人間が支配する以上、誰しもが少なくとも何かしらの犠牲の上に生きている。それを忘れず希望を持って生きたい、ジャケの工場に光りが差し込んでいるのは光り輝く日常を!という想いを込めました」

■これまでの作品と意識して変えたところ、また意図して変えなかったところ、というのがありましたら聞かせて下さい。

「今回はCDでのリリースという事でその時点でこれまでと大きな違いです。前回リリースした時にこんなに皆レコードを聴かない、持っていないんだと感じました。レコードでも出す予定ですがまずはCDで出そうと。CDならブックレットにしたいというのはありました。音は別として、ジャケがめちゃくちゃカッコイイのに開けてみたら歌詞も無い、やり込んだ感がないのは嫌いです。雑な内容にはしたくなかった、聴きながら読み返したくなる、そんな音源にしたかったです」

■それと、レコーディング中やミックスの段階で留意されたのは、どんなところでしょうか?岡崎のSTUDIO ZENで録られたようですね。

「今までは大阪のLMスタジオで録っていたんですが、仕事の都合でなかなか大阪まで行く時間が作れない等、距離的に少し障害があったのでDISGUSTギターのますみさんに相談したところ、STUDIO ZENを紹介してもらいました。小さなレコーディング・スタジオで大丈夫かな?と最初は正直思いましたが(笑)、スタジオ機材云々ではなく、演奏する側が駄目なら全て駄目なわけで。やるにつれて岡崎さんとコミュニケーションも取れて、レコーディングしながら成長させてもらいました。僕はベース・ヴォーカルなのでもちろんベースを弾く事と歌を録る事になります。全体練習をしても歌だけの練習が出来ないので、楽器隊だけをまずレコーディングして歌入れまで少し日程を空けて歌を歌うだけの練習が出来たのが前回より良かったところです。ミックス作業を1日でやる予定でしたが、途中でメンバー全員集中力が切れて、雑になってしまったので良いところは残して、やり直しました。岡崎さんには曲間のイントロでギターを即興で弾いてもらったり、いろいろ導いてもらいました。次もSTUDIO ZENで録りたいですね!(岡崎さん!体調の回復を祈ってます!)」

■BLOODSUCKERからのリリースというのは?GUYさんから声をかけられた感じですか?

「広島でライヴする度にガイさんから、うちから出そうや!と話をくれて。前作もそうですが、直接ライヴを見て声をかけてくれたキースとフランクのレーベルから出しました。
どこから誰とでもって訳ではありませんが、直接見て誘ってくれればうれしいですし。信頼出来る人物、レーベルからリリース出来て光栄です」

■最後に読者さんにメッセージなどありましたら、お願いします!

「まだ音源を聴いていなければ是非聴いてみてください!僕達なりにハードコア・パンクの持つ「怒りと希望」をこのアルバムに詰め込んだつもりです。もう音楽で世界は変わらないかも知れませんが、人は変われます。誰も傷つけない攻撃力を持った音楽を武器に仕組みだらけのこの今を闘っていきましょう!そしてライヴハウスに足を運びましょう!今、その瞬間はそこにしかありません!ギターが脱退して各地にライヴしに行く事が困難になりましたが、必ず復活します!心震えるあの場所で会いましょう!
最後にインタヴューしてくれた山路さん!ありがとうございました!」





Flo from HEARTFIRST

まるで季節の風物詩のように、毎年5月のゴールデン・ウィークになると来日する男、Flo。ドイツのハードコア・パンク・レーベル、HEARTFIRSTの主宰者であり、必ず大量のJägermeister(ハーブ入りの強いリキュール)を抱えてやってくる彼と、今年も会うことが出来た。リリース数が膨大なわけでもなく、あっという間にソールド・アウトするような、派手な作品を出しているわけでもないのだが、彼の周りには自然と人が集まってくる。それは何よりも、彼の人柄によるところが大きいのだろう。1990年のスタートから時流に左右されることなく、独自のスタンスで走り続け、今年で20周年を迎えたHEARTFIRST。改めて、Floに話しを聞く!
(ついでに僕がベルリンに実際行ってみて、疑問に感じたこともちょっと質問してみました)

■HEARTFIRSTを始める前には、バンドをやったりファンジンを作ったりしていたよね。レーベルを始める1990年以前の活動について教えて。

「そうだね、THE BONZENというベルリンのファンジンで1985年から1989年まで働いていたよ。そのファンジンは僕の友人、Zündiが1981年にスタートして、その後に彼はBONZEN RECORDSというレーベルも始めることになるんだけどね。僕はレコードのディストリビューションを1985年に始めた。安くレコードを手に入れられると思ったからなんだ。(仕入れた)9枚のレコードを友人らに売って利益を得れば、それで自分の分のレコード代金を支払えるからね。そのディストロ/通販はDISTRYBUTJE BONZKIって名前だったよ。
1986年にはベルリンのバンド、SQUANDERED MESSAGEにベーシストとして参加した。2枚のLPをDESTINY RECORDSから出したけど、僕は2枚目だけで弾いている。1枚目の「Getting Blunt」の方がずっと良いかな」

■80年代初期から、ハードコア/パンクのショーに通っているよね。80年代のジャーマン・ハードコアのショーってどんなものだったのかな?80年代、90年代、現在とでは全然違う?

「1979年辺りからパンクを聴き始めたんだけど、ギグに行くのは怖くてね、お小遣いでレコードを買ったり、時々テープを買うくらいだった。初めてのギグは1983年にベルリンのLOTFクラブで見た、BAD BRAINSとTOXOPLASMAだったよ。ギグはある点においては異なっていた。けど、そんなに大きな違いじゃない。今では数多の、様々な種類のパンクがあるよね。1980年代の初期から中期にかけては、パンクスがメインであって、それにスキンズ、普通の格好の人らがいて、みんな一緒につるんでいた。大体みんなアメリカン・ハードコアとフィニッシュ・パンク、UKパンク、ドイツ・パンクを当時は聴いていたもんだ。メロディック・パンクスやハードコア野郎、ストレート・エッヂ、なんて個別のシーンなんてなかったし。時にはヴァイオレンスなギグもあったけど、それは主にスキンヘッドによるものだった。80年代の終わりになるとベルリンのパンクはかなり崩壊してね、格好良いバンドはみんな解散して、メンバーの大部分はGUNS'N'ROSESみたいなサウンドのバンドをやろうとしていた。ぞっとするよね。
90年代はリアルなハードコア・パンクにとっては、素晴らしいとは言い難いな。それで

も、素晴らしいバンドはいくつかあったね。ファスト・バンドやクラスティーなバンドらによる新たなDIYシーンさ。2000年代は90年代よりかは良いと僕は思う。だってバンドは80年代の模倣をしようとしているからね、ハハハ。まぁ、2010年代が何をもたらすか見ていようじゃないか」

■HEARTFIRSTの大きなキッカケとなったのは、NUKEY PIKESだと思うんだけど(HEARTFIRSTの最初のリリースはNUKEY PIKES)、NUKEY PIKESを聴く前には日本のバンドは知っていたのかな?今では世界中の色んな人たちがジャパニーズ・ハードコアについて知っているけど、昔はどうだったの?

「まず、僕は「WELCOME TO 1984」や「PEACE」、それにPUSHEADのコンピレーションで日本のバンドを知ったんだ。それにSELFISHが80年代後半にリリースしたものとかね。伝説的なRoger Armstrong、彼によるMRRのシーン・レポートも読んでいた。ベルリンにはかなり良いパンクなレコード屋が2軒あって、時々日本のバンドの作品も入荷していたんだけど、貧乏な少年だった僕にとっては凄く高くてね、沢山買う程の金銭的な余裕はなかった。ヨーロッパのコレクターの何人かは大量に日本のバンドの作品を所有していて、Sean Priceという僕の友人が古いバンドを教えてくれた。それから、彼はNUKEY PIKESも紹介してくれてね。こうして全てが始まったわけだ」

■最初にお手本としたレーベルは?

「一つではないね。DISCHORDの、レーベルにおけるビジネス倫理には影響を受けたかな。アナーキスト本を出している小さな出版社のいくつかからはもっと大きな影響を受けているね。僕なんかよりも長い間、DIYレベルで物事に身を捧げている人たちだと僕は思う。当時、僕のルームメイトでBONZEN RECORDSをやっていたZündiは、友達のためにパンク・レーベルをやろうとしていた。でも、それはとてもプロフェッショナルなものだった。LPやCDを作り、プロモーションとして音楽誌で執筆したり、もっと大きなディストリビューションを通したりね。彼は商業レベルとしては全然成功していなかった。ここから僕は多くを学んだよ。本当に小さなレーベルをやろう、自分が好きなハードコア・パンクの7インチのアナログ盤だけを出そう、とね。プロモーションなんかしないし、他の音楽業界なんて糞だよね、ハハハ。全ての流通は自分か友人でやり、ディストリビューターは通さずに、世界中のレコード屋に直接販売する。それはとてもDIYなことだろ。僕はレーベルを決してデカくしたいとは思わない。儲けようとも、セル・アウトもしない。単なる、ろくでもない小さなレーベルさ。そう思って、そうしてきたんだ」

■"HEARTFIRST"という名前はどうしてつけたの?どんな想いを込めて?それとレーベルの信条も教えてもらえるかな。もっとも大切なことは、バンド・メンバーの人間性だったっけ?

「古いジャズのレーベルにHEADFIRSTというのがあってね、80年代後半にはHEADFIRSTというハードコア・バンドがカリフォルニアにもいた。彼らは素晴らしい7"をリリースして、それから退屈なLPを出して、その後すぐに軟弱なロックになっちまった。
ほとんどの人たちが、パンクは世界を変えるという、奇妙な考えを持っている。しかし悲しい現実として、それは起こらない。僕は、パンクはアティテュードであり、ユース・カルチャーではないとも思っている。哲学や時代性なんかよりも、もっとハートに関係しているものだよ。一方じゃ、知性というものに害はないけどね、ハハハ。バンド・メンバーのアティテュードと性格は重要だ。けどアティテュードはしょっちゅう変わるものでもある。そしてファンは素晴らしい音楽が聴きたくて(それに多分、歌詞やアートワークもね)レコードを買うだろ。けど、退屈じゃない音楽って、素晴らしい人とアティテュードが作り出すものだよ。そう、理想としてはグレートな奴らがグレートな音楽を生み出す。けど、残念なことに糞野郎がスンゲー音楽を作ったりすることもある。でも、HEARTFIRSTはそんなものはリリースしない、ハハハ」



■NORWEGIAN LEATHERというサブ・レーベルも2006年から始めているよね。

「HEARTFIRSTではLPは出さないけど、僕の最高の友人には古いノルウェー・パンク・バンドのメンバーが何人もいるんだよ。こういうことはあんまり言いたくないんだけど、ノルウェーの奴らってまとまりがないんだ。僕はあいつらが大好きで20年以上一緒に呑んだりロックしたりしているけど、どんなに自分たちのバンドが素晴らしいかを理解していないし、すごくデタラメなんだ。これってDISORDERが80年代中頃に、ブリストルからノルウェーに引っ越してきたからだろうね、ハハハ。それで彼らの音楽をLPとして再発しようと決めたんだよ。主にX-PORTレーベル時代のものだね。最初の再発がSO MUCH HATEの「How We Feel」LPで、BANNLYSTのEPとコンピ、スプリット・テープをまとめたLPも出す予定だよ」

■HEARTFIRSTの20年間の歴史の中で、最良と最悪の思い出は何かな?

「僕は悪いことは考えないようにしているんだ。悪い思い出というのは、技術的なことだったり、DATのマスター・テープを壊しちゃったり(一回だけね)、ジャケットを失敗したこととかかな。その代わり良いことに集









中しようとしているし、それはもう沢山あるよ。多すぎるくらいある。音楽を通して世界中の素晴らしい人たちと出会えたっていうのが、やっぱり最高だね。レーベルとしてだけじゃなく、彼らとは長年付き合いが続いているってこと。バンドが解散したとしてもね。あとリリースしたほとんどのバンドに関しては、そのライヴを見ている。だから僕はIDORAのライヴを見る必要があるんだよな」

■ところで、パンク/ハードコアに対する考え方はこの20年間で変わった?パンク/ハードコアの最大の魅力って何かな?

「僕は強情で、かつ単純だからね。だから始めた時から僕の考え/理想は変わっていないよ。ハードコア・パンクの魅力と言えば、ロックンロール・ビジネスの戯れ言が取り除かれた強烈でエネルギッシュなノイズ、そしてもちろん、僕はDIY精神が大好きだ。出来る限りを友人と一緒にやることによって、経済の歯車になるのを避けようとしている。オーディエンスもバンドも同じさ。ロック・スターの戯れ言じゃないんだぜ」

■パンク/ハードコアと、政治的なメッセージやMyspaceといったインターネット・ツール、動物の権利(君はベジタリアンだよね)との関係性については、どう考えている?

「政治的なメッセージは物凄く重要ってわけじゃないな。バンドのメンバーに良いハートとアティテュードさえあればね。優れた政治的な歌詞を書くバンドとは無数に出会ったけど、とんでもない偽善者だったり馬鹿者だったと判明することがある。政治的な歌詞を必要としているバンドじゃなければ、個人的な歌詞の方が僕にとっては全然いいね。だけど、もちろんある種の"革命"や個人的な自由を押し出すバンドはいつでも必要とされているのは分かっている。友達のレーベルがよく言っていたんだ。「呑むのが最初。政治は後で」。僕はこう言うよ。「ハートが最初。政治は後で」てね、ハハハ。Myspaceも立ち上げたけど、最近じゃ全然使っていないな。レーベルにとっては役に立たないね。Myspaceはエモ・バンドやバカバカしい"Myspaceクラスト"バンドのためのもんだよ。24年間僕はベジタリアンだけど、人に説教したりなんかしないよ。それにベーガンが僕に説教してくるのもイヤだし。僕のシャンプーには動物性成分は使われていないけどね」

■日本に関して本当に詳しいけど、初めて来た時はパンクも含めてカルチャー・ショックを受けた?

「いや、それほど日本や日本のパンクに詳しいとは思っていないよ。詳しくなりたいけどね。初めて来日したのは1992年で、カルチャー・ショックを本当に楽しんだよ。日本は世界に類を見ない場所だ。他のアジアとも全く違う。これは難しくて複雑な話題だから長く答えられるけど、僕はこのことについて君のジンのページを大量に使うことはすべきじゃないね。日本は万人向けってわけじゃないし、多分、長く住んでみたいとは僕も思わない。行きたくないって言う人もいるしね。けど、僕にとっては何度も感動を与えてくれる国なんだ」

■日本とドイツのハードコア・シーンを比較してみて、それぞれの良い面、悪い面について聞かせてもらえるかな?今のドイツのシーンについてはどう感じているの?

「うーん、これはとても長くなるし複雑な話題だね。両方の国に、多くの異なった"パンク"が存在していることを知っているし。例えば、僕は日本のメロディック、FAT WRECKやPIZZA OF DEATHスタイルについては全然知らない。"ストロング(マッチョ)・スタイル"なシーンもね。そういったバンドの大部分に対して、僕は興味ないからさ。僕は人々が"Burning Spirits"と呼ぶシーンに夢中だし、新しいDIYハードコア・バンドが好きだ。僕が好きなドイツと日本のハードコア・パンク・シーンというのは、古くからの人たちもいて、そこに若いパンクスも参加しているっていうものなんだよね。僕が考えているようなところは多くはないけど、ベルリンの今はかなり良いよ。沢山格好良いバンドがいるしね。突出しているバンドはいないけど、グレートな奴らが強固なDIY精神を持っている。津山には物凄く行きたいよ。そこには印象的で素晴らしいパンク・シーンがあるように思う。一般的に、日本ほど音楽クオリティーの高いバンドがいる国は世界にないよ。日本のバンドの多くが常にヨーロッパのバンドよりも激しいし、テクニカルだ。僕が日本に行ってライヴを見ると、その年に僕が見たライヴのトップ10は、ほとんどが日本のバンドになる。これは日本のクラブ/ラ



イヴハウスの秀でたサウンド・システムによるところもあるだろう。いつもラウドで強烈だよね。日本のバンドが外国でプレイすると、普段ほど良くないように思う。
ドイツにはクールなメンバーによる良いバンドは多くいても、残念なことに彼らは最近解散してしまっている。「DEUTSCHLAND IN DECLINE」という全てドイツのバンドの7"コンピレーションを5年前に出したけど、収録した7バンド中、今でも活動しているのは2バンドだけだしね。ドイツの本当に素晴らしいところは、バンドがプレイ出来るスクワットやユース・センター、小さなクラブが大量にあることだな。日本だとパンクのライヴハウスが生き残るのは凄く大変だし、ライヴハウスは多額の家賃も大家に支払わなければならないことも理解している。EARTHDOMはヨーロッパの雰囲気を僕に感じさせてくれて大好きなんだ。特にギグの最中や終わってからのバー・ルームでのパーティがね、ハハハ」

■活動を続ける動機って何かな?

「主立った理由としては、僕がまだそれを楽しんでいるってことだ。もしやりたくなくなったら、明日にでも辞めるよ。重要なのは、僕自身と、バンド、そして友達がリリースを喜んでくれるということさ。50枚売れようが3000枚売れようが、全然僕にとっては構わない。そりゃ確かに50枚しか売れないレコードを沢山出すほどの余裕は僕にはないよ。世界中の人に聴いてもらいたいとも思っているしね。それはレーベルがやるべきことさ。90年代は、DIYスタイルでも1000枚売るのは僕にとって、とても容易なことだった。今では同じようにやっても300枚だよ」

■RUIDOSA INMUNDICIAの新しいEPを出すよね。その後の予定は?

「RUIDOSA INMUNDICIAのEPと同時に、20周年記念コンピレーション7"をリリースするよ。友達のバンドを世界中から沢山誘ってね。通販とギグだけで売ると思う。それに大部分は、過去レーベルに協力してくれた友達にあげるつもりだよ。けど超限定盤ってわけじゃないから、今度日本のライヴハウスで会った時に僕から買うことも出来るはず、ハハハ。今のところ、その後の予定はないかな」

■レーベルと関係ないことを聞いてもいい?えーと、ベルリンに滞在していた時、僕は3つしかドイツのバンドを見ていないんだよね。A BIT OF BRAINDEADにORÄNG ÄTTÄNG、それにBRAIN DEAD。けど他国のバンドは沢山見たんだ、特にスウェーデンのバンドをね。これってたまたまなのかな?普段はドイツのバンドが沢山プレイしているの?

「君が見たことはドイツの一般的な事実だね。地元のバンドより外国のバンドの方が人気があるんだ。特にアメリカとスウェーデンのバンドがね。新しいスウェーデンのバンドの大部分を僕は好きじゃない。彼らはIKEAの家具に似ていて見た目は良いけど、クオリティーはさっぱりだ、ハハハ。ベルリンでは地元やドイツのバンドのギグはよくあるし、本当クールで活動的なバンドは多いよ。特にKOMA-F(※KØPIスクワットの小さい方のライヴ・スペース)周辺にはね。だから見たのが外国のバンドばかりだった君はついてなかったのさ。しかしBRAIN DEADとA BIT OF BRAINDEADを見たなんて知らなかったよ。僕は日本のBRAIN DEATHが好きだよ、個人的なことだけどね、ハハハ」

■なんだってKØPIやSCHARNI 38では夜11時過ぎからショーが始まるの?理由は分かる?入場料も安いし雰囲気も良いから好きなんだけど、そんな時間から始まるのが信じられないよ。

「ベルリンのギグで、特に週末になると、11時以前にギグが始まることはまずないね。日本から訪れて、会場に早く着いてしまった人には申し訳ないと思うよ。ベルリンの人々にとってはディスコに行くのと少し似ていて、遅くに家を出ては、一晩中外で過ごすんだよ。ベルリンは眠らない街なんだ、ハハハ。地下鉄は一晩中走っているから、ギグも長時間やっていられる。これが慣例になっているから僕は慣れているけど、それでも困ったもんだよ。平日にもこういうケースがあると、翌日は仕事に行かなくちゃならないからさ。いくつかのパンクの会場はもっと早くスタートしようと試みているけど、みんな無視して11時過ぎてからやってくるんだ。週末のギグじゃ、12時から1時の間にやってくる奴もいて、それでもほとんどのバンドは見れちゃうからね。狂ってるよ」

■あと、ハードコアのショーにどうして犬を連れてくるパンクスがいるの?

「犬を連れてくるのは、全ての犬にとっては拷問だね。彼らの耳は敏感なんだから。それに犬は臭いパンクスが好きじゃないしね、ハハハ。もう何年もDIYなパンクの会場は、犬と一緒に入ってはいけないことになっている、そう、KØPIとかね。でもこれもドイツ・パンクの伝統だな。不潔なパンクスは彼のベスト・フレンド(犬)と一緒にギグに来る。これは良くないことだが、とても一般的なことでもある。特に路上生活しているパンクスにとってはね。ギグの主催者が犬を連れてくるなと言えば、時には議論や喧嘩になることすらあるんだよ」

■ベルリン(ドイツ)が東西に分裂していた時の写真展も見たんだけど、凄く興味深かった。1989年にベルリンの壁が崩壊した時、君はどういう風にそれを感じた?

「あぁ、冷戦構造と壁が破壊された瞬間は、素晴らしいものだったな。この話題についてはいくらでも書けるよ。朝鮮みたいに国が分裂してしまうというのにはうんざりしている。多くの家族は引き離され、国境では人が殺され、船乗りは魚雷で殺されるか誘拐される。こんな国境なんて世界にもう存在すべきじゃない。一方、昔の西ベルリン(1989年以前)で僕は生まれた。生活するにはとても魅力的で素晴らしいところだったよ。かたや今では、東ドイツでの生活も過去よりは良くなってきている。これは僕も嬉しく思うよ。ただ、彼ら全てが良くなっているわけではないんだ。例えば今でも東ドイツじゃ失業率は高かったりするからね」

■インタヴューどうもありがとう。最後に読者にメッセージをお願い。また5月に会おうね。

「サポートをありがとう!!親愛なる読者のみんなへ。どうかEL ZINEやKAOTIK HEROなどといった日本のジンをサポートして欲しい。いつも協力してくれている日本の友達へ、君たちは最高だよ!!"A big Domo Arigato"。Heart First, politics later!(ハートが最初、政治は後で!)

HISTORY OF HEARTFIRST:追記

1989年、友人であるSean PriceがNUKEY PIKESのデモ・テープを僕に送ってくれた。彼はUKに住んでいるが、80年代後半の一時期日本に住んでいたことがある。その時はよく、イカれたガイジン、Mykel BoardやRoger Armstrongとつるんでいたようだ。

当時、僕は友人Zündiのレーベル、ベルリンのBONZEN RECORDSを少し手伝っていた。僕はバンドも多少やったり、ちょっとしたディストロや通販も行っていた。DISCHORDやTOUCH & GO、PUSMORT、SOUTHERN、CRASS、SSTなどを扱っていたかな。それにベルリンのレーベル、DESTINYとZOROのリリースも販売していたよ。

BONZEN RECORDSはNUKEY PIKESに興味がないようだったから、僕はレーベルを始めて彼らの1st 7"を出すことにした。NUKEY PIKESのサウンドは世界にも類のない、僕にとってはとても新鮮なものだったんだ。

7"はハードコア・パンクにとってベストなフォーマットだから、僕は7"ヴィニールだけをリリースするレーベルをやりたかった。その時、これはオリジナルのアイデアだと思っていたよ。だけど90年代には、無数の小さなDIYレーベルが爆発的に誕生して7"をリリースした。それらの大部分は、日本で100円か50円で投げ売りされているよね。

最初のうちは、当時まだ小さな7"レーベルだったLOOKOUTともトレードしていた。その後、彼らに起こったことはみんな知っているはず。

現在、レーベルを始動してから20年が経ったけど、東京でのギグでNori(ex NUKEY PIKES、現SCREWITHIN、LIFE)と会えたり、最近の思い出としては最高のバンド、KRIEGSHÖGをリリース出来たりした。僕はラッキーだよ。

全ての友人、レーベルを始めた当時から現在まで協力し続けてくれている人たちに、ありがとうと言いたい。特にSean、Jun、Erica、Nori、そして全てのバンド、レコード店、その他のパンクスも、出会った酔っぱらいにもね。君たちは最高だよ、日本のパンクスへ。bleibt fahren. Kanpai!」



AXEWIELD

国内外問わず、多くのハードコア～メタル・リスナーから熱烈な支持を集めていた香川のEFFIGY。そのメンバーらによるメタル・クラスト・パンク・バンド、AXEWIELDがHARDCORE KITCHENより「WAR MACHINE」CDを、CRUST WARから「WISDOM OF DOOM」12"をリリースしている。じわじわとその世界観に浸食され逝く暗黒の黙示録から、電光一閃冷たい刃を喉元に突きつけるかのハードコア・ナンバーまで、より深度を増した楽曲の背景を探るべく、ベース・ヴォーカルの増田さんにメールで話しを伺った。

PHOTO:OVERCAST

■まずはEFFIGYの解散後、どんな経緯でAXEWIELDは結成されたのですか?当時の心境なども交えて聞かせて頂ければ。

「Effigyの解散は2007年4月頃で6月に川上君の事もありバンド活動をする気持ちになれませんでした。2007年12月8日の大阪でのオールナイトのライヴを見て、Effigyから一緒にやってるDrの核ちゃんとやりたいなぁという話になりました。で狙ってたGのうっちゃんが自分のバンドと掛け持ちでやってくれる事になり、2008年1月からスタジオに入りました。もう一度動いて四国から発信したい気持ちもありました」

■男道のコンピ参加後、HARDCORE KITCHENとCRUST WARから立て続けにCDとアナログでリリースされましたが、これは?たまたま2つのレーベルからオファーがあったのですか?それとも、2枚出そうと計画されていたのですか?

「2008年12月6日の大阪SOCIOでのライヴに出演して、見に来ていたクラストウォー/ハピ君、キッチン/コメット君から話をもらいました。話をもらってから一年近く掛かりましたが、いい形でリリース出来たと思ってます」

■ちなみに、PUNK & DESTROYがEFFIGYのCDを紹介する際、「よく初期SLAYERのサウンドに例えられたりするがメンバーは全然SLAYER知らなくて」と書いてあったのですが、本当ですか?メタル・クラスト、メタリックなハードコアは聴いても、メタルは全然だったのでしょうか?今でもそうですか?

「僕がその通りです。のちに聴きましたがHCの方がしっくりきますね」

■ギターにハードコアはもちろんなのですが、70年代ロックやブルースの要素も個人的に少し感じたのですが、そういったものも

聴かれたりしていますか?

「うっちゃんは幅広く音楽を聴いてて、THIN LIZZYが好きでギタリストとしてはGARY MOOREが好きだそうです」

■それと、元々のパンク/ハードコアとの出会い、原体験はどんなものでしたか?DISCHARGEや、80年代の日本のハードコアでしょうか?

「パンクとの出会いは15歳頃です。スターリン、アナーキー、VA「グレパン」などの日本のHCを聴いてました。スターリン、マスベ、赤とかのコピー・バンドをしてました。80年代はオリジナリティーのあるバンドが次々と出てきたと思います。高松にも来た町田町蔵、JOHNNY THUNDERSなど、パンクと付くライヴは見に行ってました。当時はDISCHARGEよりG.B.Hをよく聴いてました」



■単独作2枚のインナーともに、サタニックなアートワークですが、やはりサタンとか、お好きですか?DISCLOSE/川上さんもかなりのめり込んでいましたが…。

「実は悪魔より、人間の内面に興味があり、全然詳しくないんです。川上君にオマージュの意味を込めてサタニックなアートワークにしました」

■アートワークを担当されたNngapokoさんが描かれたのは、「WAR MACHINE」の表ジャケットと、「WISDOM OF DOOM」の裏ジャケ、盤のラベル面の部分ですか?メンバーさんから、具体的な要望は出されたのでしょうか?

「特になにも注文してないですね。「WISDOM OF DOOM」の裏ジャケのカラスは提案しました。盤のラベルの絵は地獄辞典から、AMONという悪魔を引用しました」

■「WISDOM OF DOOM」の表ジャケットに使われている写真も、不穏な雰囲気が滲み出て来ていいですね。これは何の建築物ですか?

「廃線の写真集からで、レンガ造りの橋脚です。門の様に見えたので使いました」

■「WAR MACHINE」は速い曲もありましたが、「WISDOM OF DOOM」では全曲ミドル～スロー・テンポであったりと、作品毎の方向性、コンセプトがあるように感じましたが、いかがでしょうか?

「キッチンではHCの部分を多く出したいと思い、クラストウォーではHCを軸に広げて色々やらせてもらいました」

■あとレコーディングの際に拘られたところも聞かせて下さい。クレジットを見ると、同じ時期に両作とも録られたようですが。

「レコーディングは9曲一緒に録って、MIXは日を変えました。レコーディングは生音を大事にしてMIXで音のバランスをとる位にしました」

■四国のシーンも長年に渡り見て来られたと思いますが、関わり始めた頃と現在とでは、どのような変化を感じていますか?

「すべて把握してませんが、高知からINSANE YOUTH、DISCLOSEが出てきてビックリして、地方でも出来ると思いました」

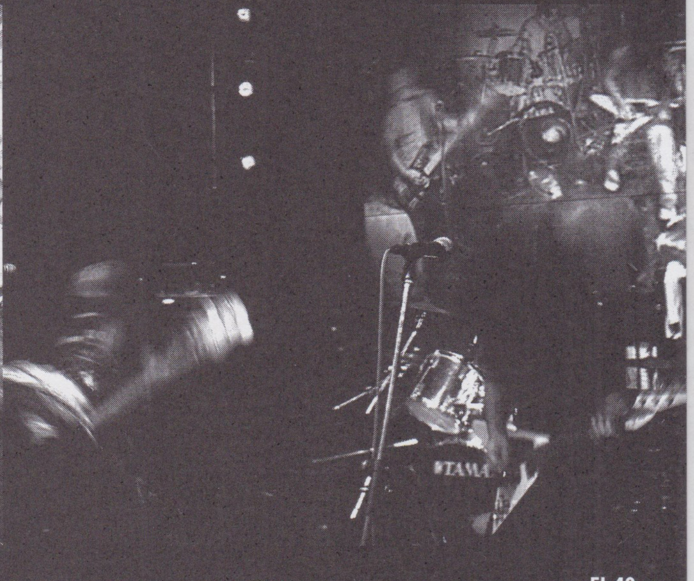
■…パンクスの間でも、熱心な讃岐うどん好きがいますが(LIFE/アベさんとか)、地元の方にとっては、どんなものなんでしょう?よく食べられますか?

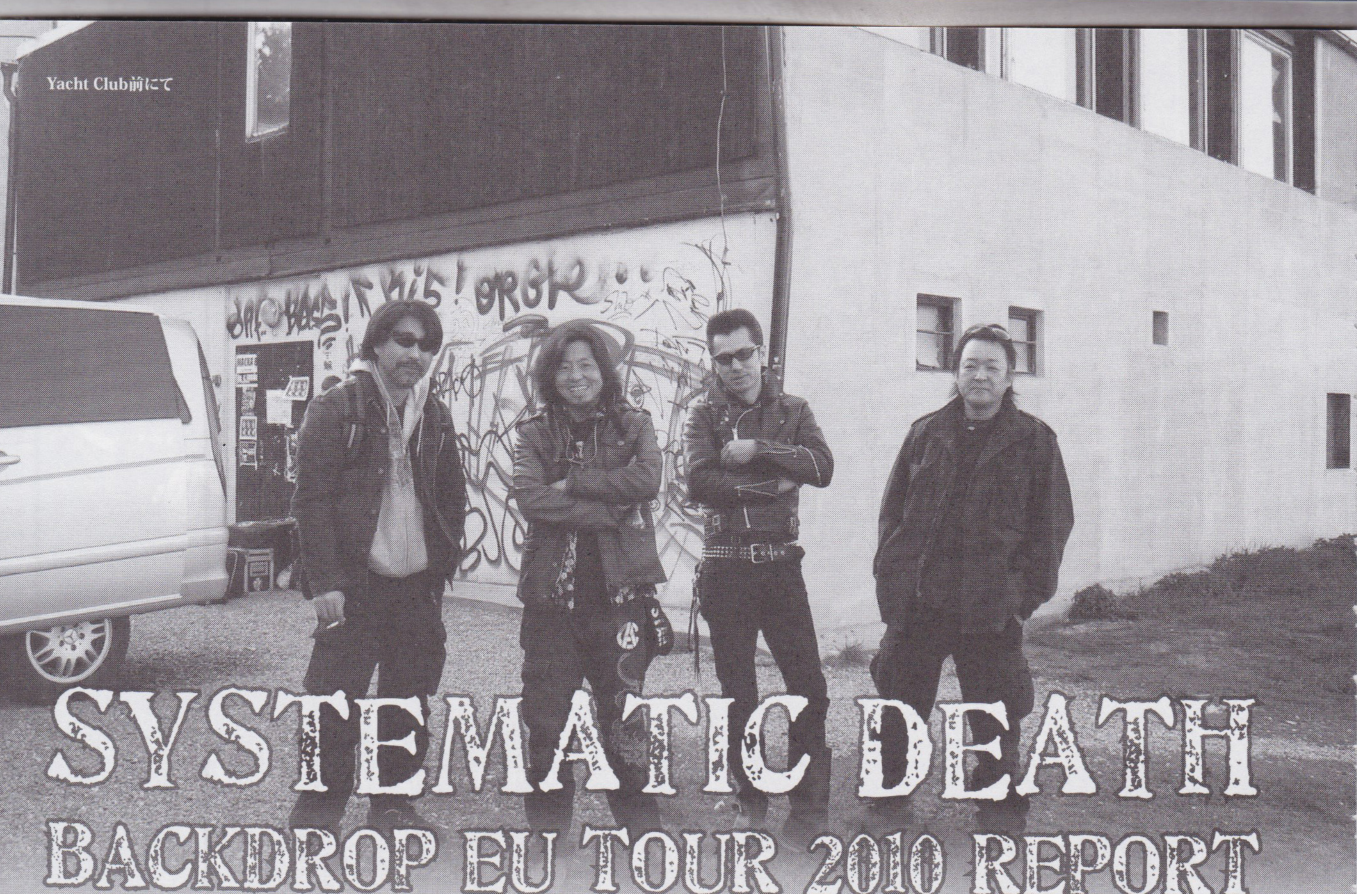
「週3回位、昼食で食べます。気軽なファーストフードで、並んで食べるのは普段はないです」

■最後に何か、これは言っておきたかったな、といったことがあれば、お願いします!

「インタヴューありがとうございました」







Yacht Club前にて

SYSTEMATIC DEATH
BACKDROP EU TOUR 2010 REPORT

スロバキア～チェコ～オーストリア

TEXT:Masaaki"KOBA"Sweden

2010年4月23～25日に掛けてSYSTEMATIC DEATHは中欧に行って参りました。

中欧と言ってもピンと来ない人の方が多いんじゃないでしょうか？

私達の年代の方には（政治的には）東欧と言った方が通りが良いかと思われますが、具体的にはスロバキア、チェコ、オーストリアの3カ国を「3日で廻ろう！」というやんちゃな企画。

一昨年の"BACKDROP WORLD TOUR"（欧米を一度に廻った）程では無いにしろ、やはり可成りの強行軍でした。

そもそも今回のツアーに行く事に成ったきっかけは、まず昨年10月のSYSTEMATIC DEATH 20年ぶりのNew Album「SYSTEMA-SIX」のリリースがありました。

CDが売れなくなって久しいこの業界ですが、昔程枚数は出ませんけれども、個人、団体を問わず全国のPUNK MANIAの皆様のお陰で、しがない1 DIY Label我が"FADE-IN RECORDS"にも少々纏まったお金が入り、SDに対しても「ギャラを支払う事が出来るだろう」という事が判りました。

その事実を前にリーダー・シゲルが一言「よし！海外ツアーに行こう！」

それから2、3日もしない内に当誌山路君より「チェコの"SEE YOU IN HELL"がSDを呼びたがっている」旨のメールを貰いました。

この絶妙なタイミング！正に"渡りに船"！

当初コストの関係で「米国が良いんじゃないか？」などとメンバー間では話し合われていたのですが、このROCK神の思し召しとさえ感じられるタイミングで訪れた依頼を断れようが有りません。

高コスト、ノーリターンが予測される欧州へのツアーでしたが「元より金勘定で動いてる訳じゃないし、何よりも望まれている所に行こう！」とメンバーの意思も固まり、今回の運びと成った訳です。

SYIHから「Splitを出して少しでも足代をペイ出来る様にしたい」と提案が有り「SYSTEMA-SIX」から2曲と同時に録って未発表だった旧曲"LIFE"を再MIXし、そしてSUGIにジャケを書いて貰いデータを送りました。

SUGIのイラストは海外でも大好評というか、既に有名でSplitのジャケにはSYIHも大層喜んでいました。チェコのSYIHの仲間でバルバックという少しカンに似た男がやっているレーベル"Insane Society"から出たSplitの豪華Version（オレンジカラー・ヴィニール、ポスター、手刷りの外ジャケ、ステッカー、SYIHのLIVE DVD付き）の出来を見れば彼等がどれほど喜んだか伺い知れる事が出来ました。

彼等とのやり取りは山路君にも何度も助けてもらいました、この場を借りてありがとう！

そんな感じで仕込みは上々だったんですが、出発直前にアイスランドの火山が大噴火！

その影響で飛行機の欠航が懸念される中、先に別ルートでウィーンに向かったリーダー以外のメンバーを乗せた機体は23日午前11時無事に成田を飛び立ち、西へ西へと向かいました。

約12時間程缶詰になりウィーン空港に到着、しかし時差が有る為現地時間はまだ16時。

空港で無事リーダーと迎えに来てくれた"MAD PIGS(cz)"のVo.マルティーノ（通称マルちゃん）と合流、バンで隣国スロバキアに向かいました。

前回のオランダも同様でしたが、コチラの国々も母国語は英語では有りません、チェコはチェコ語、スロバキアはスロバキア語、オーストリアはドイツ語と全く未知の言語ばかり、コミュニケーションは大体英語で取れるんですが、やはりそこはお互い外国語、細かい事迄は中々判りません。

そんな中マルちゃんが少し日本語が出来た為、一安心＆今迄判らなかった現地の情報など訊きながらドライヴ。

程なく日本で言う所の"道の駅"の様な街道沿いの小さなスペースで"SEE YOU IN HELL"と初対面、共に本日のGIGの開催地スロバキアのジアル・ナド・フロノムという街を目指しました。

途中、国境も超えたんですが「あれ？今の国境じゃねぇ？」って位あっさりと通過、マルちゃんによればEUに参加してからはこんなもんなんだそうです。

「またパスポートの判子増えるのかな？」と少し期待していた私は少しガッカリしました。途中から高速を降りて細い街道を走りました。自然の中を暫く走ると小さな町に、

Amadeus



また自然の中を暫く走るとまた小さな町に、と繰り返していたんですが、どの町も中心部に教会が有り、しかもそれが大体町で一番高い建物でした。石造りの小さな町「何か、リアル・ドラクエみたいだな…」リーダーの言葉は的を得ていました。

その内に日が長いヨーロッパにも夜が訪れ辺りが薄暗くなる頃、漸く会場に到着しました。暗くて良く判りませんでしたが、都市というより余り高い建物の無い山間の街といった感じの場所でした。

「コバ、今夜はスペシャルな夜だ!」「何でだ?」「今夜は女の子が多い、スロバキアには美人が多いんだぜ!」「おぉ、そいつはご機嫌だ!」

インチキ英語でSYIHのBa.トーマスとそんな話をしながら会場に入ると、既にトップのBANDの演奏は始まっていました。

楽屋に行くと手作りの食べ物が用意されていて「これ食って良いんだぜ!」みたいな事をSYIHのG.フィリップが言ったかと思うや否や貪りついています(笑)。早速私も食べてみたんですが…なんとジャガイモが酸っぱい!恐らくドイツのザワークラウトという食べ物に近いんじゃないでしょうか?

郷土料理のもてなしなんでしょうが、あまり好き嫌いは無い私ですが、腹は減ってたもののあまり食べられませんでした(苦)。

しかし、何しろ寒い!

考えてみればココは北海道より北、4月じゃあまだ寒いのも当たり前です。

しかもこの会場"AMADEUS"の雰囲気は凄く良いんですが、作りは建物と建物の間に壁と屋根だけ付けた様な半野外的スペース、フロアも元は野外っぽい石畳、天井は私の目にはどう見てもよく海の家などで使われているヨシズの様に見えます。

「どこか暖かい所は無いのかよ?」日本人は楽屋に有った物凄くパワーの弱い電気ストーブみたいな暖房器具を取り囲んで震えていましたが、スロバキアのPUNX達は強力に強い酒を煽りながらTシャツ一丁で暴れています(笑)。

ここで一つ問題発生!

アメリカと違いヨーロッパでは楽器の持ち込みに対して滅多に取り締まられる事など無いので、今回はタカシ君とタケシは自分の楽器を持ち込んでいたんですが、うっかり者の私は次月の"BASTARD"でのアメリカ行きと混同して、今回全くの手ぶらで来てしまっていました。

「近所に楽器屋ある?」SYIHのDr.ベニョに尋ねてみたんですが、「ここら辺には無いし、有ったとしてもここら辺の国の楽器屋は物凄く値段が高い!」と渋い顔。

「そうか、それじゃあ取り敢えずドラム機材を貸して欲しいんだけど…」

ベニョは「仕方ないな…」といった感じで承諾してくれたんですが、「悪ぃスティックも貸してくれる?」と言った時には完全にあきれ顔に成っていました。しかし、彼は私の高校の後輩"南條"に顔がとても似ていた為、私的には気兼ねなく頼めました(笑)。(結果、この日と翌日と連続してシンバルにヒビを入れ、スティックを2本ずつ折ってしまいました、ベニョご免ね!)

そんな中、少し広めの楽屋のSDと反対側で騒いでいる奴らが居ました。



with ILEGALITY

「奴がここのボスだ!」私は直感的に感じました。どうやら"ILEGALITY"のメンバーの様です。自分等と同じ年かほんの少し下位でしょうか?

彼等のステージを見てみると、結構シンガロングなスタイルだったんですが、さすが地元!お客さんも一緒に歌っています。

彼等のステージ後Vo.のボスではなくて気難しそうなBa.のサブ・リーダーに捕まり、一緒にBARカウンターへ。

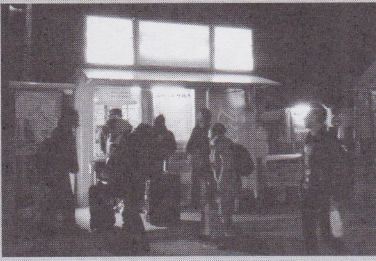
「2杯飲むのがここの流儀だ!俺がおごるぜ!」みたいな事を言われてショットグラスが2個目の前に。

私は肝臓を壊してから、酒を飲むとスタミナが無くなっちゃうんでライヴ前は控えているんですが、それをインチキ英語で伝えようとしたんですが、中々伝わらない様で「なんだ、ガッツが無い奴だ!」みたいな顔をされたんで、寒いしグイッグイッと呑んでやりました。ウォッカだかなんだかやけに強い酒でした(笑)。

トリのSDが終ったのは0時を廻っていましたが、多くの人々はソコでそのまま呑み続けています。全く寒さの基準が違うんでしょうね(笑)。

お客さんは250人位入ったそうです。

「凄いなぁ、こんなに日本から離れた国でこんなに人が集まってくれるなんて…」「こんな所迄来たのSDが初じゃないの?」。その質問にマルちゃんが答えました。「ジアル・ナド・フロノムに初めて来た日本のBANDはSDじゃないよ!2年前に"NK6"と"DUDMA



スロバキアBus Stopのバーガー屋

N"がツアーで来たよ!」「エヌケーシックスゥ〜?奴等いつの間に…ヤルじゃねぇか…」何事も一番はたいしたモノです。ガンガン世界中の国に進出しましょう!(笑)

暫くソコで過ごしてから、車で街中を移動、その日の宿はSYIHの友達の家でした。恐らくこの辺りではリッチな人の家なんでしょう、広いリヴィングではデカイ音でDJが音楽を鳴らし、パーティー・ピープルが騒いでいました(驚)。しかし、疲れていた私達は



泊めてくれた家で

奥の部屋で睡眠を取りました。

どれだけ寝たか時差ぼけで訳わかんなくなってますが、何しろ目が覚めました。明るくなって部屋の窓から辺りを見回せば、いかにも旧共産圏といったスクエアな団地が立ち並んでいました。しかし、そのどの棟もパステル・カラーに塗られていたのが印象的でした。

朝食をごちそうになり、SYIHの本拠地チェコのブルノという街に向け出発しました。何故か私だけメンバーとは別にSYIH号に乗せられて…(笑)。



翌朝、移動の前にSYIHが観光に連れ出してくれました。
古い城や旧市街をぐるっと散策、EUドコでもそうなんでしょうけど余り地震が無い所為なんでしょうか、建物が歴史を感じさせるものが多く、石畳の街並みはとても雰囲気が有り「あぁヨーロッパに来てるんだな…」と感じさせてくれました。
トーマス曰く「ブルノで一番美味いビールを出す店」というパブに行き自家製ビールを飲みながら食事。チェコはとてもビールが好きな国みたいで、ドコのパブも自家製ビールを提供しているんだそうです。チェコ語が難しくて名前は覚えられなかったんですが地元の料理も美味かった!
ゆっくりした後はフィリップ家に別れを告げて、車で出発!マルちゃんがブルノでやっているPunk Shop"VOLTAGE"に寄ってからオーストリアに向かいました。

車内でうとうとしている内にオーストリアはウィーンに到着!「ほう、結構都会だなぁ…」音楽の都として名高いウィーンですが、流石に都市整備が行き届いている様で新しいビルやブランドの看板やお洒落なショップなど目につきますが、街中に点在する古い教会や博物館等古い時代のものを上手く取り込んでいる様でやはり「う～ん、ヨーロッパ!」といった感じの市内を迷いつつ進んで行くと…町外れっぽい雰囲気の所迄来た時に車が止まりました。
「なんだここは…!」先ほど迄と全く雰囲気が変り言ってみれば「スラム?」みたいな一角に一行は降り立ちました。「音楽の都にもこんな場所が有るんだ…」徒歩で落書きだらけの塀に囲まれた敷地の中に入って行くと、テクノ・ビートが聞こえてきました、続いて目に入ったのはとっ散らかった敷地内にゴロゴロと横になったり、ゲロ吐いてたり、やけにギラギラした目で怪訝そうにコチラを見るやばそうな人々、犬も走り回っています…。

「こりゃヤベェとこに来ちまったな…」広い敷地内にストリートアートで埋め尽くされた

思ったよりも時間が掛からずブルノに到着。まずは今夜泊めてくれるフィリップの家にチェックイン!荷物だけしか乗せてはいけない偉く旧式のエレベーターが印象的な集合住宅で、彼の奥さんとベイビーが迎えてくれました。
驚いたのがフィリップの世界各地のZINEコレクションでした。"MRR"全巻は勿論、我が地元ZINE"Cheap Resistance"まで網羅されキッチリと整頓された棚は彼のマニアック度を雄弁に語っていました。

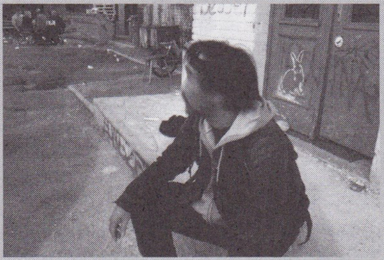

2階のバー

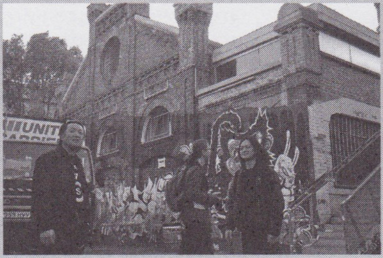
しばしの休憩後、今夜の会場"YACHT CLUB"へ向かいました。チェコでは有名な箱な様で"DISCHARGE"も最近来てたみたいでした。
2階建てのライヴハウスで1階がライヴ会場、2階が広めのBarに成っていて奥の方でディストロが店を広げていました。
周りを見渡すと、やけに広々とした場所だと思ったらどうやらここは大学の敷地内にある建物の様です。この日は150～180人位の人が集まりました。
そうそう、オランダから"SEEIN RED"のヨスとロナウドも遊びに来てくれました(彼等は翌日のウィーンにも来てくれました)。
この日もトリのSDが終ったのは25時位でした。帰れないPUNXは2階で夜を徹して呑んでいるのが、この箱のスタイルだそうです。このBarでタカシ君はカタルシスを感じていた様でした(笑)。しかし、コッチの人は良く呑みます、しかも強い酒を。一行は程々でフィリップ家に戻りました。

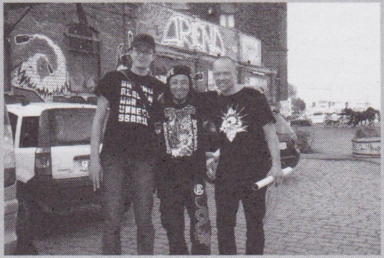

チェコの町並み

ウィーンのArena









建物が大小4、5軒、そして2000人位収容出来そうなグラウンドを持つ野外ステージが有ります。その内の2階建ての建物内に入ると、そこには厨房が有りPUNKSの女性達が忙しく動いていました。SYIHの連中と厨房脇の部屋で一服していると、厨房からリーダーらしき女性が出て来て挨拶をしました。彼女はカロリーナ、今夜一緒に演る"RUIDO SA INMUNDICIA"のヴォーカルでした。

彼女の説明によるとこの敷地全体が"ARENA"というスクワットで、どうやらこの建物の隣の背の高い平屋が今夜の会場の様でした。案内して貰うと結構広い建物で真ん中の楽屋を含むスペースを挟んで建物両側にステージとフロアが有る変わった形の箱でした。他の建物でもライヴが行え、"MOTORHEAD"も演ったという野外ステージも含めるとこのスクワット内だけで5個もステージが有るんだそうです。最初に見かけた危険そうな人々は昨日の土曜から別の建物で行われていたテクノ・パーティーでオールで騒ぎ通した人達だった模様。

話には聴いていましたが、初めて来たスクワットに私は甚く感激しました。

正にPUNKSの為に在る様な場所。どこがお金を出しているんだか判りませんが、日頃スクワットの掃除やBANDに振る舞う飯を作っているカロリーナ達にも給料が出るそうです。素晴しい!

そのおいしい振る舞いベジフード(パスタ?)をヨスやロナウド、オランダ勢と一緒に食べて、あっという間に迎えたツアー・ファイナルステージを待ちました。お客さんは「チケットは70枚しか出なかった…」と聞きましたが、実際フロアには100人位いた様に見えました。

翌日朝から仕事が有るというSYIHチームは機材搬出と共にチェコへの帰途に付く為、短いながらも充実したツアーの協力を彼等に感謝し、「8月に日本でまた会おう!」と言ってお別れをしました。

そのままスクワット内で打ち上げし、やはりスクワット内の宿泊施設に泊めてもらいました。別棟の3階建て位の建物の中の一部屋に通されると、さながら安いスキーロッジの様な手作り感一杯の3段ベットが3個、めいめい布団にシーツを掛けて就寝しました。

「誰か"世界スクワットMAP"みたいなの作ってくれないかなぁ…そうしたらそのスクワットを目指してツアーに出たり出来るのに!」などと考える位素晴しい所でした。

翌日、タケシと増田(SHORT FUSE)は日本へ、シゲルとかみさんはシゲルの妹が住むパリへ向かう為、空港へゲオルグ(RUIDO SA IMUNDICIA)が送ってくれました。私とタカシ君はそのままウィーン居残りです。オランダ・チームが"COLD WORLD"のデュークの家に居ると聞いて、合流して市内観光に行きました。ウィーン(地元の人はヴィエナと呼んでいる様です)市内に点在する、教会や博物館などを巡りました。オランダ勢とはその日の内に別れたんですが、日本人2人はチケットの都合もう2泊しなければ成らず、ゲオルグ＆カロリーナ宅に世話に成ることに。翌日も観光に連れて行ってもらい、なんだか物凄い広い公園へ、緑に囲まれたビアガーデンでヴィエナのトンカツみたいな有名料理をつまみにビールを飲んだり。

「タカシ君、俺こんなオフ初めてだよ…大体いつもカッツカツでライヴばっかり演ってたからなぁ」「うん、正にヴァケーションだね!」「こんな日が来ようとは…BAND続けてて良かった!」(笑)

PUNKというキーワードだけを頼りに見知らぬ国を巡り、そこで交流を持ち、打ち解け「こうやって世界は一つに成って行けば良いのに…」と思わずにはいられない自分が居ました。

まぁ、そんなこんなのツアーでしたが、やはり「BANDの醍醐味はツアーに有る!」との持論に更に確信を持った旅と成りました。

若者よ!彼方を目指せ!

2010年　Masaaki"KOBA"Sweden



厨房横の部屋

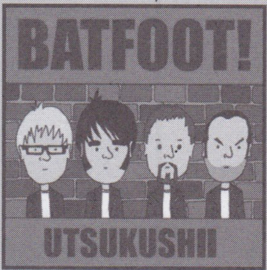


楽屋にて

WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.7 Worldwide

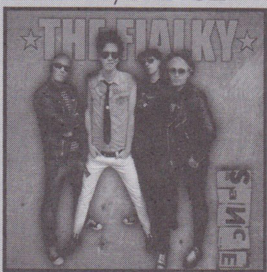
TEXT:
Yuki SP(Y)/WSオニギリ(O)

BATFOOT!/UTSUKUSHII



豪州産、気持ちいいほどのラモーン・ポップ・パンクを見せてくれる4人組の2ndリリース6曲入り。適度にスピードが乗ったラモーン・パンクは心が洗われます。このタイトルにもなっている3曲目はヴォーカルのCRAIGくんの彼女(日本人)のことを歌っている曲で、サビでは「ウ！ツ！ク！シー！」と地球のヘソで愛を叫びます。6曲目の「YUKO-LIN」はずばりその彼女さんの愛称です。キーボードでも参加しちゃってます。公私混同って素晴らしい！(Y)
(自主/BAT002)CD 2009年

FIALKY/SANCE



チェコのプラハ出身の現在進行形若手〜中堅バンドだと思う。やっぱり先人ZONA Aの影響はチェコ国内では大きいようで空耳で歌えちゃうシンガロング満載なパンク・ロック。これはライヴでは相当盛り上がるのではないだろうか。ZONA A同様、初期パンク・ロック、Oiパンク、ポップ・パンクといったサウンドが好きな人にはオススメ。POWER POP好きな人にも聴いてもらいたいくらいのポップ・メロディー！もちろん母国語。(O)
(PAPAGAJUV HLASATEL/PH085)CD 2008年

BOOM BOOM KID/GRANDFATHER'S PONCHO



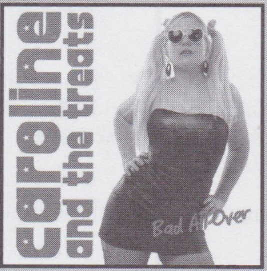
幅広い層に支持されているアルゼンチン産メロディック・ハードコア・バンドFUN PEOPLEのフロントマンだったアルゼンチンはブエノスアイレスの貴公子が自分の名前を冠して活動しているバンド。5枚のアルバムとミニ・アルバムから厳選した選曲で登場の日本ツアー記念盤！FUN PEOPLEをさらにポップにしたサウンドはやっぱり間違いない。ポップでありつつもハードコアも同時に感じさせるのは、さすがのセンスですよ。ヒデキ感溢な歌い方も健在！染みる。(O)
(PROJECT Y/SINVALOR PUNX)CD 2010年

FUN PEOPLE/THE CROSSOVER SUDAMERICAN HISTORIES OF DE DUCK-OO-HOMO



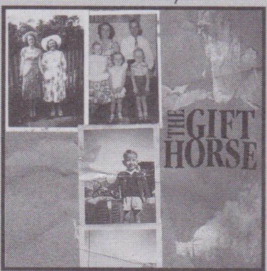
2001年の奇跡の来日でかなり衝撃的で圧倒的なライヴを見せてくれた愛のスーパー・パンク・ロック・ヒーロー、BOOM BOOM KID率いるFUN PEOPLEのSNUFFY SMILEからの35曲入り編集盤。曲ごとに表情があまりにも違うのではじめ聴いた時は全くもって馴染めませんでしたが、気が付けばその中毒性に見事ズッポリ。なんと2010年9月にBOOM BOOM KID名義で来日との事。これは大事件！(Y)
(SNUFFY SMILE/SMILE028)CD 1999年

CAROLINE AND THE TREATS/BAD ALL OVER!



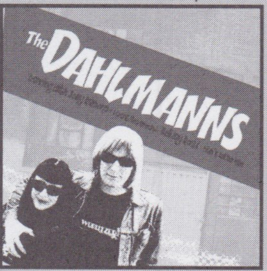
エロ・ポストカード封入のシングルも素晴らしかったポルノ女優のキャロラインちゃんが、バックに彼氏であるYUM YUMSのMORTONを従えてバンド名義でリリースしたデビュー・フルレングス。まさに女性版YUM YUMSといった具合で、聴いて楽しい、見て楽しいの素晴らしい1枚。余談ですが、彼女のDVDを輸入しようとしたら見事に無修正だったようで、税関にこっぴどく怒られました。(Y)
(HOUSE OF ROCK/HORR2)CD 2010年

GIFTHORSE/ST



オーストラリアから突如現われたUKメロディック・サウンドを身にまとったGIFTHORSEの待望のデビュー作、10曲入りフルレングス！CRACKLE! RECORDS!からのリリースでおなじみ同郷のCAUSTIC SODAなんかの影響はもちろんLEATHERFACE、HOOTON 3 CAR、BROCCOLIなんかの雰囲気が垣間見れて嬉しい限り。この後、ミニ・アルバム、PHOENIX FOUNDATIONとのSPLIT EPをリリースしあえなく解散。メンバーはHEADACHESというバンドで活動中。(Y)
(POISON CITY/PCR016)CD 2008年

DAHLMANNS/ST



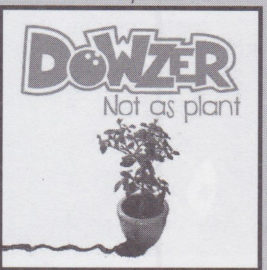
YUM YUMSのギタリストANDRE DAHLMANが奥さんのLINE嬢と仲良く立ち上げた新たなプロジェクト・バンドのデビュー作。4曲入りでうち3曲がカヴァーです。誰もが知ってる名曲をペロっと当然のようにドヤ顔でカヴァー、そしてオリジナル曲もYUM YUMSエッセンスをふんだんに使った極上スイーツPOWER POP PUNKに仕上がっており、もはや溜息しか出ません。今後もリリースが控えているようなので要チェックです。(Y)
(POP DETECTIVE/MUD8078)CD 2010年

GREEDY GUTS/SONGS & BULLETS



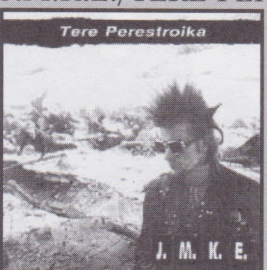
90年代初頭から活動しているこのバンドもまだまだ現役。えっ、まだいるのと思う方も多いのでは？！初期の頃のサーフ・テイスト溢れるすれすれのファスト・ポップ・パンクは、大人になって演奏も上手くなったけど相変わらずの疾走感で突っ走ります。あくまでもメロコアではなくファスト・ポップ・パンクは健在！痛快です。ジャケのイラスト・ワークは彼等と仲の良いHARD-ONSのRayによるもの。これはジャケだけでも買っちゃうでしょう。(O)
(SLOWDEATH/SD012)LP/CD 2008年

DOWZER/NOT AS PLANT



風車とチーズの国オランダからひょっこり現われた男女ヴォーカルPOPNPUNKバンドの2nd。ジャケットから既に名盤の予感。職業・タクシー運転手の女の子サンドラちゃんのヴォーカルと男性ヴォーカルのハーモニーはUSのSTEINWAYSを彷彿とさせてくれます。本人達はその辺を全く意識せずに、メロコアやったらこんなサウンドになっちゃった、って感じだと思いますが。(Y)
(WATERSLIDE/WS046)CD 2010年

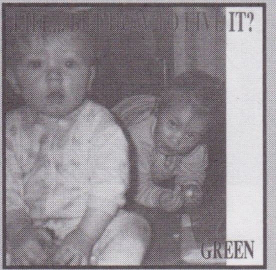
J.M.K.E./TERE PERESTROIKA



初めて聴いたときは全然かっこ良くないと思った。しかしこれが凄まじいまでの中毒性で気付いたらメロディーが頭から離れないんだ。エストニアに奇跡が舞い降りた一枚。YouTubeでこのタイトル曲の映像が見られるけど、それも凄まじいのでぜひ一見を！メンバーはモヒカンやらスパイキーなのに、繰り出されるサウンドはスカスカ、そしてしまいには「アインッ、アインッ」と意味不明の単語を連呼。後の作品もかっこいいけど、この衝撃は味わえない。(O)
(STUPIDO TWIN PRODUCTION/STUPIDO001)7" 1989年

EL ZINE早くも1周年おめでとうございます！あっという間でしたね。もっとのんびり発行するのかと思いきや、かなりのハイスピードでの発行はかなりのハードワークかと思いますけど。このコーナーも終了っていわれるまでは頑張って続けさせてもらいたいなと思います。
今回は1周年記念ということでもないんですが、これまで国別に紹介してきましたが、勉強不足でなかなか一国で括ることの出来ないバンドをまとめて紹介させていただきたいと思います。今回も紹介させていただく音源は編集盤や再録等でちょっと探せば見つかるものを中心にしていますので、興味を持っていただいたらぜひ聴いてみて下さい。

…LIFE BUT HOW TO LIVE IT?/GREEN



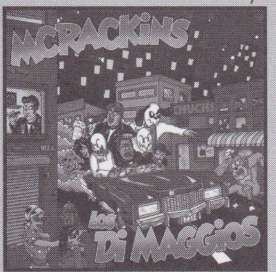
ノルウェイ産女性ヴォーカル・メロディック！くねくねとしたギターに疾走感のある楽曲は聴き続けるうちに癖になってしょうがない。SOFAHEAD、JINGO DE LUNCH、女性ヴォーカル・アナーコ・メロディック好きな人ならたまらない音じゃないでしょうか。全音源を収録したディスコグラフィーがリリースされるという噂が5年前からあるけど全くリリースされない。早くリリースして欲しい。EBULLUTIONから編集盤もリリースされている。(O)
(BERI BERI/BB007)7" 1990年

SMITTEN/SMITTEN 94' - 99'



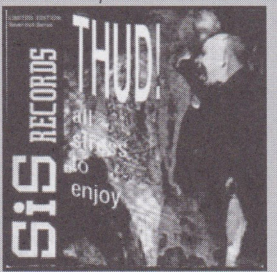
アルゼンチンの青春MEGA CITY FOURことSMITTENの94年から99年のリリースをまとめたベスト盤。髪の毛さらさらでさっそうと走り去り、その後にはフローラルの爽やかな香りを残して行くようなミラクル清涼メロディック。スペイン語の歌詞も本家スペインよりもクセが無く非常に聴きやすいです。アルゼンチンにはMXSをはじめ、同系統の爽やかメロディック・バンドがまだまだ隠れているようです。(Y)
(A.M.P/AMP007)CD 1999年

LOS DI MAGGIOS/SPLIT WITH MCRAKINS



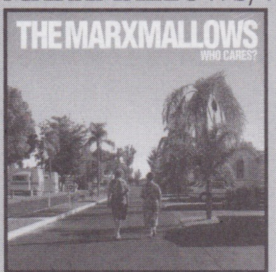
フランスの女性メンバー含む4人組の目下最新作。STEINWAYS～STRAIT A'S～NERD GETS THE GIRLばりのキュート女性コーラス、そして男も負けじとオーオーコーラス。そして曲間を調節して流れるような展開。あっという間に5曲が過ぎ去り、後に残ったのはほのかに甘いPOP PUNKの香り。レベル高過ぎです。GROOVIE GHOULIESのカヴァーも収録。今、地球上で最もフルレングスが待ち望まれるバンドです。(Y)
(DIRTY WITCH/DW014)CD 2009年

THUD!/ALL STRESS TO ENJOY



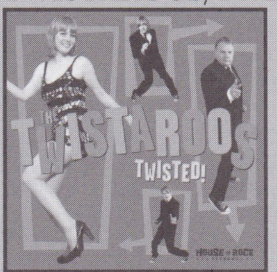
オランダにひっそりと産まれ埋もれたグレートCRUZPUNK！国内に数千人はいると信じたいBIG DRILL CARファンでこのバンドを聴いた事ない人は大喜びするのでは。ってかまさにBIG DRILL CAR(笑)。思いが通じてかスプリット7"をリリースもしちゃっています。しかし、本家BIG DRILL CARはコレクターが多いせいでこのスプリットは入手困難。この7"は探せばまだ見つかると思います。しかしこのSiS RECORDSはジャケが似てるので間違えて他の作品を買ってしまわないように。(O)
(SiS/SIS#8)7" 1991年

MARXMALLOWS/WHO CARES?



リリースして欲しいと言われていたのだけど、スケジュール的に実現出来なかったのが悔やまれる"おフランス産"サーフ・ポップ・パンク・バンドの2ndアルバム。あのBEN WEASEL先生も大絶賛した収録曲Hawaiian Girlは大名曲。BEACHBOYSなハーモニーとウクレレで始まり、一気にバーストする気持ちいいミドル・テンポなサマー・チューン！夏にはうってつけのサウンドだと思います。でもクーラーの効いた部屋で聴きたいけど。(O)
(自主/MxM01)CD 2010年

TWISTAROOS/TWISTED!



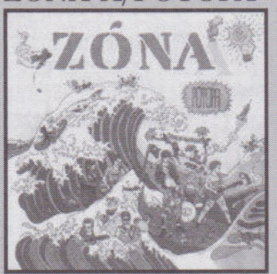
YUM YUMSのキーボード奏者としても名を馳せるシンガー・ソングライターVIBEKE SAUGESTADがヴォーカル担当、バックをYUM YUMSが務めるプロジェクト・バンドのデビュー・アルバム。バンド名の通り60年代のツイスト・ミュージックを機軸としながら、VIBEKE嬢の圧倒的歌唱力と大人のエロさで、体が勝手に踊りだします。YOUTUBEなどのライヴ映像がハンパなく素晴らしいので是非一見を！(Y)
(HOUSE OF ROCK/HORR1)CD 2010年

MXS/LO QUE ESTAS BUSCANDO



アルゼンチン産哀愁のメロディック・パンク・バンド。友人から教えてもらって自分が入手出来たのはアルバム2枚とミニ・アルバムとコンピ1枚のみ。何度かバンドにコンタクトを取っているんだけど…。サウンドはもろにMEGA CITY FOURやMILES APARTのような蒼く切ない哀愁のメロディーの応酬に目頭が熱くなる。もちろん母国語なので何を歌ってるかはわかりませんが、持ってる音源は全部外れなしなんですよ。誰かこのバンドの詳細教えて下さい！(O)
(IF RECORDS, PATEA DISCOS INDEPENDIENTES/021)CD 2000年

ZONA A/POTOPA



チェコスロバキア初のパンク・ロック・バンドPARADOXを母体として結成。当時の政治的情勢で地下活動をずっと行っていてペレストロイカによってようやく表立って活動が出来るようになりリリースされた1stアルバム。そんな彼等ですけど、サウンドは合唱ありのめちゃくちゃポップなパンク・ロック！パンク・ロック、Oiパンク、ポップ・パンク好きな人でも全然いけちゃうハズ。後にメジャーと契約するけど全然音は進歩なしってとこがまた良し！(O)
(INFLAGRANTI/IF004)CD 1990年

PANX ROMANA/PAIDIA STA OPLA



ギリシャのパンク・ロック・ヒーロー、PANX ROMANAの記念すべき1stアルバム。ヨーロッパの端の方でよく見られる独特の暗い雰囲気と母国語のコミカルさの調和が、心のドアをいくら施錠していても強引に開けてくれます。「ヒロシマ～、ナガサキ～」とか歌っている曲もあるので恐らくはポリティカルな内容を歌っているのでしょうが、歌詞を見ても日常ではなかなかお目にかかれないギリシャ語を目の前にして、読むことはもちろん、雰囲気を感じとることすら出来ず、ただただ呆然とするばかりです。(Y)
(WIPE OUT/WOR05)CD/LP 1987年

VARIOUS ARTISTS/PANX VINYL ZINE 10



PENDENTIF BURN'SがLEGITIME DEFONCEの前身バンド収録。LEGITIME DEFONCEは当時レコ屋ではフランスのNOFXなんて呼ばれてたりしてましたが、所謂メロコアではなく無骨なメロディック・ハードコア。ポリティカル度もかなり高い。後にLEGITIME DEFONCEの1stアルバムでも再録されることになるこの曲はかなりの名曲。それまで自分が抱いていたフランス＝おしゃれという概念を崩すアグレッシヴかつ感情を剥き出しにした歌い方もTRALL PUNKにも通じる硬派な感じが未だに好きでよく聴いています。(O)
(PANX/PP014)7" 1991年

GIVE THE ANARCHIST A CIGARETTE 第六回



TEXT:Mune (PAINTBOX)

世の中は今、そろそろ大嫌いな夏です。皆さんいかがお過ごしでしょうか。

前回は何を勘違いしたか、原稿を2回分送ってしまい、内容的に考えて2回分いっぺんに掲載となりました。
SPECIALなんて書いてましたが、ただ勘違いしただけ、一回分損しただけなんでした。ただでさえ、ネタが無いのに、完全な自爆でした。

で、現在締め切りギリギリなんですが、何故あえてギリギリまで待ったかってゆうと、そうです、散々書いて来ましたが……はい、来たLIP CREAM!!
再結成を見れる事になったので、僭越ながら俺なりのライヴ・レポートを書こうかと。

BASTARDは結局見れずに残念でしたが、LIPとなるとやはり世代的に思い入れが違うのですよ。だからチケット買えなかった時はクールに騒がず諦めよう……と思いましたが、行けるとなったらやはり疼いて来ましたよ。
期待しますとも、先輩!!!

さて6月27日、恵比寿リキッドルームにやって参りました。
集まってくるチケットを入手出来た「勝利者」達が。
俺は何となく、チケットが買えなかったからと言って、つてを頼って…をする気にはならず諦めていたのですが、理由は何であれ入手出来たんだから喜んじゃうよ、と。

ただ一番に俺を悩ませたのは、自称、第5のメンバーだと思い込んでいるバンド、ライディーンがライヴ被った事(笑)。何をやってんだよ!
TKCなんてLIPのチケット販売日のバイトまでやっといて(笑)。
メンバーでありたいと願う俺は、悩みに悩んだ……ここで横須賀に行けばライディーンのメンバーの笑顔、そこから得る信頼感…ああ深まる絆…。

だが分かってくれライディーンよ、と。悩みに悩んだ末の結果なんだと……な訳ないだろ、と(笑)。悩んだのはチケット代とあまりに知り合い全員集合のかったるさ、くらいなもんで、LIPに決まってんだろ、LIPに(笑)。
しかも横須賀って遠いし(笑)。また行くわ。じゃ。

しかし、恵比寿駅からリキッドルームまで、良くもこれだけ集まったって感じの知った顔だらけ。ハードコア同窓会みたい。
いないのは、そうライディーンだけ…。
地方からも九狼吽、REALITY CRISIS、END OF SEEDS、ASPHALT等…集まってきました。
どんどん集まるパンクス。老若男女問わず色んな人が来ます。
そして、いわゆる「ジャパコア」と呼ばれる人たちの、他のパンク、ハードコアと比べて一体何が違うのか…ってのを警備隊の皆様をふ、と見て改めて気づきました。
ガンフロンティア/サトちゃん、NO PROBLEM/中さん、ミキオ君……。
ひ、品が無い!面倒臭そう!チンピラ!!!!!

ちょっと使うライヴハウスが違うだけ、カテゴライズされたジャンルが違うだけでこうも雰囲気が違うとは……多分、いつもはあまりいないサトちゃん(ヤクザ)がいるのが随分影響してると思います。
俺が普通に話してる人が普通じゃないのに気づきました…。って事は俺も普通じゃないのか……いや、考えるのをやめよう…。

でもってついに来ました、LIP CREAM!!
600人以上の満員の観客がひとつのハードコア・パンク・バンドの登場を一心に思う。
そんな人数が待ち望むバンドがあったかと言うと、絶対無いです。海外のバンドが来たってそこまでは行かないんじゃない??
そんなこんなで、ロビーでEND OF 姐さんと談笑していると、ホールからジャジャ君らしき声が……。

あれ、早くない??即攻でホール内へ。

いるじゃん、ステージにLIP CREAM!!

ヤバイ、と急ぎすぎ、段差を落ちる俺。開始前になんだお前は、という感じ(笑)。
で、再び見れるとは思わなかった、そして待ちに待った1曲目…。
FOR MY LIFE!!ダメです。個人的に大好きな時期の1曲です。
1時間以上、約30曲を演奏して未発表以外全部曲がわかるハードコア・バンドなんて無いでしょ。コーラスとかサビだけじゃなく、細かいキメやタメも分かる曲が多くて、完全に曲に踊らされてる感じ。
一時期は新曲しかやらない、なんて話も流れてたけど、もう新旧織り交ぜた選曲でサービスたっぷり。TOP FIGHT、SUICIDAL、危機、モルフェイス、汚名…で、個人的に最も熱くなったNO RULES!!でまさかのTABACO!!
もう勘弁して下さい。疲れました、39歳。

しかし、どこからか違う感覚が。すげえ!でも悔しい…。
チェルシーが居れば…と思ってしまい、そんな自分にも頭に来るし、ノッたり立ち止まってジッとしてたり…。もう自分の動きが正常でないのが分かりました(笑)。
でも、その前にチェルシーにも見て欲しかった、って気持ちが高まって、チェルシーを待ち受け画面にした携帯を握り締めて、振り上げて、どうにも止まらない俺。
そんな俺の念が強かったのか、関係なしにしょっちゅう居るのか(笑)分からないけどナオキさんが「チェルシー見た」って言ってたっす。
チェルシーの為に俺は死ぬ気でやったって。

このバカヤロウ、幸せもの!
600人以上客がいて、20年ぶりにステージに立ったナオキさんが、チェルシーの為、一人の為にやるってどーゆう事よ!!
だんだんムカついてくるし、うらやましいし、これ以上俺を混乱させるな!!

とにもかくにも俺の心の師匠、ミノルさんを筆頭に凄い衝撃をゆうゆうと(まあ、色々

あったでしょうが）かましてくれた偉大なる先輩LIP CREAM。
ちょっとだけわがままを言えば、アンコールでやるだろうと思っていたLONELY ROCKをやらなかった事かな。でもこの選曲からすると、名古屋、大阪でどんな曲が飛び出すか分からない、と思いました。

ちくしょう、すげえなLIP CREAM!!
チェルシーが居なくなって、久しぶりにハードコア好きで良かったって気持ちと好きになるんじゃなかったって気持ちが複雑に絡み合う（意味わかる??）最高の1日になりましたとさ。
まだゆっくりと話をしていないミノルさんと、ますます話がしたくなりました。
そこで俺は何か変われる、もしくは救われるのかな…なんて思いました。

しかし、リキッドルームに来たのはLIP CREAMを見る事が一番重要では無かったんだよ俺は。だから混乱してる場合じゃないのでした。
わがPAINTBOXのドラムさんを、チェルシーの日（8・17新宿ロフト）のライヴに向け、説得をしなくてはいけなかった。
なかなか俺と接しようとしなかったが、LIPに来ると聞き、やっと巡って来たチャンスでした。なんだかんだ会って話したら観念したらしく、意外とあっさり承諾。
なんだったんだ、今まで!!しかし彼の提示してくるメンバーなどの条件に戸惑いを隠せない俺でした。
でも、やっとやる気になってくれたのは、これもLIPとチェルシーの巡り合わせかな…なんて勝手に思ったりして。

で、ドラムが決まったところでやっとベースを誘える、と思い早く誘いたくて待っていた、新潟はBLOW BACKのスギちゃんに声をかけた。
当初考えたのは、東京の人じゃなければZONEのサワ君かBLOW BACKのスギちゃん。両名ともチェルシーとは深い関係。
どんなベースが得意か、スタイルはどうかはある意味関係無かった。
しかしHG FACT佐藤君の情報で、ZONEは近い日にレコーディングだかマスタリングが入っていて無理じゃないかと。
サワ君とも一度同じステージに立ってみたかったし、夢は広がったけど事情があるなら仕方が無い。
すぐさまスギちゃんに電話した。驚いてるスギちゃん。困惑している、マジで?と信じられない様子。

俺には信じられないってのが分からないけどね。いけるでしょ、絶対。
しかし、あまりにも時間が少ない事、多分ほとんどスタジオには入れない。
で、1日待ってくれ、と言われたが、テンション上がって辛抱たまらなくなったスギちゃんから数時間後に電話が来て、承諾してくれた!!
やっと、やっと決まった追悼のメンバー。
時間は無いけど、どんなステージになったとしても出演する事が確定になったのはすんごい嬉しいし、一安心って感じだった。
そしてその後、紆余曲折あってギターはカズからオサムに変わった。

この際、俺のハッキリしないやり方で、カズを不快にさせ、傷つけてしまった事をここで詫びたい。都合がいいけど、いつかカズとやりたい、やれると俺は信じている。

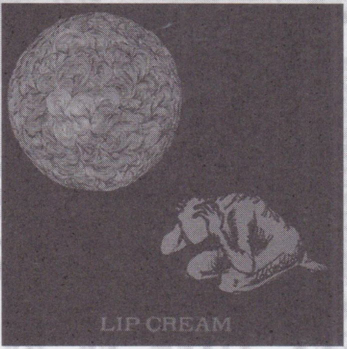
最近、何をしても失敗ばかりで自信を失っている俺ですが、さあここ一番、チェルシーの日は、この日だけは上手く、楽しくやりたい。
チェルシーの曲はまだライヴハウスで流れ続ける事になりました!!
この号が出てる頃には、もう終わってるのか?チェルシーの日。
どうなっているのか、俺は、見た人はどう感じているのか……。

どうなる事か、危ぶむなかれ。いったらんか〜い!!!!

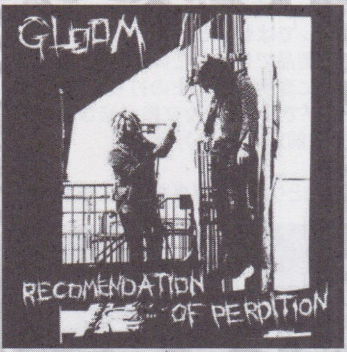
8月17日新宿ロフト
「BURNING SPIRITSチェルシーの日」
adv:¥1000 door:¥1000+DRINK

出演
PAINTBOX
FORWARD
鉄アレイ
R/A/P/E/S
JABARA
P.I.M.P
π（パイ）
CRUDE（HAKODATE）
MUSTANG（HAKODATE）他……。

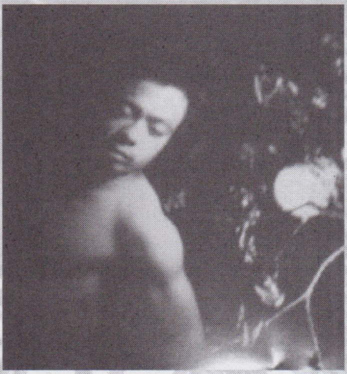
今月の良く回った盤

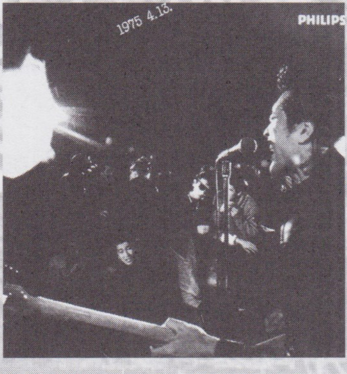


LIP CREAM「ST」



GLOOM
「RECOMENDATION OF PERDITION」


マリア観音「犬死に」



CAROL「ラストライブ・燃えつきる」

Making Some Cool Noise 非音楽を作るための音楽談義

ギター遂に完成しました！いやー長かった。去年の12月に打ち合わせを開始して約半年！
正直、もう何年も音楽、ギターと触れ合ってますがこのテンションを半年持続させるのは良くも悪くもかなりキツイ(笑)。
半年間って短いようで色んなことが起こりますから…。
関係ないけどとりあえず僕は禁煙しました！というようなワケで今回はレヴュー・コーナーをお休みして二ツ木コーナーは100％ギター特集で行きます！

TEXT:二ツ木正康

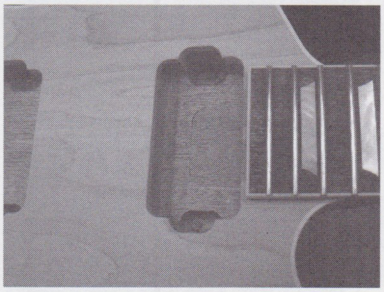
4月下旬

加工があがったという事でネックの握りの最終確認等の為、お店に出向く。此処までの変更点はコストを下げる為、ポジション・マークをアクリルの安いヤツにしていたがコレではもったいないよ！と言われ＋αで既製品で使われているくらいのグレードの物に変更。フレットの打ち方もギブソン・タイプでは無く後々交換が楽なタイプに変更(名前忘れた・笑)。

まぁとりあえず写真を見てくださいよ！



フロント　バック



セットネック
TOP材の張り合わせ面が何か旨そうに見える

なんていうか、ネックの最終確認って事ですが、オーダー・ギターと言えども一本目だし結局ギターに自分が合わせる覚悟が出来ていたので全て標準のEXの仕様で進めてもらうことにした。やっぱ標準、基本が大事/好きって事で。ここでボディ塗装の打ち合わせも。

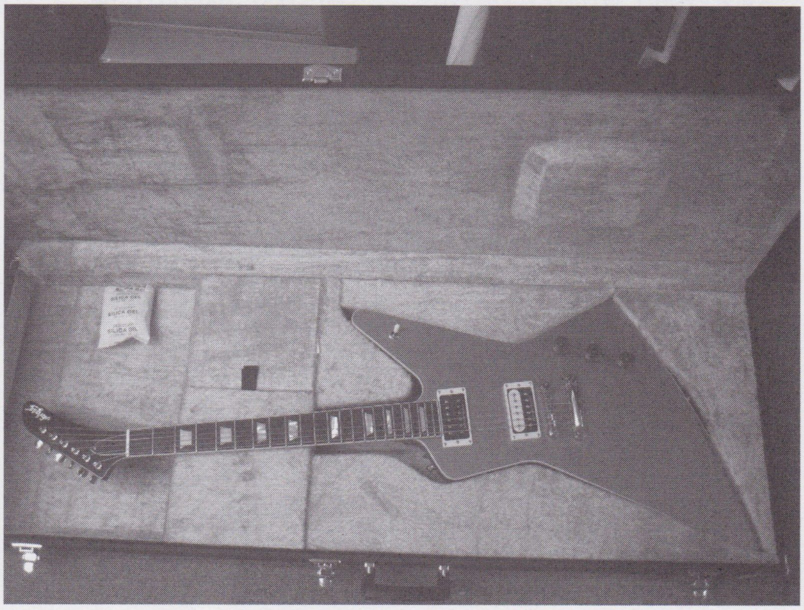
僕は塗装の話になるとゴールドで！の一点張りを続けていたがゴールドって言っても色々あるらしい…。なのでビンテージのヤツ！って言ったがビンテージも色々あるらしい。もう正直わからん！って言いたかったけどポーザーの俺は勿論知ったかを決め込む。

最近のヒスコレなどのゴールドは光に照らすとピンクがかって見えるらしい。僕のゴールドのボキャブラリーは緑がかるって思ってたのに…。ビンテージで緑に見えるゴールドは、錆びが出てそう見えるらしいです。

あっ、そういえばバインディングの色にも悩みました。最初は白って事でオーダーしていましたが、待てよコレはアイボリーでは無いか??と、気づいてアイボリーに変更したのですが、白がニスによってアイボリーに見える場合もあるとの事で、う〜ん参った…、どうしようか？！考えた末、ゴールドTOPなので余り変色しなかったことを考えアイボリーにしました。んで、ボディ塗装の方は結局、やっぱりよくわからないので担当の店員さんにお任せ。59年のレスポールを参考に進めることになりました。

7月上旬　完成

うおー来たぜ！ハードケースも特注だぜ！



ギターinケース

正直、ゴールドってことでスケベ椅子みたいになるのでは？と数名に嫌がらせを受けていましたが、どうですかコレ！って白黒写真ですが…。かなり塗装にも拘ってもらえた様で、実際に59年のLPを見本に色を造ってもらった！見る角度によってはナチュラルにも見える、正にビンテージのちょっと気が抜けたようなゴールド！！素晴らしい！

そして恐る恐るAMPにINするとバイーん！ってとてもたった今完成したとは思えないMIDな正にGIBSON系、そして今回の特徴、TOPにハードメイプルを張った甲斐のあるMIDでありながらトレブリーな音…。イイ…。後はウデだけ、練習あるのみ…。

弾き心地も最高、ネックを握った瞬間にビビっと来ました、強いて言えばやっぱ変形ギターのバランスに慣れるまで少々時間がかかりそう。

今回のまとめとしては、

**ギターのことに詳しくなくても、
良いアドバイザーと良い職人、
そして自分に金があれば
オーダーは出来る!!**

ということかな(笑)。

ギタリスト解剖

metal punkやろうぜ！

vol.2 shogo

ある日の平日のライヴ、スタート時間に遅れて到着した私の鼓膜を一秒でおかしくしたのは彼のギター！ウルセー！と思いながらエフェクターボードを見て驚愕！なんじゃこのサイケ、プログレ真っ青のボード内の雰囲気は??!!コレは黙っておくワケにはいかん！ということで話しを聞くことにしました。彼の性格/人柄が良く出ていて細かいことを言いながらも、やはりハードコア・パンクをやってる人間だなと思わせる理屈を超えた所もあり、良いインタヴューになりました。東京ウルサイ音ギタリスト、ISTERISMOショウゴの登場！

INTERVIEWED：二ツ木正康

■あなたのお名前、バンド名は？ギター歴は何年？



「ショウゴ/ISTERISMO。初めてギター買って触ったのが14年前。本格的に始めたのはISTERISMOを始めてから。6年くらい。ギターを弾いた時間はもっと少ない」

■現在の使用ギター（材、PUなどスペックの詳細もわかる範囲で）、AMP、エフェクターを教えてください（機材の特徴も踏まえて）。

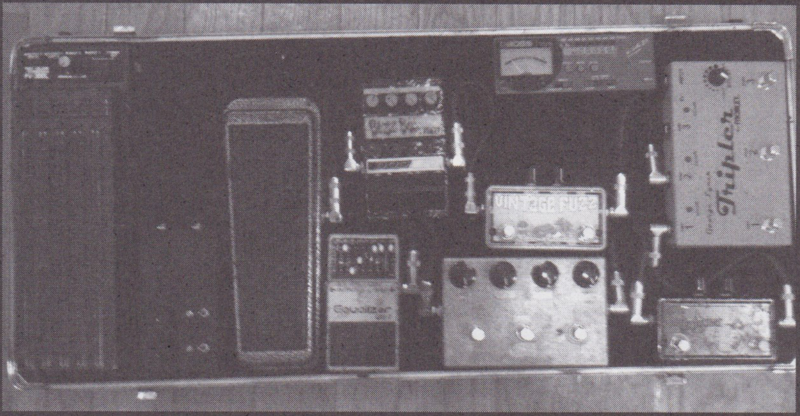
「**ギター**：FENDER『BIG BLOCK STRAT』
カラー：Black, Polyurethane Finish
ボディ：Alder　**ネック**：Maple, Modern "C" Shape, Satin Polyurethane Finish
指盤：Rosewood, 9.5" Radius (241mm)
フレット数：21 Medium Jumbo Frets
ピックアップ：1 Gibson BurstBucker2 Pickup(リア変更), 2 Enforcer Alnico Magnet Single-Coil Pickups(ミドル/フロント)
コントロール：CTS A500K VINTAGE TYPE1(Volume変更), CTS A500K NEW TYPE(Tone変更)
ピックアップスイッチ：5-Position Blade, Special Switching　**ブリッジ**：Vintage Style Synchronized Tremolo　**ジャック**：SWITCHCRAFT(スイッチクラフト)/11(変更)　**ペグ**：SD91-HAPM-05M-L6/GOTOH(変更)
ピックガード：鼈甲ポリエステル(変更)　**スケール**：25.5"(648mm)　**ナット**：1.650"(42mm)　**元の特徴**：Matching Painted Head Cap, Chrome Pickguard, Knurled Chrome Control Knobs, Chrome Switch Tip, White Pearloid Block Inlays on an Unbound Neck　**線材**：Belden8412(変更)

●機材
アダプター：1SPOT DC9V AC ADAPER/Visual Sound(アダプターの横幅を狭く設計、特に特徴はない)　**ペダル**：LINE SELECTOR/MORLEY(GEORGE LYNCHがMORLEY社と開発したLINE SELECTOR　3台のアンプを同時に鳴らすことができ、複数使用時の音質劣化を防ぐためにブースターを搭載)　**【Marshall】 SODA MEISER/EFFECTOR 13**(EFFECTOR 13、現DEVI EVERのファズ。アメリカはポートランドに在住の女性ビルダーがハンドメイドで製作している。BIG MUFF π 70'sやFUZZ FACEのような太い音に深い歪。ノーマルのギターで鳴らすとサスティーンが少ない)　**BEEBAA FUZZ/ROLAND(CLONE)**(その昔、知人から譲ってもらったペダル。HYPER FUZZ/BOSSの前身。音は少々トレブリーでディストーションのような音。サスティーン調整も効く。トレブルブースターは本物より利きがいい。これとSODA MEISERを直列で繋ぐことにより太くブチブチ千切れるファズ特有の音とトレブリーなディストーションのコード感の融合というアンビバレンツな音を狙った)　**GE-7/BOSS**(BOSSのイコライザー。音質補正用。音が硬くなるためあまり気に入ってない)　**【JC】** VINTAGE FUZZ MASTER/EFFECTOR 13(SODA MEISERと同じメーカー。これは倍音たっぷりのオクターブファズ。何かに似ているというわけではないがビンテージファズという音。SODA MEISERといっしょにビルダーにメールを送って購入した。高かったので分割にしてくれと懇願したが駄目だった)　**BUZZBOX/DOD**(DOD社が世界に誇る迷作ペダル。オクターバーが搭載されており弾いていない音まで出る)　**Cry-Baby Wah Wah/Jim Dunlop**(イコライザーとして使用。コード感はなくなるがワウの踏み込んだ音のほうが通常のイコライザーより潰れた高音がでる。以前はVOXを使用していたが壊れた為、Vo.から借りてる。音はハイがVOXより少し出て少し細い)　**VE Model-201/Vanilla Electronics**(Vanilla Electronics社のバッファ＋トレブル・ブースター。音が3倍～20倍まで上がる)　**FV200/BOSS**(ボリュームペダル。JC側の音を切る用)

●シールド
【Guitar→ペダル】Belden8412 6m＋FURUTECH Plug　**【Marshall側パッチ】**Mogami2534 15cm×4＋SWITCH CRAFT Plug　**【ペダル→Marshall Amp】**Mogami2534＋FURUTECH Plug　**【ペダル→JC側】**Belden9395＋SWITCH CRAFT Plug
シールドはホースのチューブのようなもので、ある程度ストレートな音を出すクリーンなものでないとうまく歪みが乗らない。いい音が出ないと思う。PUも同様。MarshallとJCそれぞれの音の特性に応じてシールドは用意してある。FURUTECHのプラグは最近変えた。音を低中高音はっきり出してくれていいのだがちょっとハイファイ過ぎるかな」

■メイン・ギターのフェンダーはUSA製なの？

「MEX製。ストラトを買おうと思ったのは好きなJimi HendrixやCreamの頃のEric Clapton、パンクだとDischargeのBonesが使っててかっこいいなと思って。GibsonよりFenderやビザールギターのシェイプが好きで、5年前にJaguarを買ったんだけど、全くオリジナルの音がバンドに合わなくて駄目だった。配線もいじれなかったから、使えるようにするために店に持っていくとめちゃめちゃ金がかかりそうで売り飛ばした。それでリアハムで現代のスペックのストラトなら使えると思って探していたら今のギターを見つけた。マッチングヘッドでインレインがローズウッドでブロックという変わったスペック。また、購入時に自分のギターを見てくれてるトモダチに、「MEXってどうなの？」って聞いたら「パーツはUSA製と変わらなくてビルダーが違うだけ。USA製は高いわりにハズレが多いけどMEXは手頃でハズレも少ない」と



聞いた。実際に彼に見てもらったら当たりらしくよかった。今は音が少し現代的過ぎる気がしてきたかな。もっと温かみのある枯れた音が好き」

■ペグをゴトウ製に変更した理由は？

「元々付いてたペグが壊れたというのもあるけど、ライヴ中はチューニングの時間をなるべく取らずにやりたいので、安定感のあるGOTOHにした。タイプもベースによくあるペグの穴にさして回すだけのやつなので弦がライヴ中に切れても素早く対応できるから」

■ピックガードを鼈甲柄にしたのには何かオールドロックの影響みたいなのがあるの？

「音楽は昔からギターの音がよいと感じるロックが好きだったかな。途中フラフラしたこともあったけど。特に誰が何を使ってたってわけではないけど、ビザールやビンテージのギターは好きだ。昔のロックを感じるというか。ちなみにボリュームとトーンのコントロールはレスポールの金に変更して古っぽさを意識してる」

■線材にまで拘るのはやはり先輩達の影響が大きいのかな？変更して明確な違いって何？

「もとは、5年前くらいにZenocideの前のギターが音響系の仕事をやり始めようとしてて、シールド作ったり、楽器の内部配線変えたりし始めてて。その時シールドも作ってもらった。シールドは使ってみたら音の違いが格段にわかった。そのときギターの線材交換のことも知って、ギターの配線も変えると全然違うらしくやってもらおうと思ったんだけど、そいつが音信不通になって。それで最近までずーっと気になってたんだけど線材だけは変えないでいた。最近、野崎くんが線材交換とシールド製作をやってくれると言ってくれてやってもらった。ありがとう！今の線材に変更して明確な違いは、音が単純にほぼ全ての音域がブーストされてデカクなるのと、ギターの本来の特性を引き出すことができたことかな。歪ませてもストラトっぽさがかなり出るようになった気がする。他はPUの変更も大きい。このPUを載せてほんとによかった。音に広がりがあり、歪みを強く加えても芯が潰れず他の楽器の音にも埋もれない。オサムくんありがとう！」

■自身のギターのチューニングと使用弦メーカー/ゲージ、ピックの種類と固さ（こだわりがあれば何なりとお願いします）。

「**チューニング**：レギュラーチューニング
弦：Arkay StringsのE260（11～50）。前まではErnie BallのPOWER SLINKY（11～48）のものを使用していたが、最近変更。太く腰がありブライトな音。歪みが強いので軟い弦だと音が埋もれるためヘビーゲージを使用している。**ピック**：JIM DUNLOP 0.94mm ティアドロップ。ある程度硬くないと弦に負けてしまうため硬いもの。そしてしなりがあるもの」

■チューニングがレギュラーなのにゲージは太いね。やはり音が格段太くなるの？チョーキングするの大変じゃない？

「昔、ギターを始めた頃Blankey Jet Cityが大好きで（今でも大好き）ギターの浅井健一がダダリオの11～の弦を使ってるから使ったというのがきっかけ。ちょっと軽いゲージを使ったこともあるけど何かしっくりこない。音は結構太くなる。セッティングの歪みが強いので弦は強くないと音負けするからというのもある。チョーキングはしづらい。1音上がらず、ハーフになってしまうことがほとんど。まあスキルが足りない」

■セッティングを教えてください。自分の音の拘り、特徴もお願いします。

「MarshallとJC120の2台出し。Marshallはライン用。JCはノイズ用。Marshallが太いメインの音、JCは高音用、これは味付け程度。2台のアンプでとにかく音圧がデカく低音から高音まで全てのレンジの音を出すようにしている」

■JCはやっぱりドコのライヴハウスにもあるからJCなんだよね？いやしかしJCの方でノイズを出すってのはショウゴ君が初めてじゃないかな？

「ドコのライヴハウスにもあるからっていうのもあるし、トランジスタアンプは音を素直に出すからというのがある。俺はマーシャルとJCは別々に音を作ってて、各音を逆に繋ぐと全くだめ。それぞれのアンプの特性を考慮して音は作ってある。JCの方でノイズを出すってのはバンドを始めたときに、もともとそういうもんだと思ってた」

■最初に買った、手に入れたギター、それは何故そのギター？？

「中学生1年の頃、当時の歌謡曲（Luna SeaとかHigh Lowsだったかな？）を見てものすごくギターを始めたくなり、メーカー名は忘れたけど近所の楽器屋で買った何かのストラト。ブラックボディ、ホワイトピックガードのよくあるやつ。買って3年くらいで人にあげてもうない」

■現在までに影響を受けたアーティスト/ギタリストをあげてください。その影響は今現在どのように自分のスタイルに反映されていますか？

「ISTERISMOが実質的に初めてのバンドで、最初の頃は、機材も弟にもらったEpiphoneのレスポールカスタムとHM-3とOC2/BOSS、RAT2/PROCOしかなかった。結成当時のバンドのコンセプトはWretchedと日本のCRUSTサウンドをミックスしたWretched版Frigoraで、その経験も知識もない俺はホントに手探りで音を作るしかなかった。MT2/BOSSがいいと聞けば買って試してみたり、様々なCRUSTサウンドに使われる機材を試行錯誤しながら使った。やがて自分の聴く音楽のジャンルも、周りの影響を受けて



メキシコ製フェンダー

浅いが広がり、その影響も音に取り入れるようにした。Wretched版Frigoraはもう意識してない。前回のインタヴューのジャッキーさんはもう完成された音だと思うけど、自分の音は今なお試行錯誤中。好きな音楽は色々あるけど、今まで自分の音に影響を与えた主なジャンルは日本のCRUST CORE、NOISEミュージック、SludgeやStoner。今までは、音源上で聴いて主に影響を受けていたが、最近では色んなシーンの人たちと絡む機会も多くなりその影響も今取り入れようとしている。アンプを2台使っていると前述したが、Marshall側ではSludge、Stonerの音をJC側でNOISEミュージックの音を、トータルで日本のCRUST COREサウンドを表現している。つもり。好きなバンド、人は様々だが、顕著に自分の音に取り入れようと意識した/しようとしているギタリストは以下の通り。音質のイメージだけで、特に曲を音質も含めて完コピしたというわけではないので、俺の耳を通した影響になっている。歪曲している可能性大。

NABEさん/Last Sentense ex.Ferocious X
Ferocious Xの2nd EPはホントにすごく聴いた。メタル系のギターノイズではなく、オクターブファズのギターノイズ。曲間がギターだけになるときはノイズ側の音を消して輪郭を出したり、レコーディング面でも自らの音に取り入れた。

ATAVISTICのギター(EQUILIBRIUM時)
ランブルコア。ブリブリ激しく叩きつける重厚なギター。オレのトータルでの音はこのイメージを意識していた。

Arthur Van Berkel/Orange Sunshine
オランダのBLUE CHEER。ギターの音はBLUE CHEERをデフォルメしたかのような荒々しいビンテージファズサウンドで強くインスパイアされた。

SUNN O)))
これはギター１人では無くトータルで。音の大きさもあるが、アンプから出されるシンプルではなく複雑な、情報量の多い音に影響を受けている。機材は真似したのではなくたまたま同じものだった。

オサムくん/Alliance
経験により洗練されたその音とテクニック。本当にすごくて音源を聴いたり、ライヴを見るたびに「俺がバンドやってていいのかな」と思ってしまう。それだけすごい人。曲面でのギターの切り込み方や足元ではなく手元で音の静と動を使い分けるところは圧巻。最近はギターのこともよく相談に乗ってもらっている数少ない同じ地元の大先輩。PUとポット、Mogamiのシールドはオサムくんに薦めてもらった。

野崎くん/Stagnation、Abraham Cross
何でも始めれば斜め上にいってしまうそのセンスとこだわり。ギターの線材交換やシールド作成は野崎くんにやってもらった。ここ最近まではギターのことについて話せる人がいなくて暗中模索してすごい孤独だった。いても消えていったりで。オサムくんと野崎くんは出会えてすごい感謝してる。俺にないものをたくさん持っていていつも刺激を受ける。

CAZUさん/π
面識はないがORdERの頃の音作りやそのステージングには衝撃を受けた。自分の音に直接的な影響があるわけではないがEL ZINEのインタヴューでの「多くの音楽を聴いて消化不良になるのではなくひとつの音源を咀嚼して自分の中に取り入れ、自らの血や肉にするようにすることが大切」という発言はとても感銘を得た、今、実行している。

ケイロウ/AKUTARE、鉄アレイ
同年代。存在感とスキルもすごいのだが、もっとすごいのが小手先の技術や機材ではなく気持ちで楽器を弾き、それが音に現れている。その姿勢に影響を受けたというか。そしてめちゃくちゃいい奴。

杉本くん/ex.俺の専属のリペアマン
とてもギターに詳しい学生時代の俺の友達。今は大阪に住んでいて近くにいないのだが、昔は快くオクターブチューニングやリペアを引き受けてくれ、楽器の基礎を指南してくれた。

ヒロヒサ/ex.Zenocideのギター
彼にシールドや線材の変更の違い、Orange SunshineやSUNN O)))やOMなどの音楽を教えてもらった。ルーツを持ってきてくれた感じ。元気にしているだろうか。

弟
実の弟。同じ時期に一緒にギターを始めたのだが、本当に練習するやつで俺より常に巧いため俺はギターを練習するのがいやになってしまった。どんだけうまいかというと、今は本職の傍ら結婚式やバー、カラオケ教室でギャラをもらって弾くレベル。朝にクラシックギターをキッチンで弾くと換気扇に小鳥が止まるらしい。おかげで3年くらい前まで俺のこだわりはスキル面より音質の方に異常な傾斜があった。だが、よくいえば余計なテクニックや理論がリミッターをかけることなく今までの音作りができた。反面教師。

Screwithin
去年ギターのウーさんが骨折してヘルプでギターを弾くことになり、初めて出来あがっているバンドでギターを弾いた。他のメンバーも歴代すごいプレイヤーで俺は全然駄目だったけど、一緒にやれてさまざまな面ですごい勉強になった。もっと練習しようと思った」

■個人的なギター練習はしますか?

「最近まではあまりしなかったけど、今はちょくちょくしている。自分のバンドの曲のアレンジを作ったり、影響を出したい好きなバンドの音をコピーしたり、いい音が出るようピッキングを練習したり。テクニックが全てではないけど、今までスキル面を本当におざなりにしてきたから表現力の少なさを切に感じる。勢いだけで通用するのは20代まで(もう28歳)。語弊を恐れずに言えば、自分のような派手なだけな音はいわばネオンの光。初めて見るときは衝撃を受けるかもしれないがすぐに飽きる。ハードコアのクラシックや日本のハードコアはいわば太陽の光。インパクトより洗練された渋みと深さが人を永く惹きつける。自分もそうなりたい」

■全体的に(音にしても精神面にしても)結局はシンプルなモノを目指そうとしているように感じる。(そしてそれに惹かれながらも)道をあえて険しくしているようにも感じるけど、機材を試したりそろえたりするのは簡単に言えば生き方と趣味が合致しているのかな?

「うーん。俺にとっては音質が全てだから。俺の中の定義では音質ってのは機材もテクニックも気持ちも全て含まれているもの。影響を受けたギターとか前述したけど、そのセッティングがシンプルか複雑かどうかは別にどうでもよくて自分の音を作り出して、それを俺が好きかどうかが基準。だから単純にシンプルなものに惹かれているわけではない。要らなくなったペダルはすぐに売り飛ばすから趣味やコレクションは全くない。ただ俺の中でまだ明確ではない理想があって、色んなものを自力でだったり、人から吸収したりして、自分の音を自分の納得のいくまで作り上げたい。
最後に、このインタヴューのオファーが来たとき『俺みたいな中途半端なやつが出ていいのか』という不安も正直あった。でも、昔DOLLで川上さんがGLOOMのセッティングの話をしている号とかを見て興奮したのを思い出してこのオファーを受けた。
俺らみたいな音が好きという奇特な若いパンクで、バンドをやりたいと思ってる/やりはじめてまもないやつは、すぐバンドを組んで、愚直にひたすらやってほしい。石の上にも3年。誰でも最初は知らないんだから不安なんてない。俺も最初は全然何もわからなかったし。
ある程度やっていると誰にも譲れない部分というかこだわりがでてきて、絶対バンドはかっこよくなると思う。それまでがんばって。そしたら一緒に対バンしよう」

今回のキーワード

**俺の中の定義では
音質ってのは機材もテクニックも
気持ちも全て含まれているもの**

KOHKI (K) x SAKATARUIDE (SR)

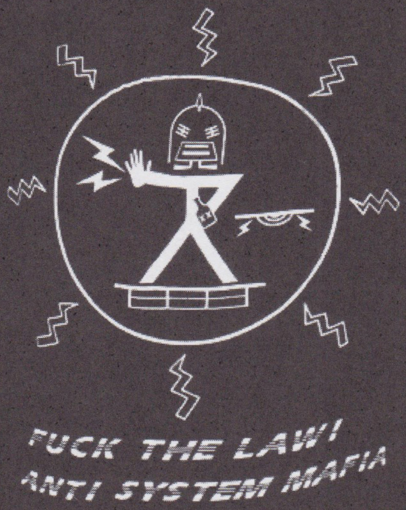


サカタルイードの『とびっきり対談・アンチシステム…セコムしてますか?編』

銅藻ペコリ。夏はキライです大キライ!「太陽なんか無くなればイイんだ!」と言うと必ず周りにひとりは居る「サカタぁ、もし太陽が無くなったりしたらさ〜」。
…分かっとるわっ!!んなコトよりオマエの作った曲を聴かせてみろ!←すぐコレです…。まぁ今年は「四日市3Daysパンク祭り」があるからちょっとだけ機嫌が良い。
遅ればせながらアクロスティックスのシンとも知り合ってさ、VORTEXはボクが知る限りのNo. 1 ジャパニーズ・パンク・ショップだし(つまりヘア・スプレー+ラバー+レザーのニオイがしないとダメなのよ)地理はニガテだからドコにあるのか何度もヒトに聞くんだけど。少し前にカオスのチカラくんに手紙送ろうと思ってウチのギターPATTYに「大分市って何県?」とTELしてドン引きされました(涙)。
んなワケで今回は浜松スクーターズBaセサミ野ゴマ太郎(奴隷)を引き連れ大阪に行ってキマシタ。
「男前は当然メンソールだぜ」ウォーヘッドのKOHKIです。最後までよろし902っ!———

K「もう、も〜簡潔に行こうぜ(笑)」
SR「イイよ。コーキは出身てドコだっけ、札幌?」
K「ん、函館。正確にいうと函館の隣町だね」
SR「何てトコ?」
K「『七飯』」
SR「七飯出身のパンクスでオレ知ってるヒトとか居る?」
K「CRUDEのヒデカズ、ヒトシ(JABARA)あとエイキって…分かる?」
SR「うん。あの、CTRやってた?」
K「そうそう。…まぁソコで切磋琢磨というか」
SR「パンク・シーンてのはあったの?」
K「いやぁ!それらしいものは何も無かった。オレん中で今あるキッカケをくれたのがイズミ(The SLOWMOTIONS)」
SR「それは何で?その『キッカケ』てのは」
K「自分はその…『場所(地元)』に固執しとって」
SR「こだわって?」
K「『こだわって』というよりか『出るコト無く』それをこう…自由にやる事も…あさはかだったから自由な『チョイス』だよな」
SR「それでさ、それより前にパンクに目覚めてるワケじゃん?」
K「そりゃ〜そうだよ。勿論!」
SR「それいくつ位のトキ?」
K「高校生の…16(歳)とか?ただ…バーニング(スピリッツ)とかさ(ツアーで)来るヒト達

の何とも言えない『妖気的』?な…」
SR「ヤバいカンジ?」
K「あ～!そうそう!そこに惹かれるモノがあって。自分の街で構築してく!っていうか」
SR「『オレらもあ～いうのやりたい!』みたいな?」
K「もちろんあったし(あのヒト達は)何なんだろうか?って。それを解きにいきたいなってのが。だけどそこに出ていくのに…その…」
SR「『壁』?」
K「ん、うん。壁だな。東京に出て行くのも…何かを…」
SR「うん」
K「『捨てて』行くんだ」
SR「そうだよね」
K「覚悟が」
SR「中途半端じゃなければ尚更に、ねぇ」
K「削って行かないと。ガキの頃は漠然とやってるケド」
SR「解ってくるよね。いざ動いてみればそんなに難しいコトじゃ無いけどやっぱり最初は勇気っつ～かさ」
K「そう。テメェが意識してる部分がどっかにあって、その中に『認められたい』ってのがあって。必死にやるしか無えな!つ～のが冗談抜きであって。それを地元でもやって行けるってのは『世代』なんかな?自分らがやってきたコトを下の世代が受け継いでゆく、ってよりも何かオレらの頃はやっぱさ『本場』である『発信地TOKYO』とか?少なからず10年前は絶対そうだ。どうせ行くからにはそれを色濃く感じたい、というか」
SR「うん」
K「で、そん中で自分が精一杯、優しく言うと『アコガレ』でやってるとさ『イイ感じでやれちゃってる』みたいなさ。でも実際オレらが考えてるコトがさ、1枚も2枚も上手なヒトらばっかり。言わされて言わされちゃって!ワ～っ!!ってくらって(笑)『分かりました』こ～ゆ～コトかな?って、いうコトの繰り返しっていうか」
SR「うん。最初はさ、地元でバンドやったりしてたの?」
K「バンドやってたよ勿論!」
SR「ギター?」
K「いや、ヴォーカルだよ」
SR「あ、そうなんだ!パンク・バンド?」
K「あの～ノドのさ、ノドボトケいわせてたよ(笑)!」
SR「(笑)それで…ギターに?」
K「それが、あの…『イズミ』だよね」
SR「イズミに呼ばれた?東京に」
K「イズミが東京でやってたバンドをアイツ辞めて…」
SR「RAW NECK(ロウネック)かな?」
K「そう、そうだね。それが解体して(笑)。北海道に帰ってくるキッカケがイズミん中であって。それはそれとしてオレは悩んで、どうしたらイイか解らないままの『カタチ』があって。そこに手を差し伸べてくれたのが、ね。(東京)行ってからもEVANCEのメンバーしかり、自分が師匠と呼べる人間がいっぱい居る」
SR「あ～、同じシーンにね」
K「そう!」
SR「敵わんな～、と思ってるヒト達と一緒にライヴ出来たりすんじゃん」
K「求めに行ったんじゃなくて。面白くねえな、ってコトなんか多々あるじゃん?どっちも知っていたい、というか」
SR「相性、みたいなやつ?自分で試して?」
K「やってみて。食わず嫌いするよりか。自分が『島国』の更なる島国から出て、さぁどうなるか。ホント、シンプルなキッカケ」
SR「うん」
K「ただ、旅してみようかな?」
SR「重く捉えてなくて」
K「やっぱ会うヒト、会うヒト…『カッコいい』じゃん(笑)?なんとも言えねえカッコ良さがあって。実際肌で感じないと解らねえ」
SR「東京には自分の地元に居ないようなヒト、沢山いるじゃん。スゴい個性のネ」
K「我慢できなくて欲しちゃうんだよ。このヒトの『魅力』は何だ?って。厳しさ越えての優しさみたいなの。それを経て…」
SR「えて」
K「へて。へてぇ(笑)」
SR「(笑)」
K「へ、へ～っへへへ(笑)」



SR「アハハ(笑)!」
K「んで、そん中で出会っていくのがサカタであり。みんな今でもこ～いう風に」
SR「オオサカ(CROSSFACE)とかは元々知ってたの?」
K「いや、知らねえ。ん～、イズミ繋がりで」
SR「あぁ、そうかもね」
K「ぶっちゃけ『師匠』とか『先輩』とか、まぁ向こうが望んで無くても『オレはそうだから!』って言えるヒトに結構恵まれててよ」
SR「やっぱチェルシーとかもそう?」
K「そう。絶大なる!」
SR「パートは関係無し?」
K「パートは…関係無い。やっぱ精神と、つか全部。全て。その『一個人』、求めるモノが。計算式あんじゃん?理由が無くたってイコールは『イコール』だって言うヒトも居るし。安い受け売りとかじゃなくて『爪跡』残したい」
SR「あぁ。EVANCEってオレの記憶だと…直ぐレコーディングしたよね?ファースト・ライヴより前に?」
K「(笑)!あれは!」
SR「企んで(笑)?何かかましてやろう、みたいな」
K「そう。その頃はもう…『その頃はもう』ってよりもWARHEAD、悪意」
SR「シーンが一度リセットじゃないけど、それこそ期待と不安の時期で。そしたらEVANCEがポコン!と出てきてスゴい注目度だった」
K「それこそシンプル度満点な『やって無いコト』やろうよ、って」
SR「あれは確かにそうだね。オレは大好きだったし」
K「バンド的なクリエイティヴなコトとか、志とか。出すとこでコケたら全部一緒かな?って。『ど～せコケるんだったら!』なんつってね(笑)!」
SR「メンバー4人が思った以上に『タイミング』とか『イメージ』が…良かったんだろうね」
K「必然的なモノなのかな?だからそこで…さ、矢面に立つ『同世代』じゃない、背負って立つ『DNA』を与えてくれた先輩ら?以外にも必要なモノが、階段昇るようなカンジでさ、同じトコロで右往左往してるような、必ずしも必要でさ。そこの…何かこう『やり合い』?にも出来たから……今が有る」
SR「そうだね」
K「若い頃の『自分』を、そこを大阪に持ってきたい。ってだけさ」
SR「あ～、そうかそうか」
K「もう別に東京だけじゃないでしょ?『日本』で考えると。世界に発信するコトを考えると」
SR「東京はその中でひとつの『発信地』でもあるし『発表の場』というかさ」
K「でも『だけ』だったらつまんないでしょ?」
SR「例えばWARHEADが『京都』だからイイ部分てのも絶対あるんだよね」
K「オレが今WARHEADをやってんのは、やっぱり『ショック』を受けたバンドで」
SR「その前は?前から仲良かったじゃんWARHEADと。そん時はどう思ってた?」
K「やっぱ一緒にツアー回るようなバンドだけあって、自分が函館でこういうコトが出来てたら『素晴らしい』だろうな、って」
SR「うんうん」
K「実際自分が転がり込んでいま『関西』のシーンで、どれだけの想いで何をやるか?って頑張んなきゃいけないトコなんだけど」
SR「そだね」
K「それをやろうとしてる。やっぱね、素晴らしいなぁって思うよ。だから魅力を感じて。あとね『義理がたい』(笑)。何かね…義理をかけないような連中同士でやってきたんだな、って」
SR「あ～、そっか」
K「自分が東京に居る状態から更に、西に転がっていくワケで。あんまりバンド…つ～かオレらのシーンじゃなかなか『無い』シチュエーションじゃん?」
SR「コーキなんか一番早かったもんね。」
K「うん、早かった。先輩達には言われたよ『困ったトキに手を伸ばしても届かない距離にオマエは行くんだから』って。んで『後はオマエが培ってきたモノをいかにして出すか』ってさ。それが一緒にやってきたコトの『答え』になるっていうか」

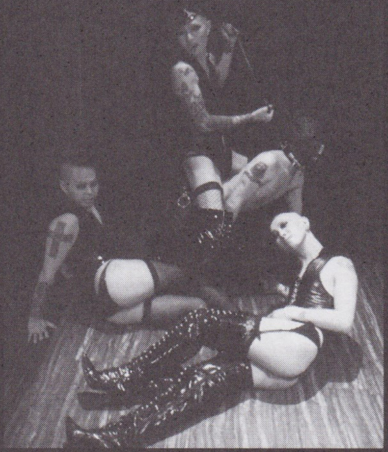
ASM

SR「そうだね。東京がどうこうじゃ無くて、甘えらんない部分あるじゃん？違うトコロに、単身で行くワケじゃん。勿論『幼なじみ』とかも居ない土地に。どんどん『自分』ていう個性が試される、というか、それで消えちゃうようならコーキは『その程度』の個性だと思うし」
K「そうそうそう。あのさ、なんとなく…だけど今になって解るコトって無い？」
SR「あるよ！スゴいある」
K「『漠然としてる』ってのが『答え』になっちゃってて、それより更にこう『カタチ』なり『色』なり濃くしてみたりとか、やってみても結局『時間の経過』が唯一の『答え』になるというか」
SR「考えてても始まんない(笑)？やってみりゃ解るヨ、みたいな」
K「そう！ど〜せやんだったらとことんやんねぇと『間違い無ぇモノ』にしていかねぇと！」
SR「ん。でも例えばほらコーキが、北海道から東京行って、今度大阪来て、なかなか大変だと思うけど(笑)コーキがそれやるコトによって『オレは無理だよ』ってヤツに対して『え？WARHEADのコーキ君は余裕でやってたよ』って意見も生まれるからね」
K「うん。うんうん、そ〜だよ。スゴいコトに関してそんなにやすく、受け入れられない」
SR「先駆者は叩かれるもんね(笑)」
K「そういう現実もいっぱい見てきたし。だけどお互いの『何をやろうか』ってもくろみがハッキリした上で、認めあった上でさ。まさかふたりでこんなコト喋って何かに載せて(笑)？『発信しよう』なんトコまで全くイメージもしてなかったしさ。それは素晴らしいコトで」
SR「んだね〜(笑)。コレが出来るってコトはお互いが先頭切ってやれてる証拠だと思うし」
K「ん〜でもさ『関西』の変なトコでさ、『クラスト』と『ジャップコア』てのが二分されてて。違うシーンだった、ってのが最近解った事実だったんだけれども。『クラスト』って呼ばれてる中にもクレイジーな奴が居て(笑)！」
SR「精神的にコッチ寄り(笑)？」
K「お互いその『主義主張』みたいのを突き詰めて、歌い続けていって、膨大なヒトの数にしたら世の中が『ひっくり返る』んじゃね〜かと。だけど10年経ったら居ねぇじゃん!!あれ？アイツどこ行ったの〜、みたいな。行き詰まったトキに違った世界観持ってる、音楽とか『オレらの信じるパンク』とかじゃ無いけど、気付かねえでやってるオマエっていうのはオレらからしてみたら『ハードコア・パンクですよ』って言える、ひとつ前のヒトが。そこを融合してナンボなんじゃねぇの？って。そういうタイミングが必然的にあるんだと思うわ」
SR「例えば『クラスト』って呼ばれるバンド、10バンドのライヴに行くとカッコいい…っていうか『ピンとくる』バンドが必ず幾つかあるんだよ。じゃあ何でその『カッコいいバンド』と一緒にやらないのか？って。やらなきゃ自分にとってもハッキリ言って『損』」
K「自分に『与える』よね。東京からコッチ来て何を『してる！』のか？って。引っ掻きまわしてぇ」
SR「色んな土地のやり方見てきて、損してる部分に対しては『勿体ない』って感じるじゃん」
K「そうそうそうそう！簡単に言うとさ『発展途上』なトコロを。え〜っ？って思うわ、今でも思う。『大丈夫なの？』って(笑)。アンチ・システムとか言いながら『システム』って何ですか？って言われたら『何もわからない』」
SR「『スタイル』というか？」
K「『スローガン』だね。オレらは自然にやって来たコトが、何かを『知る』じゃん？そう絡みつつ、教えられて。東京の次の大都市だからイイんだけどさ『キレイごと無しにしようや！』って。何がアンチ・システムなんですか？ってね」
SR「あぁ、コッチ越して何年くらいになる？」
K「もう10年…くらいにはなる。危機感が無いモノにはホント、ぞくっとするね。」
SR「元々オレらってドコに居ても馴染めない、っていうか『浮いてる』？ヒト達がロックに居場所を求めた、つ〜か居心地が良くてこうなってるじゃん？今は土日だけパンクやってる人種も居る」
K「サラリーマンをバカにはして無いよ。だけどどっちかっつ〜とそんなんよりヒップホップとかさ、ああいうヒト達の方が人間的に『面白い』カンジはする、比べたら」
SR「悪そうな(笑)？反社会的『もがいてる』感はあるよね」
K「ホストじゃね〜からオレら(笑)！選んでそれを諭して自分なりに。只そういう風に移行してゆく『時代の流れ』と共に、てコトは『たぐり寄せる』コトも可能なんだぜ」
SR「人間てきっと『夢中』になりたいモンなんだと思うんだ。それが人に羨ましがられるブランドのバッグか？5000円のギターか？ってだけで」
K「照れ臭い部分もあんじゃん？」
SR「『発表する』ってのはスゴく恥ずかしいコト」
K「もっと分かりやすく、もっと『シンプルに』ってのを感じながら今喋ってるじゃん。そこでコレ(エルジン)を読んでる側に伝えたいのは…面白味…『興味』だよな？」
SR「うん」
K「馴れ初め、と『何でこうか？』って」
SR「オレらのスタイルが」
K「これが何かの『きっかけ』になったら嬉しいな」
SR「そだね、うん」
K「皆まで言わねぇよ(笑)。皆まで言わねぇ間柄にさ、オレ達みたく」
SR「共通するのはみんな『悪い』と」
K「そうそうそう(笑)」

…うんうん、意外とマジメでしょ(笑)！実は今回大阪に早く着きすぎてキョウジ(オルガニズム)にTELしたところ「サカタさ〜ん、ボクら今から神戸でライヴなんで来て下さいよ〜」といつもの可愛らしい(極悪)トーンでお願いされたので急遽神戸へ→突然現れたオレを温かく迎え入れてくれたサトル・シュン・アカハニ(ORGANISM)、ZIP(LUCY＆THE LIPSTIX)、ユウ(SKIZOPHRENIA)、タナカ君＆ケチャ(現ベクターズ・スタイル・コミュニティ)、タム(ACROSTIX)、ミナミ(反権力ZINE)、高山クン、ありがとう！次はもっとゆっくりと遊びたいデスな。
それではここで問題っ！

映画「MAD MAX 2」ラスト・シーンでマックスの運転するトレーラーが転倒します。ガソリンを積んでいたはずのタンクからこぼれ落ちたのは只の砂。マックスが味方に騙されていた事に気づく場面。…しかし何故に「砂」なのか？タンクが空ならばもっと早く走る(逃げる)コトが出来たはず。
答えは…いつか会って話しましょう、涼しくなる頃に(笑)。

8月7日名古屋CLUB UPSET
"BASEMENT WE STAND × BASEMENT UNLAWFUL ASSEMBLY –BASEMENT CLUB 10th PRE ANNIVERSARY"
VEKTOR/女王蜂/DILDOS/真摯/九狼吽/NOT REBOUND/NEWDAWN/NOT A NAME SOLDIERS


浜松サイコビリー「DILDOS」ルックスも良ければライヴもカッコいい！だから写真載せちゃった(笑)

THE THUNDERBOLT! VOL.6

TEXT:TAKAYAMA(NIGHTMARE/PUNK AND DESTROY/FRAMTID)

親愛なるEL　ZINE読者の皆様、こんにちは!ちょうど皆さんがこの号を手にし、この文章を読んでいる時でEL ZINEも創刊から丸一年を迎えるとの事で、おめでとうございます!山路おめでとう!(笑)この「The Thunderbolt!!」も、第2号から連載させていただいている訳で、これからもしぶとく続いていくであろう本誌ともども、改めまして今後ともよろしくお願いします!(^3^)/

さて今回、実は四日市某所にて今この原稿に取り掛かっています!ホーム大阪にて内容の濃い、怒涛のライヴ・ラッシュをサバイブし、極めつけCrudos Martin写真展でなかなかの満身創痍状態になりつつもやってきましたここ四日市、そうですAcrostixレコ発3days!原稿など当然何も手をつけていないまま、よせばいいのに全日程に渡り居座りを決め込むもんだから、これはどうあがいても月曜日の締め切りに間に合わない、物理的に無理だ!(汗)しかし常に身長とクオリティだけは常に高い俺ですから、今回も締め切りを守らない訳にはいかない訳です!(笑)コネクションを使用して出発直前に入手した最高級ノートPCで取り掛かるつもり、だったまではいいが、ついうっかりノートPCを人間堂カーに積み込んでしまい、案の定、飲んで飲まれてハラホロヒレハレな時間がまさに電光石火の如く過ぎ去り、最終日のリハーサルの時点でようやくノートPCを奪還、大慌ての半泣きで取り掛かっている次第であります!(涙)あろう事か内容の構想も練り始めるにさえいたっていなかった私は、考えました、「そうだ、きっと奴が来る!」と。そうです、MIXI上クロマニヨンズ・コミュでも「ライヴでもの凄い綺麗なモヒカンのPUNK青年が居る!」と祭りになってしまった事も記憶に新しい、SYSTEM FUCKERのトロージャン・ヴォーカリスト、ユータ君へ、唐突にQ&Aを投げかけてみる事にして、なんとかやり過ごすと言う策に出ました!せっかくの一周年を記念する号なのに、こんなのでごめんね山路!(笑)

筆者が小六の時、TVから流れてくる「人にやさしく」で瞬殺KOされてしまった事は、これまでにもしつこい位に繰り返し話してきたが、それでは筆者とも10才近くの年齢差があるユータの場合はどうだったのでしょうか?

「中一。ちょっとつっぱらかった同じクラスに居た友達がカセット貸してくれて聴きまくったね!でもある日、いつものように聴こうと、巻き戻してたらデッキの中でテープが絡まってグシャグシャにしちゃって(笑)貸してくれた彼には今思うと悪い事したよね、まぁそんな事思ってないんだけどね(笑)」

なんて回答で、なるほど、ユータ君の世代も、まだカセットテープでの音源交換だったんですね、最近なんてメールにデータ添付とかCDRだけど、あれほど、味気の無いものは無いですよね?せっかくのいい音楽も魅力半減だし、利便性ONLYのまがいものでいい音楽との出会いを殺しているものとしか思えません。やっぱカセットテープ、味が出まくりだし、MDやCDRはどんどん捨てれちゃうけど、カセットテープは捨てれませんよね!?この辺は、割と最近出た雑誌のインタヴューでヒロトが語っていた通り、「レコードとCDでは同じ内容でもレコードには言葉で説明できない大事なものがギュッと詰まっている～」云々とも大きく関係のある話かと思います!やはりカセットテープもアナログ、RAWなナマモノ、デジタル信号なんかで表現しきれない、「アナログ汁」のようなものが確かに存在する事に間違いは無いと、僕も思っています!やはり、自称ファンでありながら、CDだけでしか彼等の音楽に触れていない人が居たら、嘘っぱちだとまでは言わないが、残念な事であると、常々感じている。ユータだって、そうだろう!?僕はthe BLUE HEARTS、ひいてはPUNK ROCKに出会って、いわば同種の生物に突然遭遇したような感じで、最初に怯えはあるが、懐かしさにも似た不思議と心地よい安心感、出会い頭の警戒心は知らずの内に消えさり、まさに「一人じゃないんだなもう」(突然バーン/the Cro-Magnons)状態でより一層、鮮やかに色づく世界でした!まさに180℃人生を変えられた訳だが、不安に支配されていた自分はどれだけ彼等の唄にささえられたことかわからないです。特に「the BLUE HEARTSのテーマ」など、今でも、聴く度に力みなぎる「俺のテーマ」だ!ユータにとって、the BLUE HEARTSとはいったい何だろうか?やはり、彼にとっても単なる「かっこいいROCK BAND」以上の意味のある存在であろうか?彼のフェイバリット・ナンバー等についても織り交ぜ、質問してみたのだが、さて回答はどうだろう?

「救われているかどうかというと、救われてはいない。救われる、というよりも、気づかされる。生活してて、日々の暮らしは大変で、その所為で、忘れてはいけない大事な、大切なことを、いつでも思い起こさせてくれる、みたいな…、もっとこう、必要なものなのに、その存在も意識さえしないような、言わば酸素みたいなもんかな?もちろん毎日摂取しまくってるよ!(笑)」

と、その極悪すぎるルックスとは裏腹な、非常に好感の持てる、7 SECONDSばりに真っ直ぐな答えが返ってきたりする所がやはり可愛くて好きだぜユータ!(笑)あ、なお、好きな曲は?との問いに対する回答は以下のようなものでした。

「これは…、ずっと昔からなんだけども。とにかく、彼等の全てが好きすぎて、どの曲も心の底から大好きすぎて、本当に、いくら考えても、彼等の楽曲に、好きな順番をつける事がどうしてもできない。とりあえず全部好き!」

と、インタヴュアー泣かせな元も子もないANSWERで返してきたが、ユータ君を知るものならご存知の様に、彼は本当に本当にthe BLUE HEARTSが大好き過ぎる、もはや病気レベルな熱狂的ファンであるからして、この回答も道理が通ると言うものです。

そんなユータ君のバンド、SYSTEM FUCKERですが、すでにその活動は名古屋だけに留まらず、今日もまた、どこかの土地で、怒りの炎を燃やしぶち叫んで大暴れしている事でしょう!怒涛に押し寄せる気合の塊のようなそのステージはピリピリと緊張感高く、中には恐怖を感じる人さえ居るかもしれません、しかし、彼等の音源やLIVEからはきっと「少年の唄」が聴こえて来るはずです、または、「生きてる事が大好きで　意味もなく興奮してる」といった感じでしょうか?とにかく、空中分解上等、テンションMAXのオーバーヒート状態でドカスカいわしまくる激怒D-BEAT HARDCORE ATTACKは必見必聴だ!よしよし、ここまで書けば来年5月の僕の誕生日にはきっとマーシーの7"ep盤シングルを送ってくれる筈だと思います、震えて待つ!(笑)

今回、最後となりますが、誕生日と言えば、忘れられない最近の出来事を一つ。EL ZINEに連載を持っていると、毎号、ギャラ分として、数冊もらえます、これが、「こんなの書いてます!」なんて、名刺代わりにも中々嬉しいモンで、僕が一緒に仕事している、PUNK AND DESTROYのサザナミ・カズヒコという男、まぁ僕は親友だと思っているんですが、彼にも毎号、あげていたんですね、当然ですよね♪大事な相棒分ですからね★俺は普段人に誕生日にプレゼントあげたりしないし、自分がもらっても特にお返しなどもしない性質でして、でも、彼とだけは毎年プレゼントしあったりしていたのですが…、今年の5月、「お誕生日おめでとうございます!今年のは凄いですよ、高山さん絶対喜びますよ!」などと彼が俺に手渡したもの、それはそう、いつぞやの号でも書いた、ユータ君がプレゼントしてくれた、「情熱の薔薇」収録の唯一のアナログ盤である「LONDON NIGHT」のComp LPだったのでした!あれ?俺は5月より前に出た当誌連載にて、このLPを入手した事について触れている筈ですし、持ってるものをプレゼントされても…、と言うか、あの野郎、俺の連載、読んでないじゃないですか!?(号泣)普通、読むでしょ?(汗)ああああ～昔はピュアで友達思いの素晴らしい好青年だったのに～!!!!(T_T)先の見えない音楽業界大不況が彼のハートまでを蝕んでしまったようです!外は寒い!外は寒い!!あああああ～!!!(涙)おあとがよろしいようで!という事で、今回はこの辺でサイナラです、皆様、次回までどうかお元気で!「運命なんて自分できめてやる」こんな気分で、また会いましょう、ありがとうございました!!

LASHING SPEED DEMONS VOL.8

TEXT:大越よしはる

はい、コレを書いている時点ではまだ本誌VOL.6が出ていないのですが、山路編集長の欧州放浪はどうだったんでしょうか。さて今回は連載開始当初の方向に戻って、特にテーマを設けずに俺がEL ZINE向けだと思うハードコア以外の音源をざざっと並べていきます。例によって極力今世紀に入ってからのを中心に古いのも多少混ぜつつ、ここしばらくの間に仕入れた新作も何枚か。日本人あり黒人ありジャズあり、相変わらずの何でもアリですが、どうかお付き合いください。

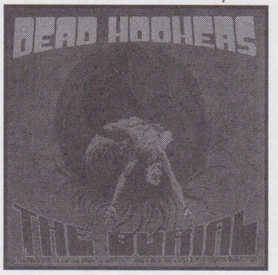
AURAL FIT/II



"東京で一番音がデカい"という大上段なコピーが付いたトリオの2ndアルバム。ストーナー・ロックがノイズ化したような…といってもノイズ系みたいな何かの機材を使ってるワケじゃなくてあくまでもギターとベースとドラムの3人でとにかくやかましい音を出しまくる。期待して観に行ったライヴはあんまり良くなかったんだけど、出来不出来に差があるタイプと見た。また観に行こう。

(PSF PSFD-179)CD 2008年

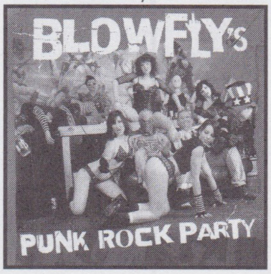
DEAD HOOKERS/ THE BURIAL/THE REBIRTH



ウィスコンシンのサイコティックにしてサイケデリックなハイパーR&Rパンク・バンド。表ジャケットが"THE BURIAL"、裏が"THE REBIRTH"で、コンセプチュアルな大作みたいに見えて12曲29分であっという間にぶっ飛ばす。調べても全然情報のないバンドなんだけど(ジャケット両面をよ〜く見ないと曲名もメンバーもわからない)、とにかくかなりガチャガチャしてイカレた音を出す。

(DEAD BEAT #69)CD 2006年

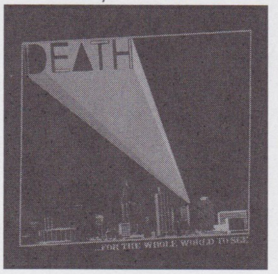
BLOWFLY/BLOWFLY'S PUNK ROCK PARTY



R&B界最強のエロじじい(現在65歳!)ブロウフライが、パンク・ロックの名曲を片っ端から下ネタで替え歌にしてしまったおバカな企画モノ。BLACK FLAGもRAMONESもSTOOGESもGENERATION Xも全部ポルノ・ロックに…。レーベルから想像つく通り、DEAD KENNEDYSも当然料理されていて、しかもわざわざジェロ・ビアフラ御大まで参加しているという…。

(ALTERNATIVE TENTACLES VIRUS367)CD 2006年

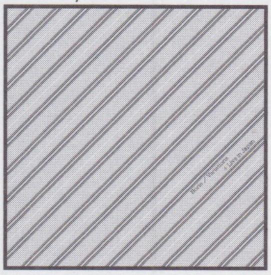
DEATH/…FOR THE WHOLE WORLD TO SEE



昨年各方面で話題になった1枚だから、今更という感じではあるが。時代が時代だけにそのまんまBAD BRAINSとかと比較するのはアレとしても、75年に黒人トリオ(3兄弟)がデトロイトでこんな…。リズムの立ち具合に黒人ならではの部分も感じつつ、このハードなR&Rは時にえらくパンクに響く。思えば初期FUNKADELICも激ロックだったし、やっぱりデトロイトは特別な街だ。

(DRAG CITY DC387)CD 2009年(75年録音)

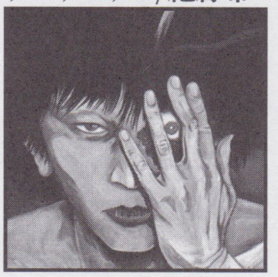
Boris/Variations + Live in Japan



この連載でいつかこのバンドを紹介しようと思ってたんだが、いいタイミングで6月にリリースされたばかりの、ベスト+ライヴDVDの2枚組。パワー・アンビエントとかアヴァンギャルドな側面も持つバンドだけど、このCDはかなりヘヴィ・ロック寄りのレパートリー中心になっていて、本誌読者様にもお勧めしやすいです。その場の空気を歪める圧巻の轟音は、出来ればナマで体験してほしいけど。

(DAYMARE DYMC-125)CD+DVD 2010年

ゲルチュチュ/絶縁帯



本誌VOL.1で紹介したCD-R『瓦解前夜の絶縁帯』から6曲をピックアップして、ミックスし直して、1曲を除きヴォーカルも録り直して、ボーナス・トラックも入れて…という具合で、ゲルチュチュ未体験者はもちろん、CD-R持ってる人も買い直さないといけない出来になってます。リズムはファンキーで重く、ヴォーカルとギターはどこまでも鋭く尖って聴き手の琴線を鷲掴みにする奇形パンク再び。

(蹂躙酒家 No #)CD 2010年

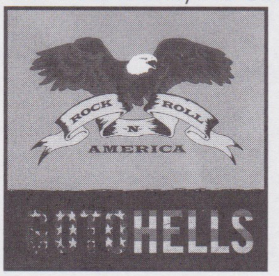
中学生棺桶/矛先についたガム



本誌創刊号で前作を紹介したけど、この6月にリリースされた最新作がコレ。相変わらず"あなた方、ハードコアってのは硬い核じゃないんですか?ビール飲んでセックスしたいだけでバンドやってんですか?"と言わんばかりのファックユーなアティテュードでガンガン迫るヘヴィ・ロック。音がクリアに、演奏がより前面に出て、リフが更にキャッチーに、ある意味で"聴きやすい"サウンドにも。

(DIWPHALANX PX-209)CD 2010年

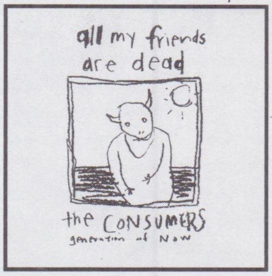
GOTOHELLS/ROCK N ROLL AMERICA



この連載は最初こういうバンドばっかり紹介しようと思って始めたはずだったが、気が付いたら全然違う方向になっていた。ともあれバンド名とアルバム・タイトルからもう内容が想像出来てしまうタイプの、ハイウェイカッ飛ばしタイプの爆走R&R。DEVIL DOGSのスティーヴ・ベイズ(B)が、一時期参加していたらしい。95年デビュー、コレは4thアルバムにして多分最終作。

(VAGRANT VR518)CD 2001年

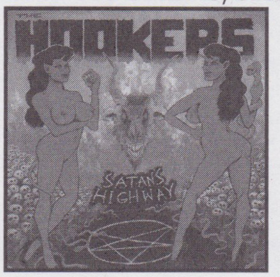
THE CONSUMERS/ALL MY FRIENDS ARE DEAD



45 GRAVEやVOX POPのポール・B・カトラー(G)がそれ以前にアリゾナで結成したバンドなんだが、その後のバンドのゴス風味やアヴァンギャルドさのかけらも見えない、凄まじいスピードとアグレッション。77年にコレですか。唯一、底知れない退廃だけは共通するものがあると思う(アルバムのタイトルからしてもう…)。当時の有名なシリアル・キラー"サムの息子"に捧げた曲も。

(IN THE RED itr029)CD 2002年(77年録音)

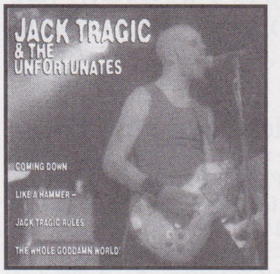
THE HOOKERS/SATAN'S HIGHWAY



ケンタッキー州レキシントンの4人組。上のGOTOHELLS同様、ジャケットとアルバム・タイトルで納得のハイエナジーR&Rバンド。見ての通り(?)GOTOHELLSよりもダーティーで更にハードコアな、ドッカンドッカンぶっ飛ばすリズムで、ANTiSEEN(本誌VOL.1で紹介)とかに近いセンス。こっちも95年デビューだったと思うが、このバンドは今もやってる、はず。

(SCOOCH POOCH P040)CD 1997年

JACK TRAGIC & THE UNFORTUNATES/COMING DOWN LIKE A HAMMER



コネチカット州ニュー・ヘイヴンのスキンヘッド野郎、発掘音源。デビュー・シングルがいきなり「Kill Hippies」って(SPIN MAGAZINEの"トップ100パンク・シングルズ"リストに入ってるんだそうで)。速い曲ばかりではないが、まつろわぬアティテュードと不穏なムードが全体を支配する、80年代米国ローカル・パンクの底力。BEASTIE BOYS(初期の)はこの人たちの前座だったそうだ。

(DIONYSUS BA1185)CD 2003年(83〜89年録音)

ORNETTE COLEMAN/FREE JAZZ



タイトルがすべてを表す。サックス、トランペット、ベース、ドラムを二人ずつそろえて、チャンネルの右と左でせーの、と。日本のバンドではサックスが入ったりフリー・ミュージック的なスタンスもよく見られるし、ハードコアへのフリー・ジャズの影響はけっこうあるように思う。一方で、フリー・ジャズというのが単に「せーの」でめちゃくちゃ演ってるんじゃないことはコレ聴くとわかるような。

(ワーナーミュージック WPCR-75353)CD 1961年

JURASSIC JADE/懺悔の赤〜25 YEARS OF AGGRESSION AND AGONY



本誌創刊号で前作『ENDOPLASM』を紹介したが、この7月7日、待望の新作『AKATHISIA』と同時にリリースされた25年の集大成映像作品がコレ。86年のライヴ(昔の映像もかなりの高画質!)から今年1月のライヴまでみっちり21曲、更に元メンバーや関係者まで続々登場のインタヴューも興味深い、必携の1枚!(行川和彦さんがインタヴューされる側ってのは、なかなか見られないぞ)

(B.T.H. BTH-032)DVD 2010年(86〜10年録画)

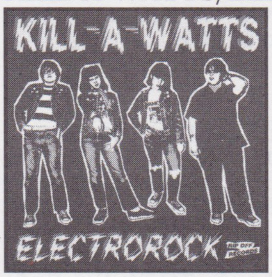
PINK SWORDS/SHUT UP & TAKE IT!



世界の爆走系R&Rバンドの巣窟・GEARHEADから、テキサス州オースティンの5人組、2ndアルバム。全曲速いのばっかりというワケじゃないが、ジャケットどおり非常にダーティーにしてアウトレイジャスな感じのR&Rで、12曲23分でトバす。タトゥーみっちりのヴォーカリストの両脇にゴツいギタリスト二人、そしてベースだけやせっぽちのチビというヴィジュアルも何とも言えん。

(GEARHEAD RPM063)CD 2005年

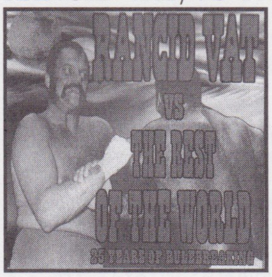
KILL-A-WATTS/ELECTROROCK



今月のRIP OFF RECORDS。ウィスコンシンのキラーなパンク・バンド。RIP OFFのバンドは速いのが多いけど、こりゃまた速い速い。12曲18分であっという間に駆け抜ける、初期衝動全開のトゲトゲしいパンク・ロック。男のメンバーがそろってデブというのがまた何とも(当時何歳?)。コレは1stアルバムで、メンバー脱退を経て05年に3人編成で2ndを出してるけどその後解散。

(RIP OFF #055)CD 2001年

RANCID VAT/VS THE REST OF THE WORLD



ポートランドが生んだ異形の腐れハードコアR&R軍団、05年までの25年の歴史を刻んだ2枚組。本誌VOL.1で紹介したANTiSEENとの関係も深く(こっちのがキャリア長い)、サウンドもANTiSEEN同様、プロレスとアルコールとトラッシュR&Rの流血曼荼羅世界が展開。ハンク・ウィリアムズからデイヴィッド・ボウイ(!)までメタメタに解体するカヴァーのセンスも実に素晴らしい。

(STEEL CAGE SCR-050)2CD 2005年(81〜04年録音)

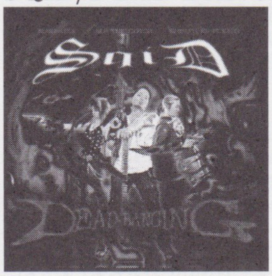
LARD/THE LAST TEMPTATION OF RAID



DEAD KENNEDYSあるいはアメリカン・ハードコアのファンで、ジェロ・ビアフラが80年代末に始めた合体プロジェクトの数々を全部聴いてるような人はどれくらいいるんだろう。コレはその第1弾アルバム(その前にEPあり)で、いきなりMINISTRYと合体してインダストリアル・スラッシュの極致に突入した激烈作。速い、重い、うるさい、そして歌詞もヤバい。20年後の今も古びない。

(ALTERNATIVE TENTACLES VIRUS84)CD 1990年

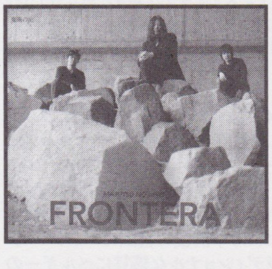
SQID/DEAD-BANGING



都内のトリオ、今まで全然知らなかったが、結成10年にして初のアルバム。ALMIGHTYやTANKなんかのエッセンスを感じさせる、疾走型メタリックR&R。そう、スラッシュっぽく突っ走りつつも、あくまでR&Rなのがよいところだと思う。"Dead"という言葉がひとつのキーワードなのか、なんだか同じような曲名が並んでいるが(笑)、楽曲の方はヴァラエティ十分。一度ナマで観てみたい。

(B.T.H. BTH-034)CD 2010年

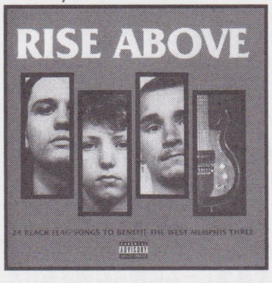
魔術の庭/FRONTERA



91年以来活動を続けてきたOVERHANG PARTYから、08年このバンド名に移行。コレは今のところ最新作となる2ndアルバム。本誌VOL.0で紹介したHIGH RISEに近いともいえる、轟音のギターと太いベースと重いドラムに極めてデリケートなヴォーカル、というサイケデリックなR&Rで、帯に"真のハードロック"とあるように、浮遊感もありつつ言葉通りのハードなロック。

(there MUSIK ATLACH TRDC-MA005)CD 2009年

V.A./RISE ABOVE



かの"ウエスト・メンフィス・スリー"(については各自調べてね)に対するベネフィットとして企画されたオムニバス。イギー・ポップやコリー・テイラーやマイク・パットンやトム・アラヤやレミーやらの凄い顔ぶれがBLACK FLAGナンバーを歌いまくる、企画意図抜きにBLACK FLAGトリビュート盤としてもとても出来がいい1作。もちろんヘンリー・ロリンズ本人も随所で登場。

(SANCTUARY SANCD125)CD 2002年

…今回こそ疾走系アメリカンR&Rみたいなのばっかりにしてやろうかとか思っていたのだけど、書き上がってみるとやっぱりそうはならない。個人的には最近メタルを聴いてることがわりと多くて、特にここしばらくはBURZUM新作をきっかけにブラック・メタルばっかり聴いているんだが、精神衛生上非常によろしくないですねブラック・メタル。ブラックじゃないけど、この号が出る頃にはイタリアのBULLDOZER来日だなあ。

KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

例によってほぼすべてが現行のバンドで、本誌の趣旨にのっとってパンク・ロックとハードコア・パンクがメイン。リイシュー・レコードを含めてほとんどが2010年に発売されたものだが、一部2009年リリースだ。本誌を売っている一部のパンク/ハードコアの専門店でしか買えないレコードも多いが、書いている時点でソールドアウトが確認できた作品は外してあるし、すべて国内のお店でも入手可能だからチャレンジしてみていただきたい。

BROKEN BONES/Fuck You And All You Stand For!



DISCHARGEのギタリストのボーンズが率いてその現ドラマーも在籍するバンドの新作。前作を出してからの6年の間に再び活動が本格化したDISCHARGEの名が背負う重さから解き放たれ、ある意味リラックスした風情がこのバンドならではだ。よりギター刻みまくりで、ジャケットのセンスも含めてメタルとのクロスオーヴァーと"UK82スタイル"の素朴なハードコア・パンクの融合が楽しめる。

(DEM BONES RECORDINGS DEM BONES 1)CD

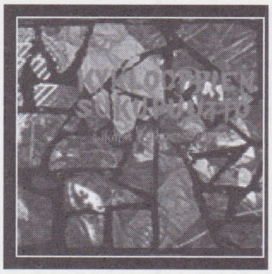
HARD-ONS/Alfalfa Males Once Summer Is Done Conform Or Die



結成25年を越えるオーストラリアのトリオの3年ぶりの新作。RAMONES以上に不変だが、雑種のロックンロール・パンクに磨きをかけてフレッシュにキープしているところがホント凄い。野獣のハードコア/スラッシュ・チューン連発などの激しいやつの一方でメロウな曲もナチュラル・ブレンドし、ブルースの感電みたいにフリーキーでありながらハーモニーも聴かせるプリミティヴな芸風。肝に響く。

(BOSS TUNEAGE BTRC052)CD

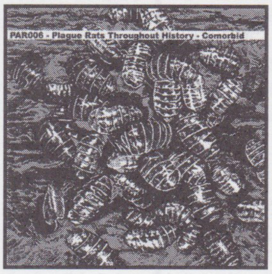
KYKLOOPPIEN SUKUPUUTTO/Likana Valikoimassanne



フィンランドの奇天烈バンドの5曲入り。スカンジ・スタイルとは一味違うアウトローぶりを発揮して素晴らしい。ハードコア・パンクの45回転のA面はつんのめった暴走に唖然とするばかりで、とめどなきエナジーの放出がハンパじゃない。スロー〜ミッド・テンポで33回転のB面は初期NEUROSISをさらに重く熾烈にした如き長尺だ。喉全開で叫び歌う詞の英訳付でシルクスクリーン・ジャケット。

(PRIMITIVE AIR-RAID 007)12"EP

PLAGUE RATS THROUGHOUT HISTORY/Comorbid



カナダ産デュオのデビュー・レコード。7"盤に12曲も詰め込み、ギターもベースもドラムもシンセサイザーが製造しているらしきミュータント・サウンドが浮遊しながら飛ぶ。CONFLICTとDEAD KENNEDYSのまぐわいにWIREが水を差したみたいなヴォーカルも、気弱なアジテーションで屹立する。ゾウリムシがうにょうにょ乱交プレイしている立体的な印刷のジャケットもふさわしい不気味な怪作。

(PRIMITIVE AIR-RAID PAR006)7"EP

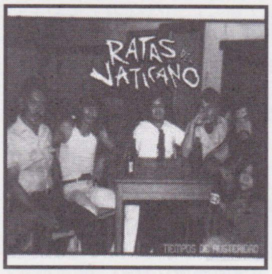
JAIL BIRD Y/Jail Bird Y



元A PIECE OF SHITのAnn(vo)らによる広島産の約45分11曲入りのファースト。ノイズ・オルタナティヴ・ロックとゴシック/ポスト・パンクをハードコアのフィルターを通してカマしたような"歪み"のパンクだ。いい意味で原爆ドームに頼らぬ突き抜けた表現はファンキーですらあり、ブルースもダブも飲んで奇形児のヤスが酩酊したみたいに滅裂な詞を歌うヴォーカルも果敢な攻めの姿勢がアッパレ。

(男道 DAN-DOH 089)CD

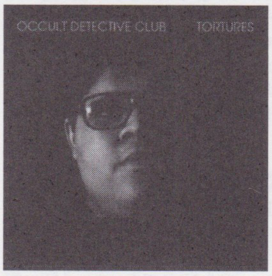
RATAS DEL VATICANO/Tiempos De Austeridad



メキシコの"フリークアウト"バンドのセカンドLP。原始の心意気そのままで、ふてぶてしくもファンキーだがハードコアが息づく不穏なパンク・ロックが図太く迫る。ノイジーにせずともド迫力で、やんちゃ極まりない音に神経が麻痺していき、男性メインで時折女性が歌うヴォーカルは眼が据わっていて怖い。片面14曲入り+片面はエッチング・アートで、表裏共に怪しげなジャケも強烈なのだ。

(HBSP-2X 016)LP

OCCULT DETECTIVE CLUB/Tortures



米国の4人組のファースト。RAMONESとWIPERSの流れを感じるポップ・パンク・ロックで、同じテキサスのHEX DISPENSERSのように心の溝をくすぐる切ないセンスも息づくが、メンバー全員男性ゆえかもっと愚直にメロディック道を疾走する。歌詞もひっくるめて馬鹿に成りきれぬヘタレ感がジャケも含めて愛おしく、"sad punk"と言ってもいいだろう。LPは二つ折りジャケットで、CDも発売。

(RED LOUNGE RLR071)LP

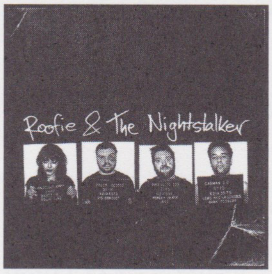
SOUTHSIDE STRANGLERS/Strangle You



GOVERNMENT WARNINGのドラマーのブランドンがギターを弾きそのヴォーカルも在籍する、米国東海岸リッチモンドのバンドのセカンド・シングル。初期DEAD BOYSにハードコアのダシを効かせたようなキャッチーで熾烈なパンク・ロック・サウンドにまたまたやられる。クールなバンド名と同様にサウンドもセンス抜群で、まさにソニックなリフの電撃で計5分弱。何度も針を落としたくなる一枚だ。

(FASHIONABLE IDIOT FIR038)7"

ROOFIE & THE NIGHTSTALKER/G.H.B.



女性ヴォーカルがフロントに立つサンフランシスコ産のデビュー・シングル。これまたバンド名にふさわしく怪しげでクールかつ危険な音像のパンク・ロックで昇天する。全楽器が音作りもリズムもセンスもいいBLACK FLAGみたいにヘヴィな音を従え、レーベル名にふさわしい歌声でCRASSのイヴみたいに語尾を上げるヴォーカルのサディスティックな責め。計4分15秒の2曲に懸けた情熱に痺れる。

(RICH BITCH 011)7"

PERSONANGREPP/Fuck You Very Much



タイトルも最高な女性ヴォーカル擁するスウェーデンのトリオ。DAMNEDの「Stab Your Back」のカヴァーも含めて母国語を基本に英語もちりばめた歌詞が象徴するように、80年前後の自国のパンク・バンドのトラディショナルな感覚にベルギーのKIDSや米国のLEWDのポップな荒さを加えたかの如き、メロディもリズムもユニークな背筋がとろけるパンク・ロックだ。歌唱も思い切りよくてグレイト！

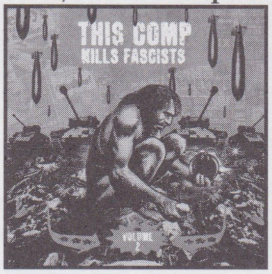
(D.M.C 003)7"EP

KALASHNIKOV/Living In A Psycho - Caos Era



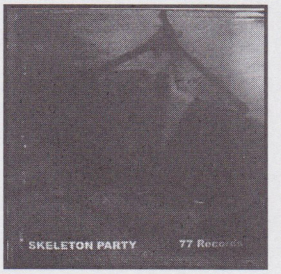
本誌Vol.3の表紙を飾ったイタリアのバンドの新作。カンツォーネも噛ませたような歌謡性(≒大衆性)十分で、女性の歌唱もアレンジも一般層にアピールするメロディアスなパンク・ロックだが、まさに筋金入りで深い。美しいトゲに研ぎ澄まし、CRASS系バンドのMOBも静謐にカヴァー。母国語で綴る80ページのブックレット綴じ込みの特殊紙ジャケも約47分11曲入りのCDも堂々たるボリュームだ。
(DIY PRODUCTION　No Number)CD

V.A./This Comp Kills Fascists Volume 2



PIG DESTROYER/AGORAPHOBIC NOSEBLEEDのスコット・ハルのプロデュースによる、パワー・ヴァイオレンス/ファスト・コア/グラインド・コアのコンピ。難聴になるほどこの系統を聴きまくってもなおまだ可能性を感じさせる19組74曲入りで、特に新鋭勢にホント目が覚める。一つの作品として制作者の意思も込められ、20ページのブックレットに加えて日本仕様盤は5バンドの歌詞の和訳付だ。
(RELAPSE JAPAN　YSCY-1181)CD

RELIGIOUS SS DISORDER/SKELETON PARTY/Split



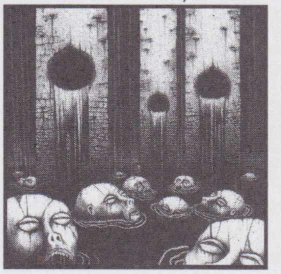
米国ミシガン州のバンド同士。R.S.S.D.はこの3月の解散が惜しまれる女性ヴォーカルを含む5人組だ。ハードコア以降の熱さ重さを内包した気骨十分のパンク・ロックだが、CRUCIFUCKSにも泣ける。SKELETON～はキーボードやスライド・ギターも挿入したBIG　BLACK的パンクが空気読まず飛ばし、ブルース・スプリングスティーンのカヴァーまで犯る。既成の作品を裏返したリサイクル・ジャケット。
(PUNKS BEFORE PROFITS/77　pbp47/77r02)LP

INNUMERABLE FORMS/Dark Worship



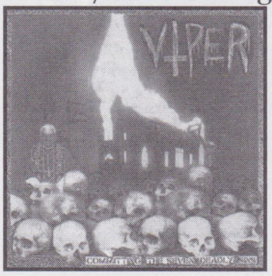
ボストンのMIND　ERASERのメンバーであるジャスティン・デトアのソロ・ユニットのデビュー作。全パートを一人で演奏し、スウェーデンの初期デス・メタルにBOLT THROWERのスロー・パートを突っ込んだ如き音を展開する。とはいえWORLD BURNS TO DEATHのジャックがマスタリングを手がけたことが象徴するようにハードコアの痛みを露呈しているのだ。45回転でも33回転でも楽しめる。
(HELL MASSACRE　HMHM-0017)7"EP

TRAP THEM/Filth Rations



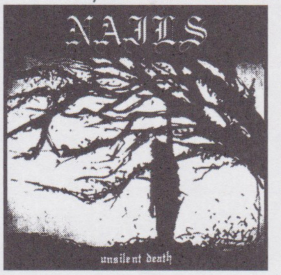
米国東海岸ニューハンプシャー出身のハードコア・パンク進化形バンドの片面5曲入り。今回も録音して一曲グロッケンシュピール(≒鉄筋)も演奏したカート・バルー在籍の、CONVERGEもここ数年影響を受けてそうな音だが、現在の彼らを凌駕する瞬発力と突進力に圧倒され、長めのスロー・ナンバーに息を呑む。片面がエッチング・アートで、音だけでなくジャケも含めて物理的にも重み十分の逸物だ。
(SOUTHERN LORD　LORD 115)12"EP

VIPER/Committing The Seven Deadly Sins



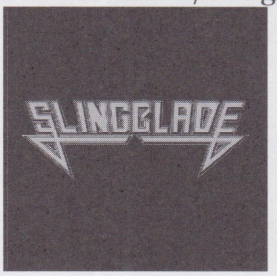
こちらもMIND　ERASERのメンバーによるユニット。2009年のデモのレコード化だが、ジャケットの紙質も含めて84年頃のZOUOやMOBSらの日本のメタリック・ハードコアに、HELLHAMMERの毒を盛り込んで陰鬱になった如しだ。極悪非道なヘヴィ暴風サウンドのすべてにドスが効き、アートワークも彫りが深く素晴らしい。テキサスのパンク・イベント"CHAOS　IN TEJAS"主催者のレーベル発だ。
(540　No Number)7"EP

NAILS/Unsilent Death



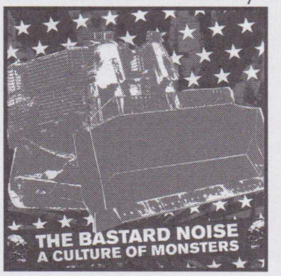
元TERRORのトッド・ジョーンズ(vo、g)率いる米国産だが、SICK OF IT ALL的なニューヨーク・ハードコアとは一線を画す。12"EPに続いてリリースしたこの約14分10曲入りは、録音とミックスがCONVERGEのカート・バルーということで最近のDISFEARなノリの作りだが、ENTOMBEDがクラストがかったような疾走感にやられる。米国盤にしては繊細な作りの二つ折り紙ジャケットも良し。
(SIX FEET UNDER/STREETCLEANER　SFU40/SC004)CD

SLINGBLADE/Slingblade



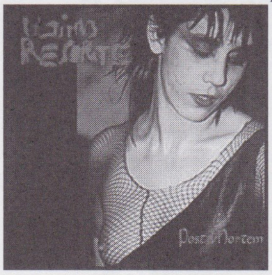
本誌Vol.2の表紙を飾ったSONIC RITUALのギタリストLinneaもメンバー、ということで紹介するスウェーデンの5人組のデビュー・シングル。他の演奏陣は男性で、性転換して女性になったというシンガーが伸びやかに英語の詞を歌い、"JUDAS PRIEST meets AC/DC"なミッド・テンポのピュア・ヘヴィ・メタルを展開する。侘び寂びの効いたロックを体が求める諸兄は是非。日本の同名バンドに注意。
(HIGH ROLLER　7 HRR 136)7"

BASTARD NOISE/A Culture Of Monsters



前身バンドのMAN IS THE BASTARDのコーネル＋ネルソン＋ウッド＋αでの新作。ENDLESS BLOCKADEとのスプリット盤以上にMAN　IS～を深化させ、強靭なバンド演奏メインに押していく。屈曲しながらうねる悶絶ウルトラ・ヘヴィ・サウンドと、苛烈な掛け合いに加えてハーモニーも挟むヴォイスで攻め、長い曲が増し凄み五割増しでカッコいい。静謐パートも含めて惚れ直した。二つ折紙ジャケット。
(DEEP SIX/HEAR MORE!/HOUSEPIG DSR-133/HM!-11/HP-027)CD

ULTIMO RESORTE/Post Mortem



女性ヴォーカルを擁したスペインのパンク・バンドの81年のデモをまとめたLPの再発盤。この後に作ったEPやLPよりもプリミティヴで素敵である。スージー・スーやPILのバッチを付けた彼女の音楽趣味を"UK82"なファッションの演奏陣がキャッチーに押し切ったような支離滅裂具合が最高のパンク・ロックなのだ。モノクロ写真満載の24ページの大型ブックレットも豪華な22曲入り。グレイト！
(RADIKAL 1977　RK018)LP

＜追伸＞　"定番"とも言われる昔のパンク・ロックやハードコア・パンクを聴く機会が最近多く、さらにリリースされたばかりの現在進行形のパンク・ロックやハードコア・パンクを聴き、30年以上の歴史の長さに感慨深くもなる昨今。2010年も世界中からエキサイティングなバンドが出てきて勇気づけられる。グレイトなレコードやCDを埋もれさせずに紹介したい気持ちがますます強まっている昨今。CDを否定はしていないが、特にLPや7"などのレコードの作品は最近、合理主義的なダウンロードへの反逆の如くジャケットなどの表現への気合が増している。パンク云々以前に音楽や作品に対する愛情や情熱の深さが手にとっただけでも伝わってくるのだ。

前号のあらすじ。日々の生活に疲れたのでなんとなくチェコに遊びに行ったら不法侵入で警察呼ばれたり、道に迷って泣いたり、ライヴに行って酔っぱらったりしていました。これからベルリンに行くところです。…要約するとこんだけです。

Disappearance From Reality

弊誌発行人の愉快な独り旅:ベルリン編　これは珍道中ではない!　レポートだ!!



←街のランドマーク、ベルリン・タワー

チェコ第二の都市ブルノから7時間以上、新幹線風の特急電車に揺られ辿り着いたのはベルリン中央駅。当然のように構内で迷子になりながら、インフォメーションでオストバーンホフ(目星をつけていた宿がある駅)への行き方を訊ねると「15番ホームへ行け」とのこと。言われた通り15番ホームに行くと電車が双方向に2本走っています。こっちだ!と直感に任せて乗り込むと、案の定、僕が乗ったのはオストバーンホフとは逆方向だったようで、終点のポツダムまで行ってしまいました。都内の中央線で例えるなら、高円寺から吉祥寺に行くところを東京駅まで行ってしまったようなものです。しかし、この程度なら最早僕にとってはトラブルでもなんでもありません(前号参照)!

オストバーンホフ駅に着き、歩くこと10分ほどで目指すホステルに到着。10人での相部屋で一泊約1500円。ベッドの空きを訊ねると、無事ありました!よし、今のところ順調だ!

ここに目をつけたのは、KØPIスクワットが近所にある、という理由からでした。ヨーロッパをツアーするハードコア/パンク・バンドの多くが立ち寄る、日本のバンドのツアー・レポートなんかでもお馴染みのスクワットです。

この日は長時間の移動で疲れていたのでとっとと就寝し翌日。ライヴのない昼間の時間帯は何一つやることがないので、歩いてレコード屋巡りです。まずはYELLOW DOG RECORDSへ。ここはPISSCHRISTやUNIT 21などもリリースしているレーベルが経営しているお店。中に入ると坊主頭のアンちゃん(Mario)が、「お、日本人か?俺の今日のTシャツはGLOOMだぜ」と着ていたパーカーを捲っていきなり得意そうな表情。色々とレコードもかけてくれて雑談します。
Mario「どこ行ってきたの?」僕「チェコ。DISCHARGE見たよ」M「あー、DISCHARGEね。90年代に見たけどメタルでクソだったよ。ライヴどうだった?」僕「客が少なくて驚いた。日本だと物凄い数が入るんだけど」M「ま、金のためのバンドだからな、ハハハ」僕「ベルリンじゃKØPIも行くけど、EXPLOITEDのショーもあるよね」M「KØPIに行くようなパンクスはEXPLOITEDなんか行かないよ」僕「どうして?」M「年寄りバンドはいいんだよ、若いバンドを見たいからさ」と、大体こんな感じ。どうもビッグ・ネームには辛辣です。店内を物色して何枚か7"を買います。CDも少しだけありますが、もう隅っこに追いやられており、やっぱりアナログが主軸なんだな〜と実感。

KØPIのスケジュールが記載されたポスターも貼られていたので、帰り際に「明日KØPIに行くんだけど、21UHRって、"21時スタート"って意味だよね?」と確認します。「そうだけど、21時には始まらないな。22時に行った方がいい」とのこと。ん、どういうことだろう?尚、後日談として、YELLOW DOG RECORDSのある通りは結構なオシャレ・スポットらしく家賃が高騰。YELLOW DOGは大家から立ち退きを命じられていたのでした。新しい場所を探し、移転するようです。

続いてはそこからほど近くにあるBIS AUFS MESSERへ。YELLOW DOGはハードコア・パンク一直線な品揃えでしたが、こちらは幅広い。ハードコアはもちろん、ガレージにストーナーにノイズ、インディー・ロックと、広々とした店内はジャンル毎にキチンと整頓されていました。ここでも少しお買い物。更にもう一軒、STATIC SHOCK RECORDSへ。ここは中古盤が豊富です。MASSHYSTERIの1stアルバムのブラジル盤が3000円弱。日本なら即買いですが、LPは荷物になるので見送ります…。この店には"SECOND HAND JAPANESE HC"なんてコーナーもありましたが手間や送料のせいか、日本の相場より押し並べて高値でした。

さて、慎重を期す、というこれまで欠如していた行動倫理をチェコで学習した僕は、この後、KØPIへと向かいます。明日のための事前調査です。オストバーンホフ駅へと戻り、宿泊先のある方角とは逆、南へと進みます。大きな橋を渡り、右手にそれっぽい建物が見えてきました。スクワット=不法占拠=落書きまみれの廃墟、というイメージそのままに、知らなければ絶対に近寄りたくない雰囲気。ただ、KØPI以外にもスクワットらしき建物はちょこちょこ見かけましたし、宿でもらった観光パンフレットには、"ALTERNATIVE CITY TOUR/ストリートの落書き見物&スクワットでパンク体験"なんてものまで記載されていました。

そうして明夜。Marioの助言を無視して21時丁度にKØPI到着。几帳面な日本人です。ゲートをくぐって真正面が300人くらい(?)入りそうな広いライヴ・スペースのAGH。右手はバーで、内部でAGHと繋がっています。左手の地下がKOMA-Fでこちらは100人程度のライヴ・スペース。今夜は、WRATHCOBRAとMASAKARIというアメリカの2バンドによるライヴで会場はAGH。敷地内ではパンクス、やはりクラストっぽい人が多い、が座り込んだり寝転んだり、思い思いの体勢で呑んだくれています。デカイ犬もいます。物騒だよ〜、怖いよ〜、というわけで、慣れた風を装ってAGHに入ります。お金を払う受付もなかったので無料なのでしょうか。人もまばらで、しかもバンド・メンバーっぽい人らはまだ機材を搬入している段階。バーに行ってビールを注文すると、「どのビール?」と聞かれます。ビールだけでも色々とあるようです。一番安いので、と頼むと1ユーロ(100円ちょい)で大瓶が出てきました。バーではみんな楽しそうにワイワイやっていますが、僕はAGHの隅っこで独り寂しく呑みます。これは…、まるで日本にいる時と同じ孤独感…。

相変わらずメンバーはのんびりセッティング中です。ステージ前では、60歳はとうに過ぎているであろう老パンクス2人組が大騒ぎしています。目が合うとこちらに来て、"カンパ〜イ"とビールを呑ませてくれました。こいつらKØPIの長老か!?とも思いましたが、見かけたのはこの日だけでした。

23時、WRATHCOBRAがステージに立

YELLOW DOG RECORDS



BIS AUFS MESSER



STATIC SHOCK RECORDS



ち、ライヴ・スタート!しかし客は5人。思わず老パンクスに「なんでこんなに人が少ないの!?」と訊ねます。「ハハハ、それはまだリハーサルだからさ〜」。まだリハかよ!確かに1曲だけやって引っ込んでしまいました。

ここで「Kenji?」と声をかけてくる女性が。ベルリンに住んでいるポーランド人、Kaskaです。バンドのジャケットを描いたり、ベーガン/ベジタリアン・カフェで働いていて、出国前に何度かメールのやりとりをしていたのでした。Flo(今号インタヴュー参照)曰く、彼女は"ベルリンのBest Punk Woman Gang"だそうです(笑)。初対面でこんにちは!刺青たくさんに鼻ピアスで、滅茶苦茶よく喋ります。日本のバンドはZENI GEVAが好きとのこと。

そんなこんなで23時30分頃、ようやくライヴが始まりました。WRATHCOBRAは物



WRATHCOBRA

凄く単純に表すとTRAGEDYとDISFEARの間の子。その2バンドほど流石に完成度は高くないですが、格好良いダークネス・ハードコアです。MASAKARIは、バンド名+SUGIさんがジャケットを描いている+メンバーがPAINTBOXのTシャツ着用で音は想像出来そうなものですが、これが意外!エモです!何かをやり過ぎてエモになってます。Voがステージを降りて客を煽りますが、反応はイマイチ。結局、客も30〜40人くらいでしょうか。Kaskaに「いつもこのくらいの入りなの?」と聞くと、「私たちはアメリカ人が嫌いなのよ!ハハハ!」とポリッシュ・ジョークで返されました。1時過ぎに終わり、くたくたになって歩いて宿に戻ります。

翌日はお昼過ぎにKaskaが働いているMORGENROT CAFEまで90分ほどかけて徒歩で行ってみました。ベルリンは歩道が広く、至る所にベンチがあるので長時間歩いても苦になりません。路上喫煙もし放題です。

MORGENROTはバイキング形式になっており、様々な種類の料理が並んでいます。ベーガン/ベジタリアンとは無縁の生活を送ってきましたが、ここの料理は凄く美味しいです。コクのあるレバーみたいなペーストや、豆腐料理。お米っぽくアレンジされたパスタに、色とりどりのフルーツに野菜にヨーグルトにと、体に良いものを摂取して生き返った気がしました。ヨーロッパのパンクスは菜食が多いですが、こんなに旨けりゃ僕でも菜食になれます。何せベルリンに来てからというもの、スーパーで最も安い瓶詰めのソーセージ(6本入り/100円くらい/まずい)と一袋6個入りのパン(50円くらい/とてもまずい)を買って、貧相なホットドッグを作って食べてばかりいたので…。

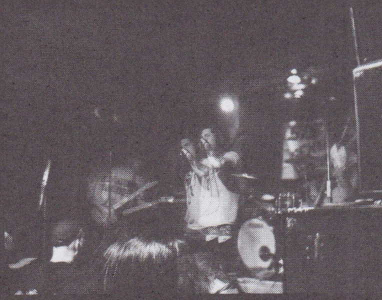
お腹も満たされ、再び歩いて宿に戻ります。今日のKØPIは22時スタートの予定。何時に行けば丁度良いのか判断しかねて、23時に着いてみましたがやっぱり始まっていません…。

AGHの入り口にはちゃんとスタッフが座っていて、今夜は入場料4.5ユーロを払います。多分、昨日もお金を払わないといけなかったのに、受付が用意される前に入場したっぽいです。また無銭入場してしまった…。この日はドイツのBRAIN DEADが一番



BRAIN DEAD

手。パンク・ロックを軸にスカコアっぽいこともやってて面白い。二番手もドイツでORÄNG ÄTÄNG。方向性を定めない方向性なのか、なんとも形容し難いハードコア。トリは来日経験もあるスウェーデンのSISTA SEKUNDEN。ここにきてお客さんも一気に増えて



SISTA SEKUNDEN

(と言っても60人ほど)、矢継ぎ早に繰り出されるキャッチー&スラッシーなハードコアで盛り上がります。



AGH



KOMA-F

KØPI



SO 36



SCHARNI 38



終了後はバー・スペースでKaskaやその友達、スキンヘッド頭のパンクスGoranらと呑みます。またチェコで見たライヴの話しをすると、「SKITSYSTEMってまだやってたの?大きいフェスにしか出ないバンドでしょ」やら、やっぱり手厳しい(汗)。日本のバンドに対しても「どのバンドも好きだぜ!」なんてお世辞は言わずに、「あのバンドのライヴは良かったけど、あれは駄目だった」と包み隠さずハッキリ意見を言います。白いお粉を鼻から吸引する"フリ"をする、お調子者がいたりと楽しい夜は更けていきます。

別の日のAGHでは、スウェーデンのANGER BURNINGとASSNATIONなんかも見ました。うん!どっちもD-BEAT!前者がちょっとノイジー、後者はちょっとブラスト入り。音源だとまた違ってくるのでしょうが、音の荒いライヴだと、殆ど同じに聴こえます…。その日はライヴが始まる前、旅行で来ているっぽいカップルに、「ねぇ、スウェーデンから来たの?」と話しかけられました。あの一、どこからどう見てもアジア人ですが…。不思議そうな顔をしていると、「だってAVSKUMのパッチつけているから」と。なんて判断の仕方だ!更に、「一体何時からライヴは始まるの?」と聞かれますが、それはこっちが知りたいです。「KØPIのパンクスはレイジーなんだよ」とうっかり酷いことを言ってしまいました。ごめんなさい…。

他に見たライヴも全部ハードコアで正直、ちょっと食傷してきました。しかし、このタイミングで実に良いライヴが!カナダのVICIOUS CYCLEとオランダのUNION TOWN at KOMA-F(KØPIの小さい会場)!どちらも燻し銀のパンク・ロックで、激音に疲れた耳に優しそうです。24時前に到着すると、丁度VICIOUS CYCLEが始めたところ。いいぞ、遂にKØPIのタイミングが掴めてきた!VICIOUS CYCLEはNO HOPE FOR THE KIDSやVICIOUSといった、K-TOWN〜UMEAのパンク・ロック勢にも通じるスピードに頼らない湿った音作り。サーフっぽいノリもあり。決してワーワー盛り上がる音ではないですが、プロフェッショナルな演奏をじっくり聴かせてくれました。次はUNION TOWNです!しかし、待っても待っても始まらないし、人はどんどん減っていく。まさか…、と思い人に聞くと「UNION TOWNは最初に出て終わったよ」と。しまった!今度は来るのが遅すぎた…。

KØPI以外だと、SO36 CLUBという川崎クラブ・チッタみたいなちゃんとしたミュージック・クラブへも行きました。そう、EXPLOITEDです。そしてなんと、そのライヴには日本のCOBRAも出るのです!ベルリンでCOBRA、これは貴重な体験です(笑)。入場料は



ANGER BURNING



ASSNATION

16ユーロとKØPI平均価格の4倍ですが、整備された綺麗な会場ですから、こんなものなのでしょう。客層も全く違います。クラストっぽい人は皆無で、スパイキー・ヘアに鋲ジャンな人が3割、普通の格好の人が7割くらい。TOM&BOOT BOYS、DISCOCKS、DISCLAPTIESをペイントした鋲ジャンを着た、20歳くらいの男の子がお父さんと一緒に来ていたり、ティーンエイジャー4人組がマリファナ回し吸いしていたりと、KØPIと比べてヤングで健全な雰囲気です(笑)。

そんなんでCOBRAからスタート。一発目は"TOKYO RIOT"だったはず。TOM&BOOT BOYS鋲ジャンくんは案の定、最前線で暴れています。次いでは、アメリカのAL AND THE BLACK CATS。ロカビリー+メロコアみ



AL AND THE BLACK CATS

たいな感じでしょうか。ウッドベース振り回したり、ギターも動きまくってて見せ方がうまいな〜。多分、有名なバンドだと思います。そして、EXPLOITED!って、DISCHARGE



EXPLOITED



SEX AND VIOLENCEやりゃ盛り上がるだろ、みたいな

同様、特に思い入れはないので普通に見ていました。"LET'S START A WAR"で始まって、往年の名曲で押していきます。流石に一番の盛り上がり。一旦終わって、Wattie以外のメンバーがステージに出てくると、お客さんやらをどんどんステージにあげて"SEX AND VIOLENCE"の大合唱。多分、いつもこのパターンなんだろうな、という熟れた進行です。Wattieもステージに戻ってきて、もう2、3曲やって終了。ライヴ中は盛り上がり過ぎて、2メートル級の大男同士の喧嘩が勃発。近くにいた僕は巻き添えで軽く吹っ飛ばされます。でかいんだから混んでいる会場で暴れるのは止めて!やっぱり僕は不健康なKØPIのほうが性に合っています…。

SCHARNI 38という会場(多分、スクワット?)でオーストリアのMARADONAとフィンランドのRAKKAUSによるライヴがあるというので、そこにも行ってみました。22時スタート予定なので23時に到着してみます。ここは宿から歩いて20分くらい。建物の階段をあがると左手に小さなレコード屋も併設されてます。中をのぞくと先日KØPIであったばかりのWRATHCOBRAとMASAKARIのライヴを収録したテープが売られていました(ブート?)。テープと言えば、BAD RELIGIONとTRAGEDYのライヴ・テープは行く先々で目撃(きっとブート)。

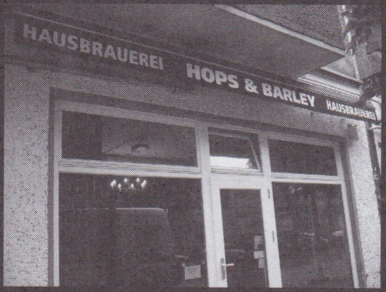
入り口はレコード屋の逆側にあり、4ユーロ払って入場。バー・スペースにはソファが沢山並べられてちょっとオシャレ。でもどこでライヴをやるんだろう?とキョロキョロしていると、地下へと続く階段が奥にありました。そっちにも広いバー・スペースがあるのですが、肝心のライヴをやるステージとフロアは凄く狭いです。ライヴは12時過ぎにスタート。もう遅いのには慣れました(泣)。MARADONAはRUIDOSA INMUNDICIAのヴォーカルCaroがギターを弾いているバンドです。MARADONAというバンド名なので、ステージにはサッカー選手マラドーナのユニフォームが吊るされてありました(笑)。ヴォーカルはドレッド・ヘアの大柄な男性、ベーシストも女性で、まぁ、普通のクラスト・コアでしょうか。そんなにはガツンときませんでした、残念。次いでRAKKAUS。これが想像以上の格好良さです。女性ヴォーカルによるストレートなロウ・スカンジ・ハードコア・パンクで、メンバーも若いのか元気一杯なステージング。スウェーデンのNODSLAKTを僕は連想しました。

そのライヴの明くる日は、僕にとってはビッグ・イベント!ポーランドのTHE FIGHT(Vol.5参照)のライヴです!会場はMORGENROT CAFEの地下。Kaska曰く、「KØPIは古いから音が悪いけど、ここは凄く良い音響よ」とのこと。店内も店頭もどこから湧いて出てくるのかパンクスだらけ。この日は5ユーロでした。GoranがDJをやっていて、デンマークのNIGHT FEVERをかけてて気分が盛り上がってきます!

トップは地元のA BIT OF BRAINDEAD。瞬発力抜群のファストコアで硬質なベースの音もクールです。ヴォーカルはTHE (INTERNATIONAL) NOISE CONSPIRACY、AC4などのDennisに顔がちょっと似ています。そして確かにここは音が良い。それに疲れたらカフェで飲み食い出来るしテーブル、イスも沢山あるのでライヴを見るには理想的な環境です。そしてお待ちかねのTHE FIGHT!素晴らしい、完璧です。ステージから降りて歌う小柄な女性ヴォーカルも勇ましく、男性ギター2人と女性ベースによるそれぞれの声質を活かしたコーラスも、タイトなドラムもバッチリ。LPからの曲をメインにやっていて大満足でした。しかし、驚きだったのが最後に登場したVITAMIN X。ドラムはTHE FIGHTでも叩いているWolfiで、連戦なので大丈夫かと心配しましたが、いやいや、疲れ知らず、と言うかますますシャープなドラミングです。もう異様な盛り上がりで、モッシュサークル〜ダイブの嵐〜モッシュサークルとエンドレスに観客が暴れまくっています。ヴォーカルはゴムボートや浮き輪をフロアに投げ込んで、自分も飛び込んで、ひっちゃかめっちゃか。こんなに人気があるんだ!とビックリしながらも、その人気に納得出来るステージです。何度もアンコールを繰り返し、速くて短い曲ばかりなのに1時間半くらい(!!)プレイして、果ては店に音を止められても、Hey Ho Let's Go! Hey Ho Let's Go!と合唱しながらオーディエンスはアンコールを要求。本当なんなんでしょう、この盛り上がりは?出演バンド全てがグレートと言える見事な企画でした。ホステルに戻ったのは朝5時頃でしたが、いやー、心地よい疲れです。

別の日には、2007年のBURIALの来日ツアーに同行していたStachelとも再会しました。彼は元々、HATE Recordsなどのレーベルをやっていたわけですが、数年前、大事故に遭い生死の狭間をさまよいました。彼の家族はすぐに駆けつけると、病院の外に車を止めて、車内に何日も泊まりStachelが目を覚ますのをひたすら待っていたそうです。そして世界中のパンクスから届けられた義援金やメッセージの数々を彼は目にして、パンクの友達も含めた"家族"こそが自分にとって最も大切なもの。それで現在のLA FAMILIAとレーベル名を改めたそうです。

そんな話しをYELLOW DOG RECORDSからすぐの場所にある、HOPS AND BARLEYというバーで聞きました。そこの経営者



HOPS AND BARLEY

PhilippはYELLOW DOGのスタッフでもあるのですが、ブラウン・マイスターの資格を取得すると自らバーの地下にビール製造の設備をこしらえて、オリジナルのビールを作っているとのこと。Stachelとは友達のようで、その製造過程を見せてもらいながら出来立てのビールやサイダーを沢山頂きます。もちろん滅茶苦茶美味しいです♪

違うバーではパンク・パーティもやっているよ、とStachelが言うのでそちらへ移動。そこには、Goranやex BOMBENALARMメンバーにSTATIC SHOCK Recordsのスタッフ、それにベルリンに現在住んでいるex HARUM SCARUMメンバーなんかが。合計8人いましたが、そのうち3人が同じ柄のMASS HYSTERI Tシャツを着ています(笑)。「もうかなりビッグなバンドになっていて、小さいバーとかじゃあいつらライヴをやらないん

観光地1　ラモーンズ・ミュージアム



観光地2　よく分かんないけど立派な門



観光地3　ベルリンの壁を利用したアート・ギャラリー



だ」と文句を言いつつも好きみたいです。ここでもビールを呑んでいたのですが、いい加減呑み疲れ、眠くなってきたところでGoranがそろそろ帰ると言い出したのでご一緒させてもらいます。帰り道、「なんでドイツはビールが安いの？」と小学生レベルの素朴な質問をぶつけたところ、「高くしたら暴動が起きて政治家の首が飛ぶからさ」と。なるほど。ド素人考えですが、日本ではビールにかけられている酒税が非常に高い。そこで「下げろー！バカヤロー！」と声を上げるのではなく、発泡酒というものを開発してお上に楯突くことなくうまいことかわす。発泡酒の税率も上げられれば、更に第三のビールというものまで開発しちゃう。その姿勢に、国民性が感じられるような、全然関係ないような。マクドナルドの前を通ったところで、「店のほう見るなよ。ナチスキンがいる」とGoran。おー、本当にいるんだ。ちょっとビックリ。

　こうして、なんだかんだと時は刻まれ、旅も残り一週間(毎日あったことを書いているとキリがないので飛ばします)。そろそろポーランドのヴロツワフへ、当地のレーベルTRUJACA　FALAオススメのフェス(出演バンドは不明)を見に移動です！

　駅の国際線切符売り場へと行くと、ヴロツワフまでは6時間ほどで価格は70ユーロ。高いな。そう思いながらも財布から100ユーロ札を取り出します。…が、あれ？一度、売り場を離れます。そして財布の中をもう一度見ました。うーん、お金、全然なくない(汗)？持っている100ユーロ札、たったの2枚？

　ここに来て衝撃の事実。僕の財布の中ではギリシャばりの経済破綻が人知れず起こっていたのです！なんてこった！迷子にならないようKØPIや、書かなかったですが他のライヴをやる会場も全て前日に下調べしておいたのです。なのでベルリンじゃ一度も迷わなかったのですが、肝心の経済対策がおざなりになっていました。極貧ホットドッグを食べる、という一点のみで、日本より遥かに高い煙草を一日二箱吸い、安いから、とビールやサイダーやラムは毎日昼から呑んでいました。そのツケが、ここに来て廻ってくるとは…。

　前号で書いたEL BANDAのライヴ、そしてポーランドのフェスという、二大イベントに行けない僕って一体…。何しにここまで来たのでしょう(汗)。よし、こうなったらヒッチハイクだ！という根性はもちろん欠如しているので、とぼとぼ宿に戻り「お、忘れものかい？ハハハ」と陽気な受付に、「あんのー、もう一週間泊まりたいんですが…」。「OK！ベルリンが気に入ったんだね。嬉しいよ、ハハハ」。返す言葉がありません…。

　その後、無為この上ない一週間をボケーと過ごし(時間を持て余していたので、RAMONES MUSEUM BERLINへ行ったのですが、入場料として3.5ユーロを要求されたので、「あ、いけね、僕RAMONES好きじゃなかった」と引き返したり、観光地へ行って、物乞いの女性に声をかけられ、「英語喋る？」「ノー」「ドイツ語は？」「ノー」「(英語で)小銭ちょうだい」「ノー」「お願い」「ノー」「じゃ煙草ちょうだい」「ノー」「もうノーしか言えないの！」「ノー」「ノーノーノー(怒)!!」と、ノーノー合戦して遊んだり…。尚、食事は極貧ホットドッグのソーセージ抜き=単なるパンへと降格しました)、そうして帰国日を迎えました。なに、最後にきてこのオチ…。

　が、ベルリン→チェコ→日本とすんなり着いて、いやー、なんだかんだ言っても楽しかったよ。また行くぜ！待ってろヨーロッパ！Cheers!完！

　とならないのは、やはり日頃の行いが悪いせいなのでしょうか？さぁ、最後にトラブルが待っていました(泣)！

　最終日は朝5時の電車でプラハへと戻ります。プラハ着は9時半の予定。プラハ本駅から空港まではバスで60分もみていれば余裕なので、10時半には空港に着きます。離陸は13時。とても堅実なスケジュールです。

　電車はコンパートメント(個室)で、朝早いせいか僕一人で独占です。車窓から、ベルリンに別れを告げます。さようならベルリン。無駄に長居したから、もうしばらくは来ないよ…。

　5時、出発の時間となりました。が、動きません。まぁ、こちらでは5分10分程度は遅れたうちには入りません。全然余裕です。5時30分。まだ出発しません。駅員にいつ出るのか訊ねます。答えは、「分からん」。6時。1ミリたりとも微動だにしません。悲しくなってきて涙目に。6時30分。飛行機に乗り遅れるのでは、という恐怖からパニックに。なんで、どうしてこういうことが起こる？この世には神も仏もいないのか？イヤッ！動いてー(泣)！

　6時40分、何事もなかったかのように出発進行。

　う、動いたーッ!!まるで電車が走るということが、奇跡のように感じられました。検札に来た車掌さんに、赤い目のまま訊ねます。「プ、プラハには、何時、ワタシ、着きますか？」「1時間遅れで着くよ」。特に悪びれた様子もなく、フツーに答えてくれました。でも、1時間40分の遅れを、かっ飛ばして1時間まで短縮してくれるのね。それなら、着いたらすぐタクシー捕まえれば大丈夫かな。良かった…。それはそれはけたたましく飛ばすのだろう、そう信じていたのですが、駅以外の場所で度々、5分、10分程度の停止を繰り返しています。これで、本当に1時間遅れの10時半に着くのか…。

　ヤキモキし過ぎて、「俺は大丈夫。必ず日本に帰れる。I'm OK, I'm OK」と呟き出します。独り自己啓発セミナー状態です。そうして、ようやくプラハ本駅到着！ただいまの時刻、11時半。結局2時間遅れになっているじゃねーかよ!!バカヤローッ!!

　ホームを走り、駅の地下を駆け抜け、車道沿いの出口に出ます！タクシーーー!!!物凄い眼力と挙手で止めて、「空港!!」と叫びます。「ベルリンから来たんだけど電車が2時間も遅れたんだ！空港に急いでくれ！時間がない！」とまくしたてると、運転手は「ベルリンから来たのか？え、お前ドイツ人？」。…否定する元気もありません。生まれて初めてオーマイガッ！と呟いて頭を抱えたり、腕時計を見てため息をついたり、もう全身で絶望感を表現していると、「飛ばすから40分で着く！それで大丈夫か？」とやる気になってくれました。そうなると１２時１０分頃空港着。そこからチェックインして、出国検査やセキュリティ・チェックやら、…間に合うのか？分からないが、行くしかない！

　本当に物凄いスピードで走ってくれて、キッチリ予告通りに到着！「ありがとう！あなたは素晴らしい!!」と感謝を伝え、空港のカウンターへ一直線に走りチェックイン！急かされるかと思いきや、あれ、普通の対応。フライト・スケジュールを見ると、…出発時間が大幅に遅れているようでした。ハハハ…。

　こうして無事にチェコを飛び立ち、フランスを経由して、恥ずかしながら戻って参りました次第です。

　振り返ると、初めての海外を独りで一ヶ月はちょっと欲張り過ぎでした(汗)。当初の目的の大部分を断念するという、グダグダこの上ない旅でしたが、海外のパンクス(ブルノとベルリンだけですが…)の日常が少しだけ見えてきて、そして僅かではありますが、それを彼らと共有することが出来たと思います。フェスでもなんでもないド平日のライヴ、そのだらけきった雰囲気、煙草をせびられること数十回、全てが良い思い出です。

　最後に、あるバンドのメンバーさんから出国前に「ジャコメッティ」(みすず書房)という本を頂きました[※ジャコメッティは細長い人物像の彫刻などで有名な芸術家]。そこに記されていた一節で、無理矢理締めさせて頂きます。

　「自己の内部への旅行を伴わない旅行は何にもならない」

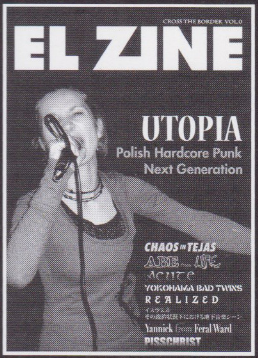
always tedious editor's notes

やれば月に2冊出せるもんだね♪…と書いてみましたが、実際には全ページのデータを作り終えて、ようやくここに取りかかっている段階。これから出力して校正してデータ修正して再出力して再校して…をしないといけません。入稿のデッドラインまで30時間。果たして間に合うかどうか…。
←こちらのレポートでは、さも以前から知っていたかのようにベルリンのレコード屋さんやバーに行ったりしていますが、実は全部HEARTFIRSTのFloと5月に会った時、彼から教えてもらったのです。横浜は関内・馬車道のサイゼリアで呑みながら話していたのですが、確か2年前はNAT RECORDS近くのサイゼリアで、KRIEGSHOGのMasakiくんを交えて呑んだ記憶が…。来年こそは、もっと良い店に連れていってあげようと固く心に誓った次第です。それと前号ではレポートではなく珍道中でしたが、ベルリンでは平穏な日々を過ごしていたので、今号は至って普通のレポートになってしまいました。笑える内容を期待していた読者の方々、すみません。
ともあれ、1年間お付き合い頂いた皆さん、どうもありがとうございました!また次号で! Prost!!

発行者　山路健二

次号の発売は…9月頭くらい　※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した
EL ZINE vol.7　2010年7月31日発行　HP・BLOG・MYSPACE・MIXI・TWITTER→NO FUN　E-MAIL→unno13@gmail.com

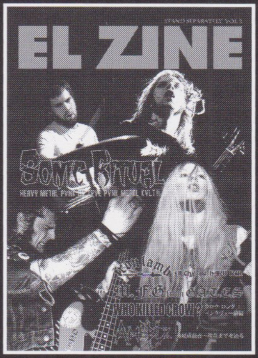
BACK ISSUES



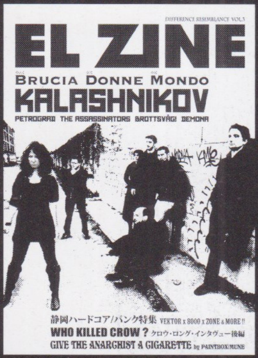
VOL.0 UTOPIA



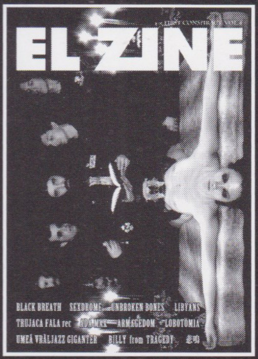
VOL.1 MOONLESS



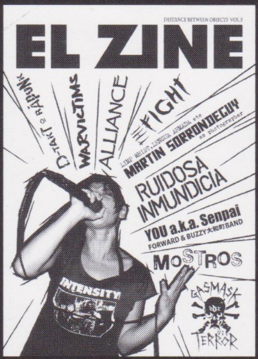
VOL.2 SONIC RITUAL



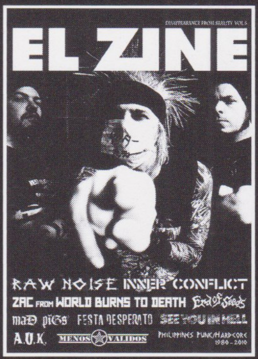
VOL.3 KALASHNIKOV



VOL.4 BLACK BREATH



VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA



VOL.6 RAW NOISE

PRICE :
ALL Five Hundreds Yen

SOLD OUT :
Vol. ZERO and Vol. ONE

SHOP and DISTRO

直納しているレコード屋さんetc　ANSWER(名古屋)　BASE(東京・高円寺)　BOY(東京・高円寺)　DISK UNION(関東圏)
G-SIDE(浜松/ライヴハウス)　HARDCORE KITCHEN(神戸)　K-CLUB(高知)　record KNOX(水戸)　MISERY(広島)　NAT(東京・西新宿)
PUNK&DESTROY(大阪)　TIME BOMB(大阪)　WOODY(新潟/ライヴハウス)

ディストロして頂いている方々　FUJIさん(REALIZED/北海道)　SOUICHIさん(UNDER THE SURFACE/東京)　YUさん(SKIZOPHRENIA/津山)
はっちゃん(BURST HEAD/沖縄)　紺野さん(SPROUT RECORDS/仙台)　ONIGIRIさん(WATERSLIDE/東京)　YUKIさん(SP RECORDS/東京)
CR JAPAN(東京)　MCR COMPANY(京都)

POLITICS LATER! 20TH ANNIVERSARY OF HEARTFIRST RECORDS! HEART FIRST, POLITICS LATER!

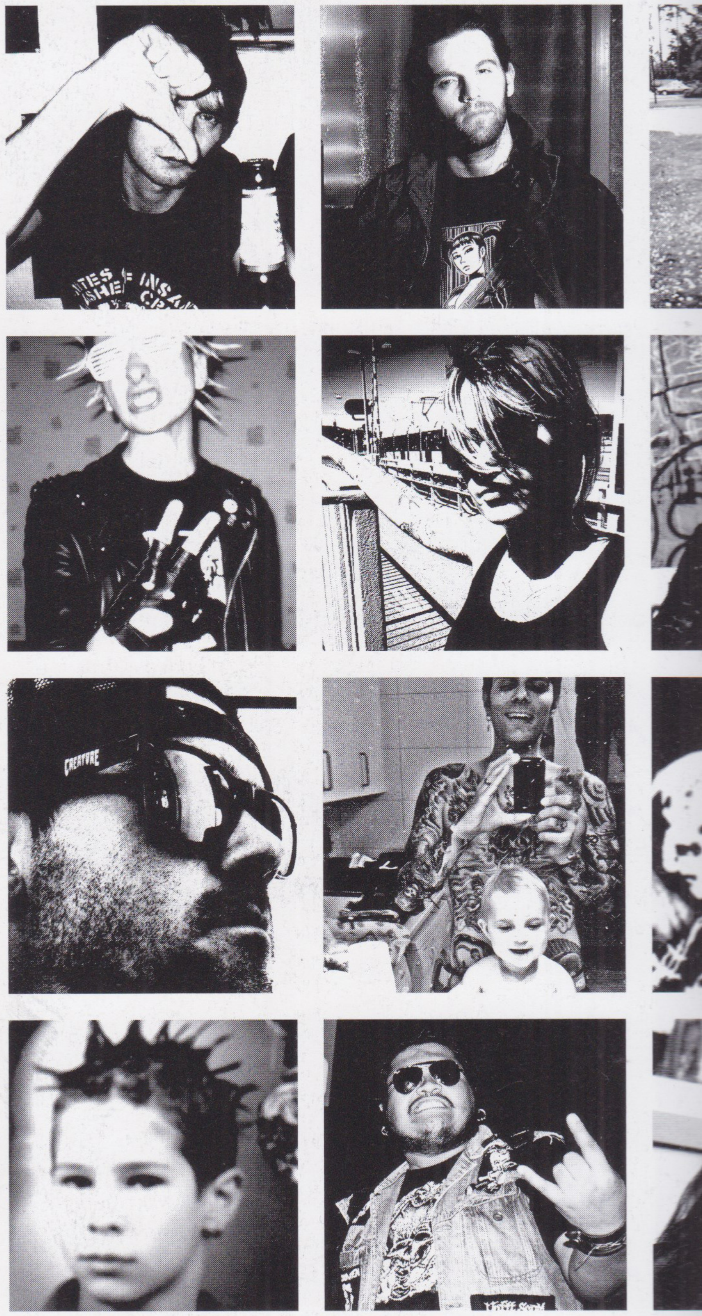
EL ZINE ¥500

...ARY OF HEARTFIRST RECORDS! HEAR...

EL ZINE

ONE YEAR OF HELL VOL.7

EL Z



WONDERFUL or SCUM

PERSONAL PUNK h